大岱沢A遺跡

—上ノ国町八幡野第1地区道営農免農道
整備事業用地内遺跡発掘調査報告書—

1987.3
北海道上ノ国町教育委員会

本文目次

I．緒　言……1
　a．調査要項
　b．調査体制
　c．作業分担
　d．謝　辞

II．遺跡の位置及び周辺の遺跡……3
　a．遺跡の位置
　b．周辺の遺跡

III．調査状況……7
　a．調査の経過
　b．調査の方法

IV．遺跡の層序……10
　a．基本層序
　b．セクションの実測
　c．層位と出土遺物の概要

V．遺構とその出土遺物……12
　a．フラスコ状ピット
　b．土　壙
　c．Tピット
　d．焼　土

VI．遺構外出土の遺物……31
　a．土　器
　b．土製品
　c．石器・石製品
　d．その他の遺物

VII．総　括……67
　a．遺　構
　　(1)　検出遺構の概要
　　(2)　フラスコ状ピットについて
　b．遺　物
　　(1)　土器について
　　(2)　石器・石製品について
　c．遺跡の性格等について

写真図版目次

PL.I　大岱沢A遺跡空中写真
PL.II　発掘調査状況，大岱沢A遺跡遠景
PL.III　調査区北東部土堤の状況，調査区東部土堤の状況
PL.IV　土堤の状況とそのセクション，遺跡の標準層序
PL.V　ヒスイの大珠出土状況，ヒスイの大珠（左）・メノウの原石（右）
PL.VI　遺物出土状況
PL.VII　P1遺物出土状況，P7遺構検出状況
PL.VIII　P3覆土の大型礫出土状況，P3遺構完掘状況
PL.IX　P5覆土堆積状況，P5・P9遺構検出状況
PL.X　P4上層遺構礫石器出土状況，P4伴出遺物出土状況，P4完掘状況
PL.XI　P2セクション・遺構検出状況，P6・P10・P14～P16遺構検出状況，P12・P17セクション
PL.XII　フラスコ状ピットと土壙出土の遺物（P1・P3・P5）
PL.XIII　P4出土の遺物
PL.XIV　土壙とTピット出土の遺物（P6・P8・P12・P13・P18）
PL.XV　遺構外出土土器（Fig. 39～41）
PL.XVI　〃　（Fig. 42・43）
PL.XVII　〃　（Fig. 44・45）
PL.XVIII　〃　（Fig. 46・47）
PL.XIX　〃　（Fig. 48・49），土製品（Fig. 50）
PL.XX　剝片石器（Fig. 51～53）
PL.XXI　剝片石器（Fig. 54～56）
PL.XXII　石器・石製品（Fig. 57～59・64）
PL.XXIII　礫石器（Fig. 60～62）
PL.XXIV　〃　（Fig. 62・63）
PL.XXV　メノウの原石と剝片

挿図目次

Fig. 1　大岱沢A遺跡の位置 …… 2
Fig. 2　大岱沢A遺跡と周辺の地形 …… 4
Fig. 3　天の川流域の主要遺跡 …… 5
Fig. 4　Gridの配置と地層断面図の位置 …… 8
Fig. 5　検出遺構の分布と地形 …… 8
Fig. 6　大岱沢A遺跡主要南北セクション …… 9
Fig. 7　大岱沢A遺跡東西セクション …… 10
Fig. 8　P3遺物出土並びに遺構検出状況 …… 12
Fig. 9　P3出土の土器 …… 13
Fig. 10　P5・P9検出状況 …… 14
Fig. 11　P5出土の遺物 …… 15
Fig. 12　P1検出状況 …… 15
Fig. 13　P1出土の土器 …… 16
Fig. 14　P1出土の石器 …… 16
Fig. 15　P4上層遺構検出状況 …… 17
Fig. 16　P4出土の遺物 …… 18
Fig. 17　P4検出状況 …… 19
Fig. 18　P4出土の遺物 …… 20
Fig. 19　P7検出状況 …… 20
Fig. 20　P8検出状況 …… 21
Fig. 21　P11検出状況 …… 21
Fig. 22　P18検出状況 …… 22
Fig. 23　P8・P18出土の遺物 …… 22
Fig. 24　P2検出状況 …… 23
Fig. 25　P6・P14検出状況 …… 24
Fig. 26　P14のセクションとエレベーション　25
Fig. 27　P10検出状況 …… 25
Fig. 28　P12検出状況 …… 26
Fig. 29　P13検出状況 …… 26
Fig. 30　P15検出状況 …… 27
Fig. 31　P16検出状況 …… 28
Fig. 32　P17検出状況 …… 28
Fig. 33　Tピット出土の覆土遺物 …… 29
Fig. 34　FP1検出状況 …… 30
Fig. 35　FP2検出状況 …… 30
Fig. 36　FP3検出状況 …… 30
Fig. 37　主要土器の分布，遺構外出土土器重量分布 …… 32
Fig. 38　土器の属性 …… 33
Fig. 39　遺構外出土土器(1) …… 34
Fig. 40　〃　(2) …… 35
Fig. 41　〃　(3) …… 36
Fig. 42　〃　(4) …… 37
Fig. 43　〃　(5) …… 38
Fig. 44　〃　(6) …… 39
Fig. 45　〃　(7) …… 40
Fig. 46　〃　(8) …… 41
Fig. 47　〃　(9) …… 42
Fig. 48　〃　(10) …… 43
Fig. 49　〃　(11) …… 44
Fig. 50　土製品 …… 45
Fig. 51　剥片石器(1) …… 47
Fig. 52　〃　(2) …… 48
Fig. 53　〃　(3) …… 49
Fig. 54　〃　(4) …… 51
Fig. 55　〃　(5) …… 52
Fig. 56　〃　(6) …… 53
Fig. 57　〃　(7) …… 54
Fig. 58　〃　(8) …… 55
Fig. 59　石　斧 …… 56
Fig. 60　礫石器　(1) …… 57
Fig. 61　〃　(2) …… 58
Fig. 62　〃　(3) …… 59
Fig. 63　〃　(4) …… 60
Fig. 64　石製品 …… 61
Fig. 65　遺構外出土石器分布図 …… 62
Fig. 66　遺構外出土の剥片石器と剥片の重量分布 …… 62
Fig. 67　剥片石器類長幅相関図 …… 63
Fig. 68　石鏃長幅相関図 …… 63
Fig. 69　石鏃・石槍の長幅比・尖頭部比・尖頭部開き角度 …… 63
Fig. 70　扁平打製石器の長幅比 …… 63
Fig. 71　扁平打製石器長幅相関図 …… 63
Fig. 72　大岱沢A遺跡出土石器組成図 …… 63

I 緒　　言

a．調査要項

本書は「上ノ国町八幡野第1地区道営農免農道整備事業」の用地内に所在する大岱沢A遺跡の発掘調査報告書である。

調査は、桧山支庁が上ノ国町に委託し実施された。遺跡の所在地は、上ノ国町字勝山106－2（長谷川一男所有），同113－1（小瀧徳栄　同）にまたがっている。

発掘調査面積は、720㎡。発掘調査は、1986年8月27日～10月3日（伐採・グリッド設定等を含む）に亘って実施した。

b．調査体制

本調査の主体者は、上ノ国町教育委員会（教育長　布施潤一郎）であり、調査並びにそれに伴う事務的業務の推進にあたっては、以下の体制で臨んだ。

上ノ国町教育委員会　文化課　課長　関　登志夫
　　〃　　〃　学芸員　松崎水穂
　　〃　　〃　　〃　　斉藤邦典
調査担当者　宮　宏明（札幌学院大学人文学部研究生・日本考古学協会員）
調　査　員　鈴木正語，小田川哲彦，松本尚久
事　務　長　久末久義

発掘調査及び整理作業においては、上ノ国町在住の方々の御助力を得た。以下に作業員の方々の氏名を記して感謝申し上げる次第です。

川口泰子，若狭孝子，七尾美也，沢村豊子，
三浦ひとみ，薄田百合子，永田トモエ，
工藤恵美子，鷲田フミ子，住吉春美，斉藤綾子，
下倉美代子，土谷早苗，室谷佐代子，竹内江美子，
伊勢寿子，松本津枝子，宮上幸子，土本マリ子，
草間美波子，木村貴子，辻都茂子，笠谷奈智子，
長谷川フミ子，鈴木辻子，長内須美子，蛸崎容子，
（以上27名）

c．作業分担

本書の編集は宮　宏明，執筆は以下の者が分担した。尚、文末には文責者を記した。

鈴木正語　（V・VI_a・$VII_{b(2)}$・VI_d）
小田川哲彦（VI_c）
松本尚久　（II・III・$VII_{a(2)}$）
宮　宏明　（I・IV・V・VI_b，$VII_{a(1)}$，$_{b(1)}$・$_{(3)}$，$_c$）

主な作業の分担は、以下のとおりである。

遺跡の写真撮影　小田川，松本，宮
室内での遺物の写真撮影　鈴木
石器・石核等の実測　鈴木，小田川，土本，松本
　　〃　　のトレース　草間，斉藤，土本
土器・土製品等の実測　松本，長谷川，斉藤，草間，下倉
　　〃　　のトレース　草間，斉藤，松本
土器拓影　土本
拓影土器断面の実測とトレース　宮上，草間，斉藤
土器復原　鈴木，工藤
遺物の集計　松本，辻，長谷川，宮上
石器・石核・剥片等の計測・計量　小田川，松本，宮上，長谷川

d．謝　辞

発掘調査の推進と本書の作成にあたっては、以下の機関と各位より多大の御指導・御助力を賜りました。記して感謝申し上げる次第です。（順不同）

北海道教育庁文化課，北海道埋蔵文化財センター，青森県教育庁文化課，桧山支庁耕地課・耕地管理課，上ノ国町役場耕地課

竹田輝雄，伊藤庄吉，森田知忠，木村尚俊，
越田賢一郎，大沼忠春，鬼柳　彰，千葉英一，
工藤　大，鶴丸俊明，大場利夫，千代　肇，
久保　泰，高橋豊彦，藤田　登，沢　四郎，
蛯子千代志，石川　朗，小笠原忠久，三浦孝一，
巻口宏行，中西政道，小西信夫，木村　敦，
矢代直蔵，片石行雄，金子　広，片石　明，
長谷川一夫，岩田与助，小瀧徳栄（故人），
松下　　亘

（宮）

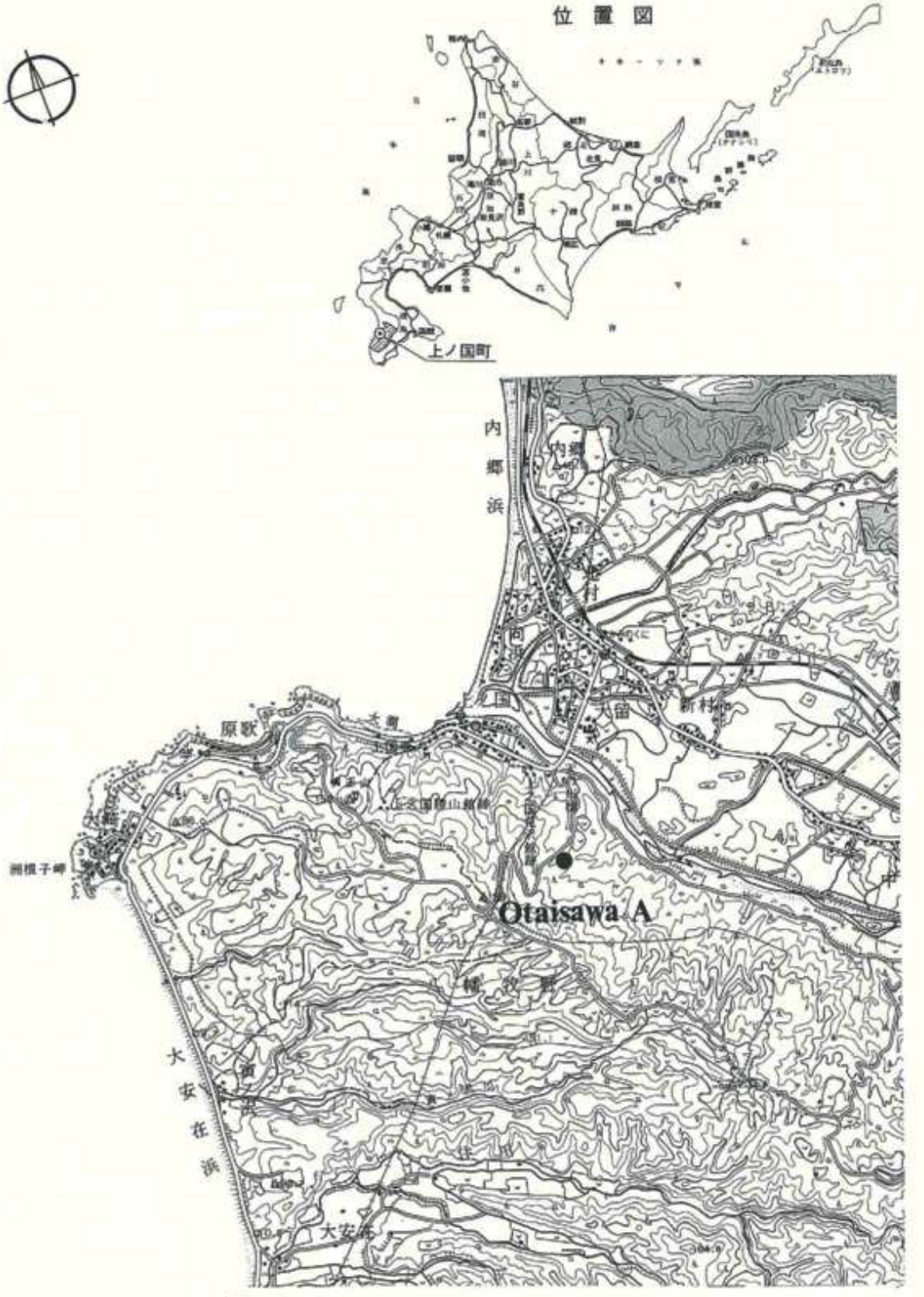


Fig. 1　大岱沢A遺跡の位置（5万分の1）

II　遺跡の位置及び周辺の遺跡

a．遺跡の位置

上ノ国町は渡島半島の西南部桧山管内の最南端に位置する。西は日本海より奥尻島・渡島大島を望み、北は江差町、南は松前町に接する。また、東は袴腰岳（699m），七ツ岳（957m），大千軒岳（1,027m）ら渡島山地の高峰を分水嶺にして津軽海峡側の木古内、知内町に接する。町の中央部は海抜500m前後の渡島山地の山々によって占められその裾野に続く丘陵は海岸線近くまでせり出している。本町は桧山管内で最大の面積（546.5km²）を有するが、前述したような地勢から平野部は全面積の１割にもみたない。このため諸集落は海岸線と河川流域の僅かな平野部に点在して発達した。明治初期の本町は７ヵ村に分かれており、明治35年に統合して今日に至っている。

町の北部には山間部を開析して西北に流れる天の川がある。天の川下流の右岸には幅２kmの沖積平野が広がり、稔り豊かな水田地帯を形成している。他方、天の川下流の左岸は太平山（363m）裾野から夷王山に続く丘陵がせまっている。本遺跡はこの丘陵地上にあり、天の川河口より約1.3km南に位置する。遺跡をのせる丘陵の西側は沢状地形をなし急崖となっている。近年、この沢沿いに道路がつけられたため、崖はさらに削られ地山を露出させている。遺跡はこの崖渕に沿って南北に長く、標高55mの南端近くから南北双方に傾斜している。北側は緩斜面であり、江差町から大成町に続く海岸線が眺望できる。一方、南側は急斜面をなして崖に続いている。

なお、北側斜面には高さ１m程の土堤が東西に横断して崖沿いに伸びている。この土堤は土地所有者である小瀧徳栄氏が土地を購入した際にその境界に防風壁として築いたものといわれ、遺跡の周囲700mに及んでいる。

遺跡名である大岱沢の地名は遺跡の西側の沢に由来するものと思われるが詳細は定かではない。遺跡の周辺には大岱・小岱・花見岱等の地名がつけられており、大小いくつもの沢が丘陵地を刻み台地を形成しているこの地域の地勢よりつけられたものと考えられる。

b．周辺の遺跡

本遺跡の西側に所在する沢は遺跡の北端より約50m前方で南側に湾曲して天の川に至る。この沢をはさんだ対岸の台地には大岱遺跡、大岱沢Ｂ遺跡があり、その沢向いには小岱遺跡が所在する。大岱遺跡・大岱Ｂ遺跡は縄文時代前期から晩期の遺物包蔵地で、昭和58年に範囲確認調査が行なわれている。小岱遺跡は本遺跡と同じく農道整備事業に伴なって昭和60年に緊急調査が行なわれた。同遺跡からは縄文時代中期後葉の見晴町式・森越式土器を主体として縄文時代中期前葉から晩期前葉にわたる遺物が出土し、縄文時代中期前葉から後期前葉の住居址16基、フラスコ状ピット等が検出された。小岱遺跡の約500m南西には大岱沢Ｂ遺跡が所在する。大岱沢Ｂ遺跡は本遺跡とともに昭和61年に確認されたが、範囲確認調査では先史時代の遺物とともに「寛永通宝」，銅銭，鉄銭が出土している。

これらの遺跡の立地する丘陵地は天の川左岸よりせり出した大潤の崎の孤峰夷王山に続いている。この夷王山の周辺には松前藩ゆかりの史跡が多い。小岱遺跡の約500m西側には国指定史跡の花沢館が所在する。花沢館の約１km西には松前藩の藩祖武田信広が築いた勝山館が所在する。さらに勝山館から夷王山に至る中腹には武田、蠣崎氏一族のものと推定される数百の墳墓がある。勝山館とこの墳墓は昭和27年以来学術調査が実施され、昭和54年より史跡整備事業が進められている。

なお、勝山館には縄文時代前期から中期の勝山館遺跡が所在する。同遺跡からは、かって勝山館II・III式と呼ばれた縄文時代前期から中期の土器をはじめ、円筒下層ｃ・ｄ式，円筒上層Ａ・Ｂ式に相当する土器が出土している。

現在、上ノ国町では86ヵ所の文化財包蔵地が確認されているが、これらは主に海岸段丘と天の川流域に分布している。天の川流域では本遺跡の対岸（右岸）の丘陵裾野に多くみられるが、近年、左岸でも道路整備事業に伴なって、本遺跡をはじめ新たな包蔵地が確認されている。

（松本）

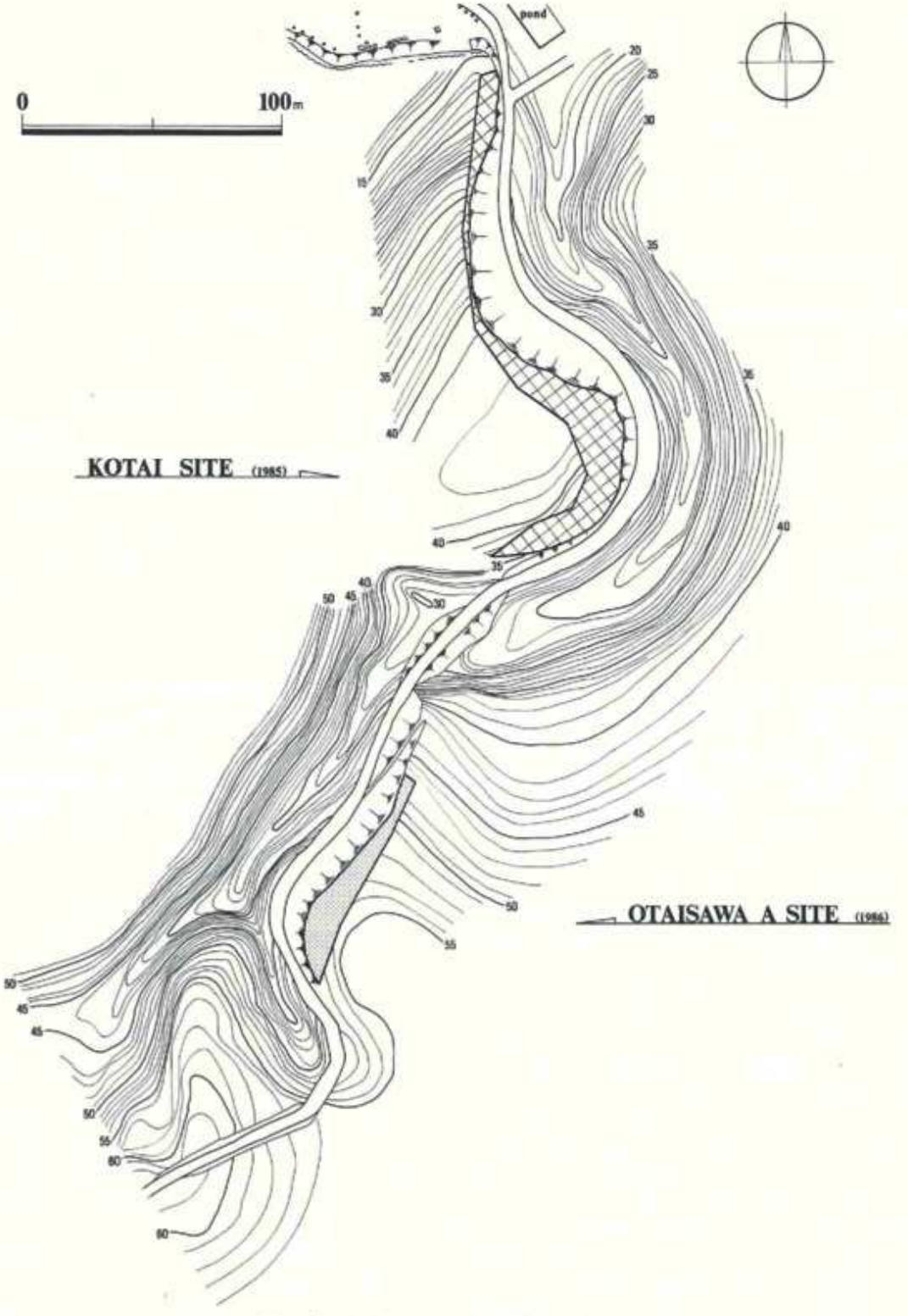
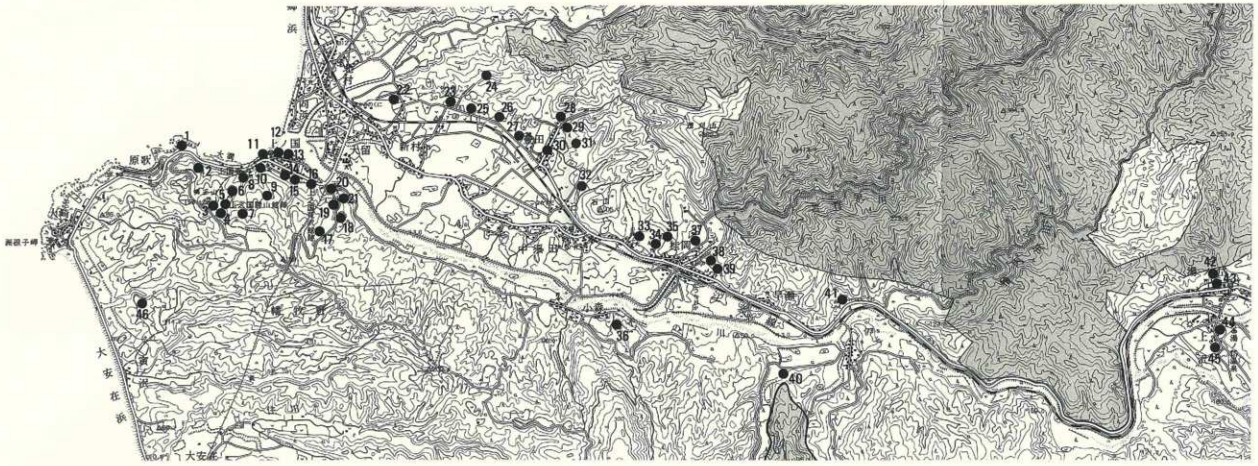


Fig. 2　大岱沢A遺跡と周辺の地形



1 大淵遺跡
2 四十九里沢A遺跡
3 夷王山墳墓群
4 ホド長根遺跡
5 勝山館遺跡
6 勝山館跡
7 桧木沢遺跡
8 竹内屋敷遺跡
9 部落畠遺跡
10 市街地後方遺跡
11 上ノ国駐在所跡遺跡
12 宮ノ沢遺跡
13 山神社跡遺跡
14 お浪沢A遺跡
15 お浪沢B遺跡
16 花沢館跡
17 大岱沢B遺跡
18 大岱沢A遺跡
19 小岱遺跡
20 大岱遺跡
21 大岱B遺跡
22 瓦場遺跡
23 新村遺跡
24 豊田西遺跡
25 新村4遺跡
26 豊田西2遺跡
27 豊田D遺跡
28 豊田C遺跡
29 豊田B遺跡
30 豊田遺跡
31 豊田E遺跡
32 石山遺跡
33 河北中グランド遺跡
34 愛宕山遺跡
35 桂岡遺跡
36 小森遺跡
37 桂岡B遺跡
38 ワラビ岱遺跡
39 ワラビ岱B遺跡
40 宮越遺跡
41 早瀬遺跡
42 湯ノ岱2遺跡
43 湯ノ岱3遺跡
44 湯ノ岱遺跡
45 上ノ沢遺跡
46 十兵衛沢遺跡

Fig. 3 天の川流域の主要遺跡 (1：50,000)

Ⅲ 調 査 状 況

a．調査の経過

本調査に先立ち８月27日より調査区の樹木の伐採と草刈、９月１日よりグリッド設定を行なった。なお、西側の調査区では崖がオーバーハングして杭が効かない個所があり、この個所は杭を東西ライン上に１m東側にずらして打ち込んだ。

翌２日は調査用具をプレハブに搬入したが、調査区西側の崖下で道路工事の作業員が熊に遭遇するというハプニングが起きた。その後、この熊は二度と姿を見せる事はなかったが、調査直前の我我に少なからぬ不安を与える事となった。

調査は３日より開始、発掘作業は排土運搬の通路を確保するために１・３・５・７・９・11・13・15ラインのグリッドより始め、順次他のラインのグリッドに移行した。但し、D17グリッド以北の調査区は土堤の一部削平を行なった後、グリッドを設定し調査に入る事にした。なお、この北側斜面の調査区は急勾配で排土場所からも離れていたが地主の御好意により、調査区のすぐ脇に排土場所を設定することができた。

調査の進行に従い、主にⅤ層から縄文時代中期中葉の遺物が多数出土した。これらの遺物は調査区西側の崖寄りに集中しており、かなりの遺物が崖の自然崩落と道路整備の土取りによって失なわれている事が予想される。なお崖の崩落は作業中も続き、特に崖のオーバーハングの著しい北側斜面では土堤の崩落の危険も生じた。このため、これらの地区は作業の安全を考慮し、亀裂の生じた地盤は崖下の人・車の往来を確認した後、切り崩し崖下より遺物を採集して片付ける事にした。

こうして９月上旬は遺物の集中するグリッドの掘り下げを中心に行なったが、雨天が続き作業の遅れが心配された事から中旬からは残りの表土剝ぎを急ぎ、遺構の確認と精査に重点を置いた。

９月12日には、B８・９グリッドで土壙のプラン（pit １）を確認、精査を行なった。16日には、C12グリッドの崖際にTピット（pit 2）を確認した。なお、Tピットは合計９基(pit ２・６・10・12～17)を検出した。さらに17日から土壙（pit ４）、18日からは、フラスコ状ピット（pit ３）の精査をそれぞれ開始した。なお、土壙は、この他に５基（pit ７～９・11・18)、フラスコ状ピットは１基(pit ５）を検出した。

こうして、９月中旬は遺構の検出に力を注いだが、覆土の色調及び固さが周囲の土と似ており、識別は常に調査員の頭を悩ませた。なお、調査中には大沼忠春・葛西智義氏（北海道埋蔵文化財センター），藤田　登氏（森町教育委員会），蛯子千代志氏（乙部町国保病院）らが来訪され御教示を賜わった。

遺構の精査が一段落ついた９月下旬は各グリッドの掘り下げを急ぐとともに、調査区東端のEライン（E７～16）にトレンチを入れセクションを実測した。各グリッドの掘り下げが進みⅥ層に達すると遺物は激減したが、未検出の遺構、遺物包含層の有無を確認するため東西ライン（１～23）に幅50cmのトレンチを入れた。結果 pit ４が掘り足りないことが判明した。また、C17・18，D17・18グリッドかは pit 18が確認された。９月末は、これら遺構の精査を主体に行なったが、この他に新たな包含層は確認されず、10月３日には全調査を終了した。

b．調査の方法

調査区は本遺跡の東側境界線上の工事用杭L24～26を南北の基準として一辺４mのグリッドを組み設定した。なお、L24以北の東側境界線は南北軸に対して5°西寄り、L26以南の東側境界線は10°東寄りである。各グリッドは東西（短軸）に西から東へアルファベット，南北（長軸）に南から北へ算用数字を配して「E１，E２…」の如く表記した。

遺物については、遺構外のものはグリッド別・層位別に取り上げ、遺構に伴うものは位置・レベル等を記録、覆土中のものについては一括して取り上げた。また、土堤より出土したものは土堤一括、崖より崩落した遺物は表面採集とした。

土層の色調の確認にあたっては、日本色研事業株式会社の『新版標準土色帖』を使用した。

写真撮影は、遺構及び主要な遺物・地層断面と調査地の全景・調査風景について実施し、モノクローム，リバーサルフィルム双方に収めた。

（松本）

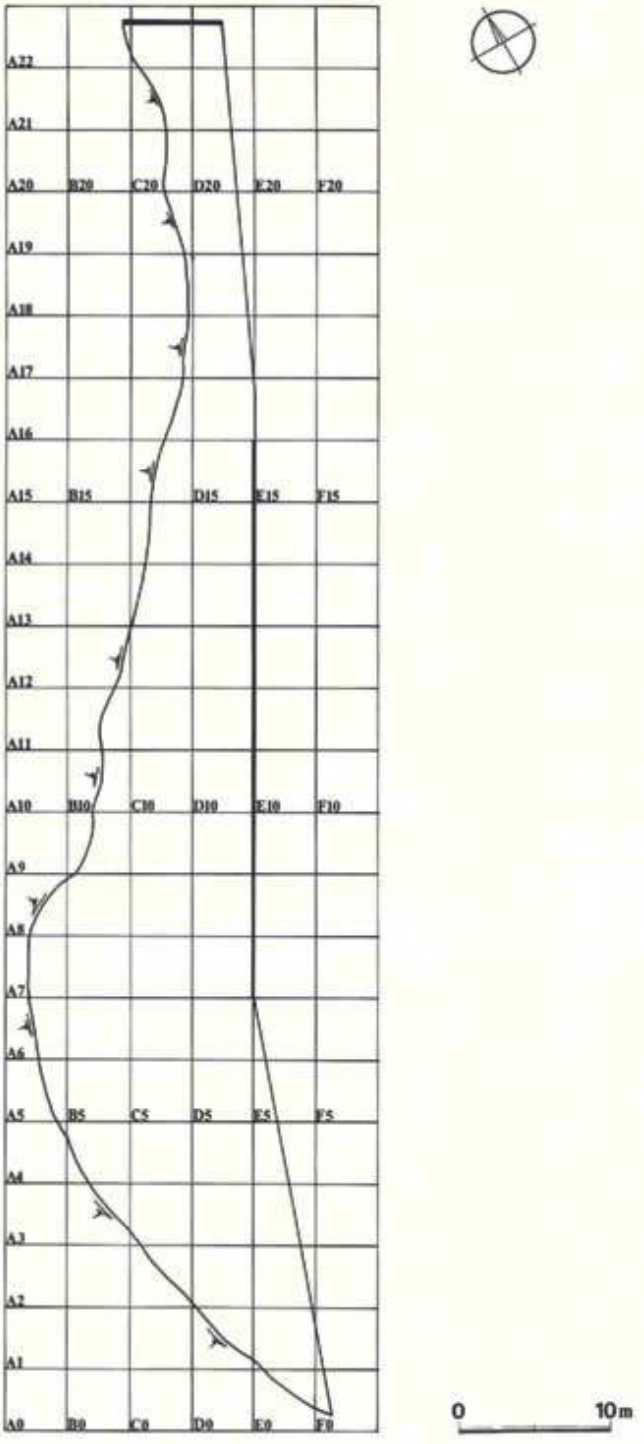


Fig. 4　Grid の配置と地層断面図の位置

Fig. 5　検出遺構の分布と地形

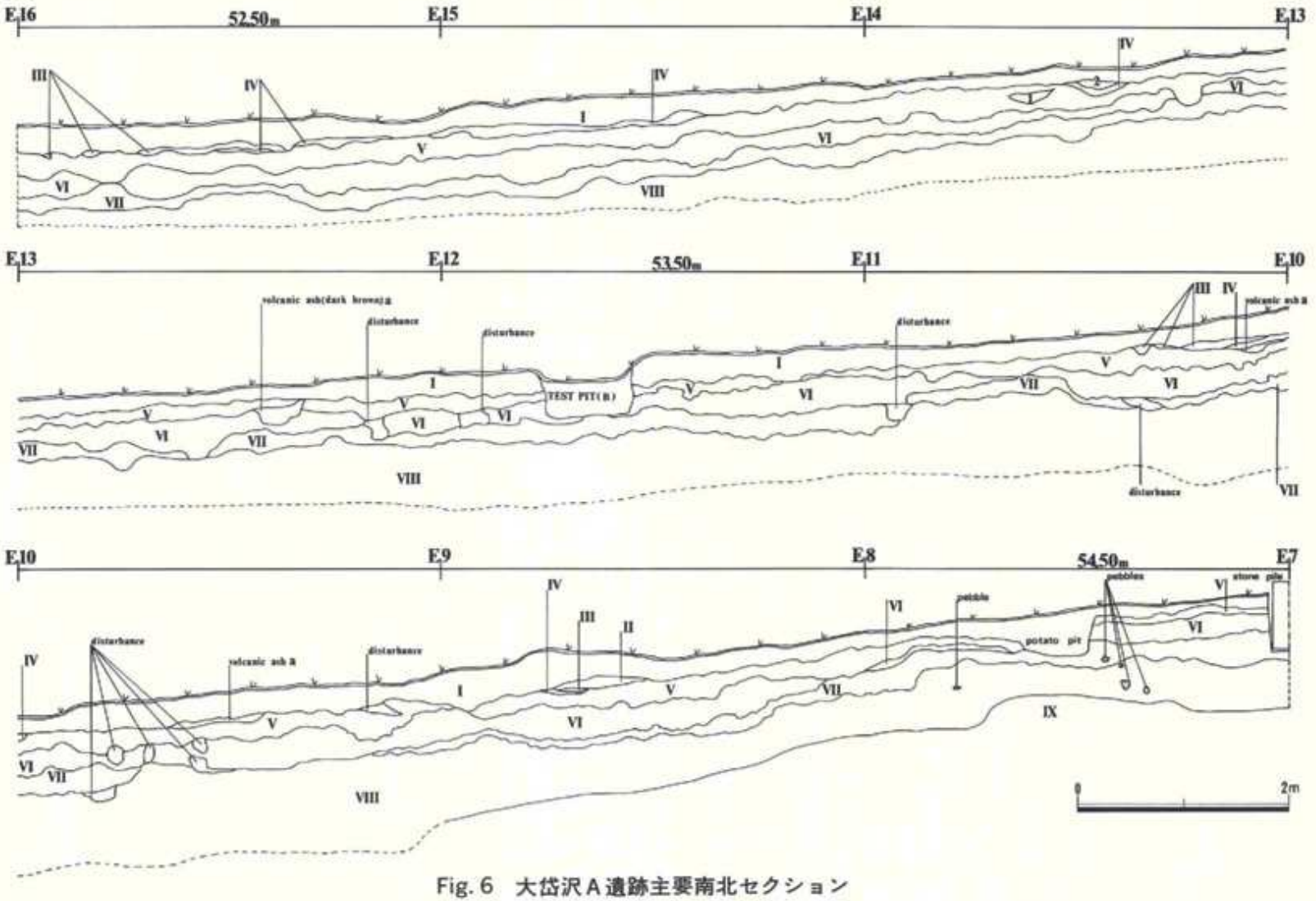


Fig. 6　大岱沢Ａ遺跡主要南北セクション

Ⅳ 遺跡の層序

a．基本層序

発掘区における基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層　黒褐色表土層，10 Y R 2/3，brownish black

Ⅱ層　黒色腐植土層，10 Y R 1.7/1，black

Ⅲ層　にぶい黄橙色火山灰，10 Y R 6/4，dull yellow orange

Ⅳ層　黒色腐植土層，7.5 Y R 2/1，black

Ⅴ層　褐色ソフトローム層，7.5 Y R 4/4，brown

Ⅵ層　明褐色ソフトローム層，7.5 Y R 5/8，bright brown

Ⅶ層　褐色漸移層，10 Y R 4/6，brown

Ⅷ層　黄褐色ハードローム層，10 Y R 5/6，yellowish brown

Ⅸ層　礫　層（凝灰岩），green～purple tuff

Ⅰ層は黒褐色の耕作による撹乱層である。笹の根が密集している。平均20～25 cmの層厚があり、調査区全面に亘って認められる。

Ⅱ層は黒色腐植土層でプライマリーなhumusである。火山灰（Ⅲ層）の上位にあるが、発掘区で調められた個所は少なく、遺構上部や自然の窪みに認められるのみである。0～3 cmの層厚がある。

Ⅲ層は、にぶい黄橙色火山層でＯＳ－ａといわれているものである。Ⅱ層と同様に遺構上部や自然の窪みに多く認められる。Ⅱ層よりは若干層厚（0～5 cm）があり、確認個所も多い。

Ⅳ層は、黒色腐植土層で火山灰（Ⅲ層）の下位にある。層厚は、0～5 cmである。

Ⅴ層は、褐色のソフトローム層で、本遺跡の主たる遺物包含層である。層厚は10～20 cmであり、調査区全面に亘って認められる。

Ⅵ層は、明褐色のソフトローム層である。Ⅵ層上部からも若干の遺物が出土する。層厚は、10～30 cmであり、調査区全面に亘って認められる。

Ⅶ層は、褐色の漸移層で、ハードロームのブロックが混入するソフトロームとハードロームの間層である。細粒の炭化物も若干含まれている。層厚は、10～30 cmであり、調査区全面に亘って認められる。

Ⅷ層は、黄褐色のハードローム層である。調査区全面に亘って認められる。無遺物層であり、層厚は50～150 cmと厚い。

Ⅸ層は、凝灰岩によって形成されている礫層である。紫・赤・青等、カラフルな凝灰岩が多く認められる。

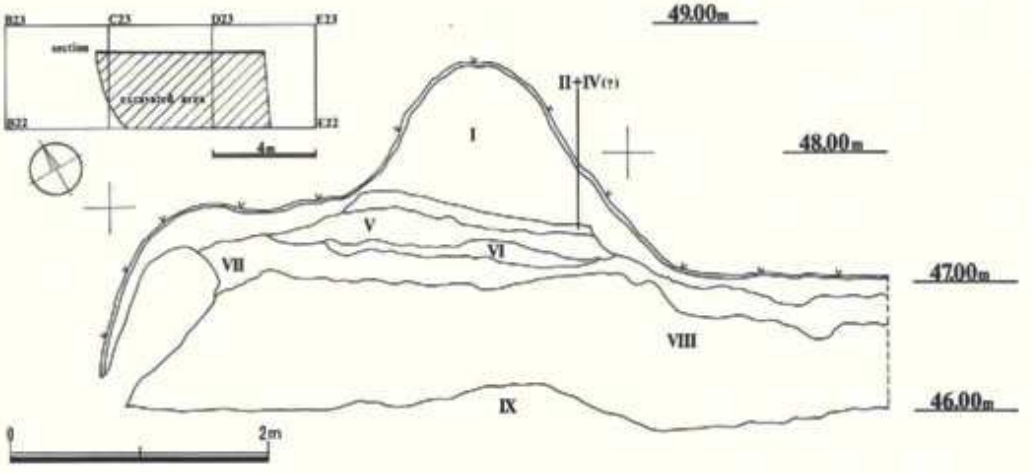


Fig. 7　大岱沢Ａ遺跡東西セクション（中央部は土堤）

b．セクションの実測

セクションの実測位置は、Fig 4のようにE 7～E 16及びB 22～D 22 Gridの太線部分について実施した。セクションの実測面には幅50 cmのトレンチを設定し礫層上面まで掘り下げた。

E 8～E 7（Fig 6）の中間に、いも穴のセクションがみられるように、発掘区では東側の53～54 mのコンタ付近で5・6ヵ所検出された。これらからもわかるとおりI層から出土した遺物は長年の耕作や前述のような撹乱によるものがほとんどであるとみられる。

また、下位において撹乱とした部分は、ほとんどが木の根によるものである。

Fig 6における標準層序以外のものを以下に説明する。

1．紫色のタフ細粒を混入

2．褐色粘土（2次堆積？）

火山灰a　pit 3の上位ほかで確認されることでもわかるように、窪みに流れ込み堆積したものとみられる。遺構覆土上部にみられる場合が多い。層位的にはV層の上位に存在する。褐色（10 Y R 3/4）を呈し、粒子が細かい火山灰である。降下年代は、縄文時代中期以降とみられる。

II～IV層は、Fig 6・7でも明らかなように、発掘区においては所々でしか認められない。

Fig. 7は、松本報文でも前述したように土堤を切断したセクションである。土堤の高さは、両側で約1 m，東側で約1.5 mを計る。土堤は周辺のII層～VI層の土を積み上げたものであり、土堤部分のI層はII～VI層が混入し、縞状に堆積している。

C．層位と出土遺物の概要

遺物は、I・IV・V・VIの各層から出土しているが、本遺跡の主たる遺物包含層はV層である。V層からは、3,531点の遺物が出土している。本遺跡の出土遺物総数の52.3%を占める。プライマリーな層位から出土した遺物（IV～VI層）でいえば実に92.5%がV層からの出土で占められていることになる。

本遺跡では、合計7,254点の遺物が出土した。うち、6,771点が遺構外から、483点が遺構内から出土した。6,771点の内訳は、I層2,936点（43.4%），IV層245点（3.6%），V層3,547点（52.4%），VI層43点（0.6%）である。I層の出土比率が40%を超えるということは、撹乱が下位に及んでいたということを示していよう。本来、IV・V層等に包蔵されていたものが、ほとんどであったとみられる。

IV～VI層のプライマリー遺物だけでの内訳は、IV層6.4%（245点），V層92.5%（3,547点），VI層1.1%（43点）である。（宮）

V　遺構とその出土遺物

a．フラスコ状ピット

今回の調査によって２基のフラスコ状ピットが検出された。両ピットとも大型で開壙部は卵円形を呈するものである。東北地方や北海道南部で当該遺構の報告例が増加する傾向にあり、遺構の性格も貯蔵穴とするのが一般的になってきている。以下、ピットごとに詳述する。

ピット３　口径175×150cm，底径233×210cm，深さ195cmほどの大きさで、セクションは覆土の上部を除いて人為的な堆積状況を示している。Fig. 8の右上のセクションが不完全なのは、当初、十字にセクションをとろうとした結果掘り下げることができず中断したものである。深さが２mにもなろうとは予想しえなかったからであり、担当者のミスである。

Ｐ３からは合計81点の遺物が出土した。うち、壙底部からは土器及び土器片５点，骨片８点，リタッチド・フレーク１点，炭化物２点が出土した。覆土からは安山岩の大型礫（37.5kg）をはじめ大小６点の礫・破砕礫が出土した。破砕した後にピットに投げこんだものとみられる。大型礫を除く礫には熱を受けているものが多く周辺で使用して

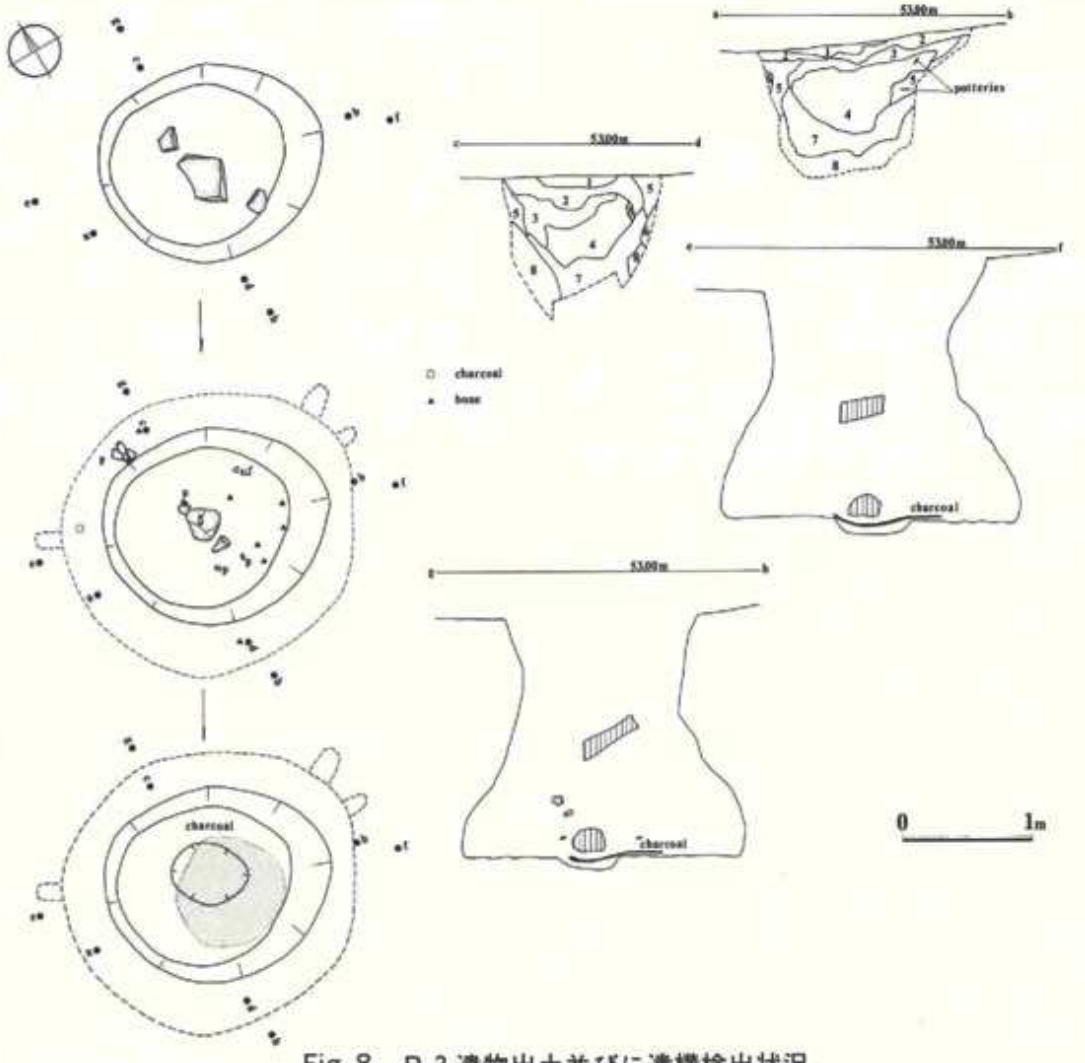


Fig. 8　Ｐ３遺物出土並びに遺構検出状況

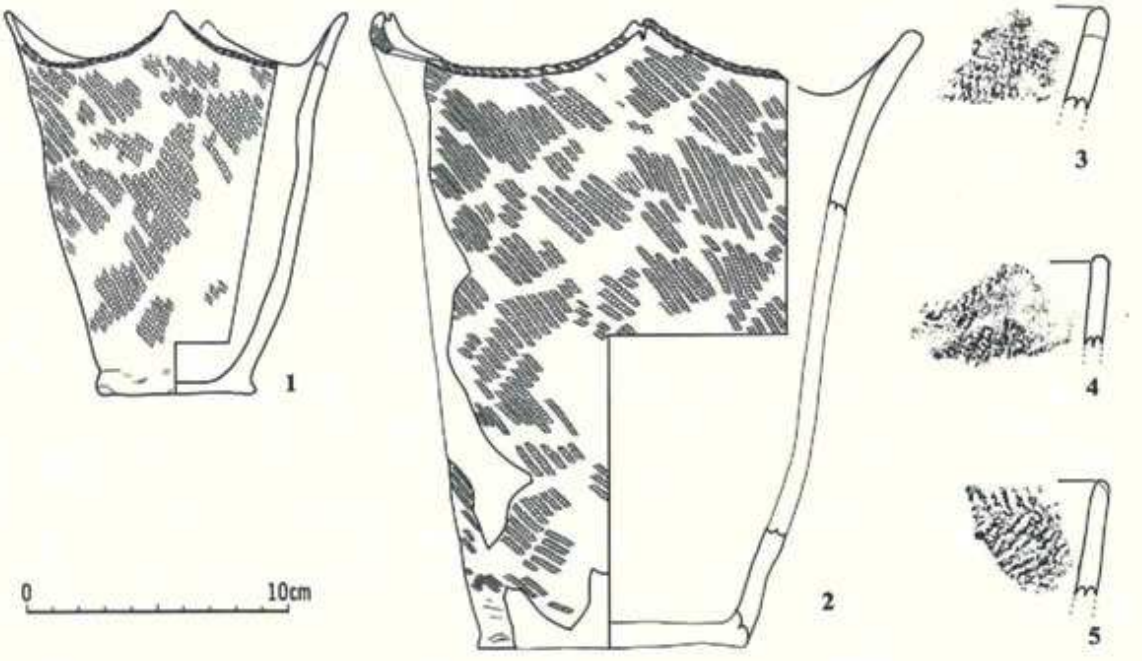


Fig. 9　P 3 出土の土器（1 壙底部，2～5 覆土出土）

いたものであろう。

Fig. 8 は、進行状況に応じて出土した遺物を示した。壙底部からは、完形土器 1 個体と骨片等が出土し、壙底部中央からは口径60×50cm，深さ10cmほどの皿状を呈するピットが検出された。その上を覆うように炭化物の面的分布が確認された。骨片が出土したのは主にこの炭化物の上位からであり、本遺構の性格を考える上できわめて重要であるとみられる。骨片は人骨か獣骨か専門家による鑑定を経ていないので不明である。

新道 4 遺跡（大沼忠春ほか1986）で類似のフラスコ状ピットから獣骨（エゾシカ）が出土しているという事例もあるが、本遺跡の骨片は、人骨と考えたい。おそらく貯蔵穴として使用していたものを墓壙として再利用したものではなかろうか。死者を葬る前（骨片は焼けていない）に火を伴う儀礼を施し、死者を納め、食物等を入れた土器 1 個を北側に置き土を埋め、最後に死者が再び甦らぬように破砕した礫によって押えこむように上部に置いたものとみられる。その礫が時間とともに下位へ沈んだものであろう。

想像の域を脱しえないが遺物の出土状況等から、このようなことが類推される。

Fig. 9－1 は、壙底部のII類土器である。山形突起を有し口唇部には縄文の押圧が、胴部にはＲＬ縄文が施されている。底部が若干抉れて張り出している。2～5 は覆土遺物で、いずれもII類土器である。2 も山形突起を有し口唇部にはＬＲ縄文の押圧が、胴部にはＬＲ縄文が施されている。胎土は、いずれも良くない。

ピット 5　Ｐ 3 とは約 8 ｍほど離れているが、ほぼ東西に並列する。おそらく未調査区の東側にも分布しているものとみられる。Ｐ 5 の口径は、215×175cm，底径は、235×230cm，深さは、160cmほどでＰ 3 同様、壙底部中央には皿状ピットが認められた。皿状ピットの口径は、65×60cm，深さ10cmほどの大きさである。開壙部はＰ 3 同様卵円形を呈する。Ｐ 5 北側にあるＰ 9 は、Ｐ 5 によって切られている。したがってＰ 9 の方がＰ 5 より古いとみられる。Ｐ 9 については後述する。

Ｐ 5 からは合計19点の遺物が出土した。いずれも覆土からのものである。内訳は台石 2 点，敲石 1 点，リタッチド・フレーク 1 点，フレーク 1 点，土器片12点，炭化物 2 点である。主要遺物は Fig. 11に示した。図示した礫 3 点は台石と敲石である。エレベーションでもわかるとおり、いずれもピット上部の自然堆積の中より出土した。Ｐ 5 のセクションからわかるように覆土上部のみが自然堆積

であり、以下、人為的埋め戻しによるものである。したがって出土した礫石器は、Ｐ５埋め戻し後、ある程度の時間を置いて廃棄されたものであることがわかる。おそらく、一定期間、貯蔵穴として役割を果たし、その後、埋め戻されたものであろう。

Fig. 11－１・３が台石，２が敲石であり、４はII類，５は、Ｉ類ｂの土器である。

ｂ．土　壙

性格不明のピットを土壙とした。今回の調査で合計７基検出された。以下、名ピットごとに詳述する。

ピット１　Ｂ８・Ｂ９ Gridにまたがって検出された楕円形を呈するピットである。口径170×138cm，確認面からの深さは約28cmである。Ｐ１からは合計183点の遺物が出土した。Fig. 13－１・２に示した土器と礫を除く遺物は、覆土からの出土である。覆土遺物の内訳は石鏃１点，スクレイパー３点，土器片約140点，礫等である。ピット南東の壁際からは Fig. 13－１の一括土器が、ピット中央部からは、板状礫が、ヒビが入った状態で検出された。

Fig. 13－４・６・８がＩ類ｂ，１～３・５・７がII類土器である。１は、口縁部を欠いている。ＲＬ縄文が地文であり、爪形様の圧痕文が施されている。２も口縁部の多くを欠いているものであり、ＬＲ縄文による施文がなされている。

ピット４　Ｐ４は当初 Fig. 15のような状態で検出された。その後、トレンチを入れたことにより完形土器が出土し、それによって下位の土壙の存在が確認された。したがって、Ｐ４上層遺構は、

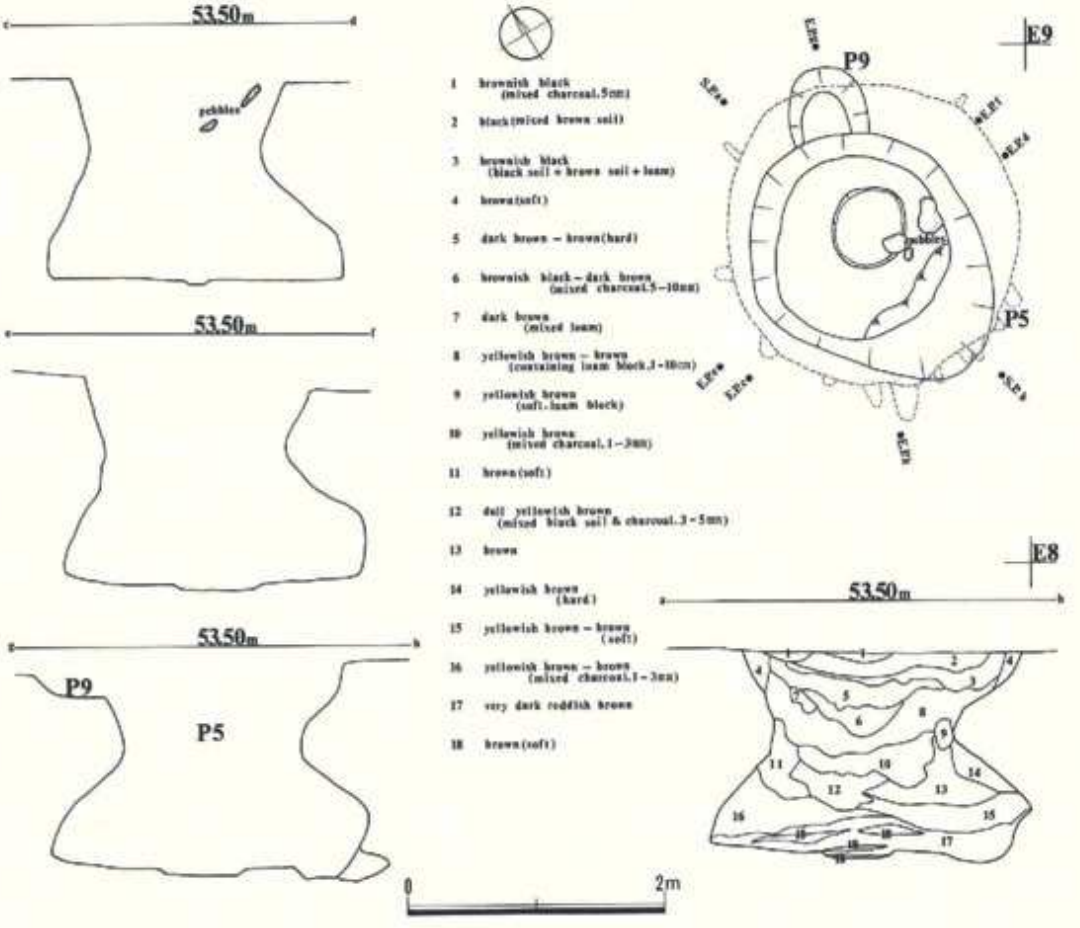


Fig. 10　Ｐ５・Ｐ９検出状況

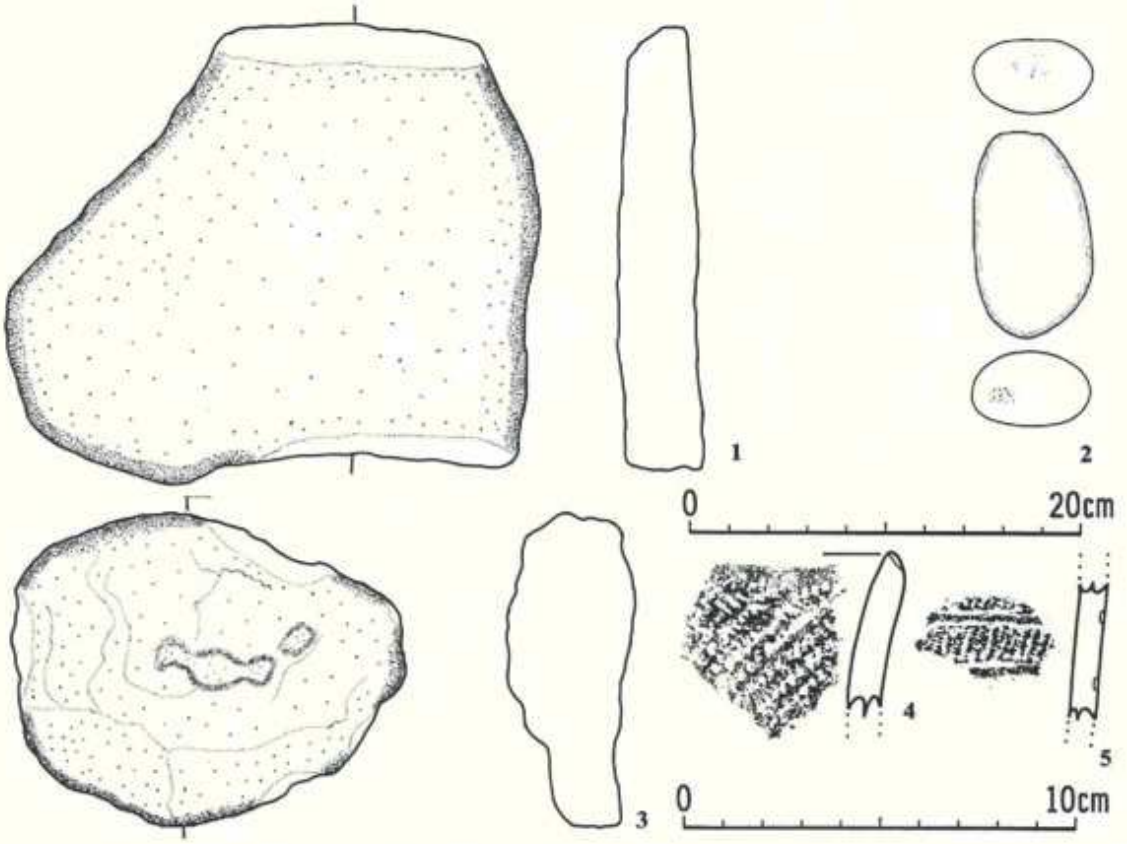


Fig. 11　P５出土の遺物（いずれも覆土，１～３は縮尺1/4，４・５は縮尺1/2）

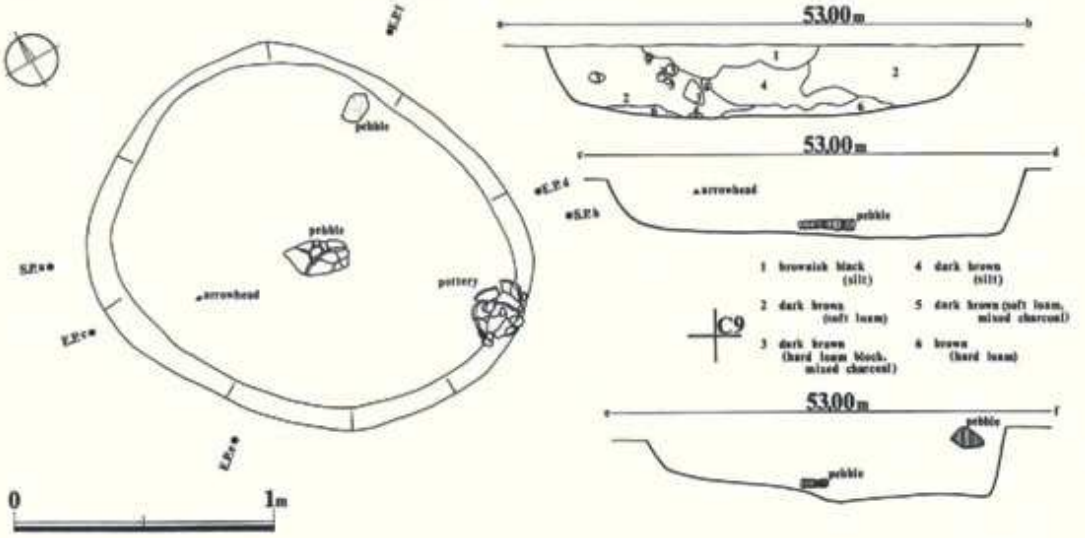


Fig. 12　P１検出状況

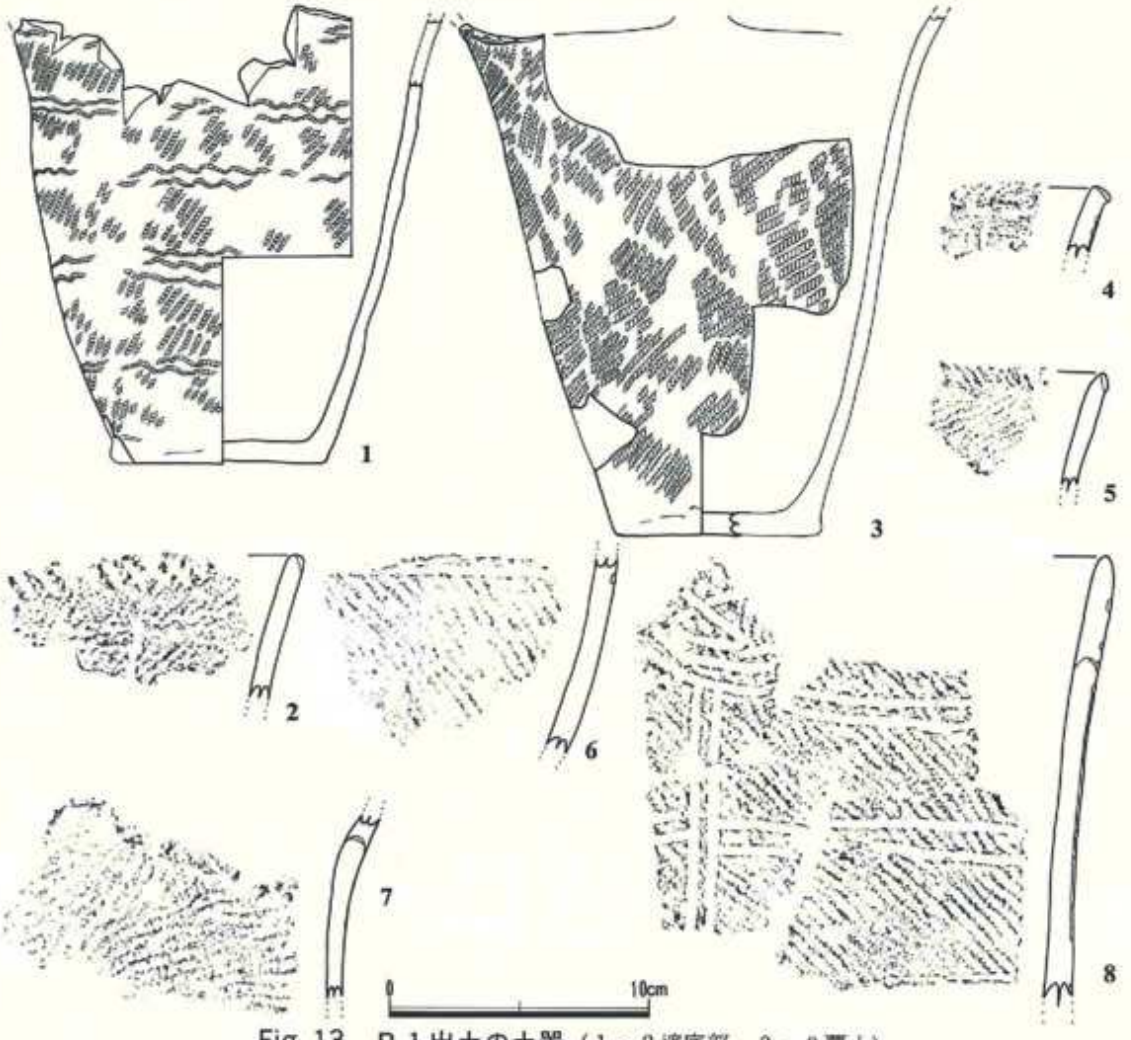


Fig. 13　P 1出土の土器（1・2壊底部，3～8覆土）

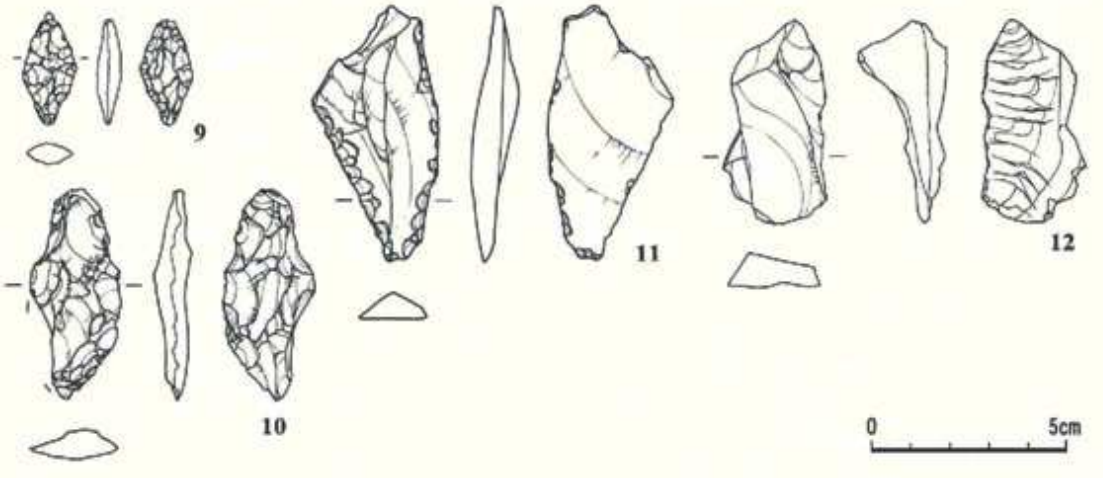


Fig. 14　P 1出土の石器（いずれも覆土）

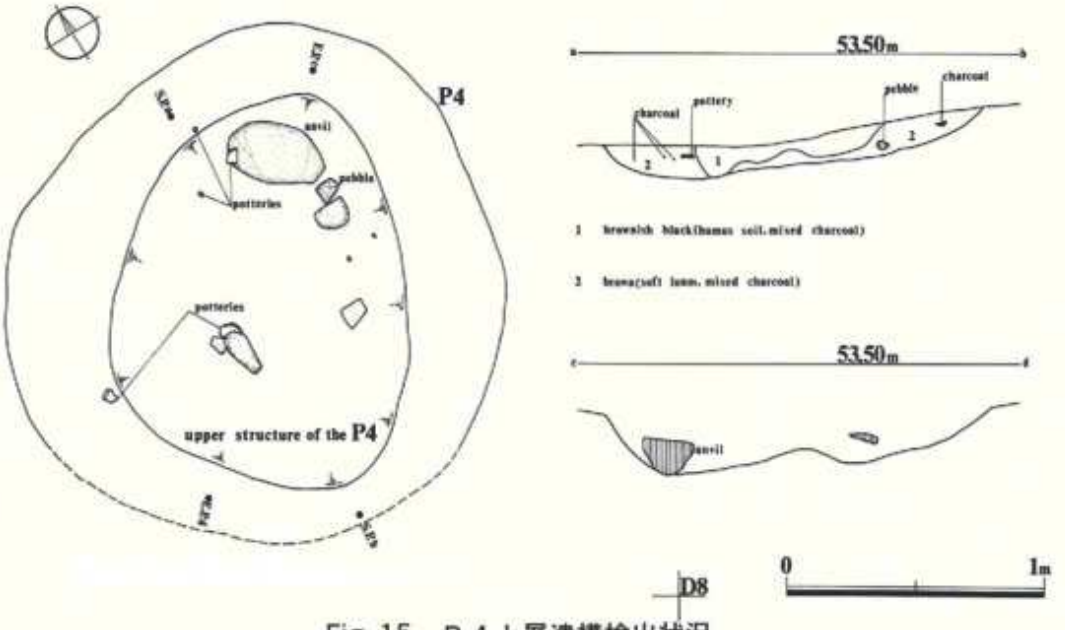


Fig. 15　P 4 上層遺構検出状況

下位のＰ４埋没後の窪みを利用した作業址と考えられる。上層遺構からは、Fig. 15・16にみられるような台石１点,扁平打製石器３点等が出土した。遺物の出土状況から4,000年前の作業の様子を彷彿させる。

Ｐ４上層遺構の下位には硬い褐色のロームが覆土としてある。そのロームを取り除くと Fig. 17のようなピットが検出された。ほぼ完形な土器３点とスクレイパー１点，礫等が床面から出土した。Fig. 18がその伴出土器である。ピット南側の壁際から２点，東側の小ピットより１点出土した。

ピットの大きさは、200×190cm，確認面からの深さは約27cmである。

Fig. 16－１が台石，２～４が扁平打製石器，５・６が土器である。いずれもＰ４上層遺構から出土した。７～11は覆土遺物である。７がＩ類ａ，８～10がII類土器である。Fig. 18－13・14は、Ｉ類ｃ，12は、II類土器である。15は、床面直上から出土したスクレイパーである。12は、台状突起を有し粘土紐による貼付を口縁部に施している。口唇部には矢羽根状のキザミが台状突起のトップにもキザミが施されている。胎土は比較的脆い。13は、山形突起を有し突起部に粘土紐が貼付されている。胴部には無節の *l* 縄文が、口唇部にはキザミが施されている。２ヵ所に補修孔が認められる。14も山形突起を有する。器形は若干キャリパー状を呈し、胴部には無節の *l* 縄文が、口唇部にはＲＬ縄文の圧痕がなされている。

ピット７　Ｂ９ Gridの中央部に位置する小ピットである。長円形で浅く長軸は、ほぼ南北に対応する。ピットの大きさは、67×42cm，確認面からの深さは、約11cmである。出土遺物は皆無であった。

ピット８　Ｃ22Grid南側より検出されたピットである。大きさは、85×54cm，確認面からの深さは約11cmで長軸は、ほぼ南北に対応している。ピットの内部及び東側より18点の土器片が出土した。Fig. 23－１～３がそれである。１は、Ｉ類ｃ土器で、２・３は底部破片である。

ピット９　Ｐ９はＰ５によって切られているピット（Fig. 10参照）である。Ｂ８ Grid北側に所在し、南側の⅓程度がＰ５の構築によって失われているものとみられる。予想される大きさは、(80)×60cm，確認面からの深さは約18cm前後であろう。出土遺物は皆無であった。

ピット11　Ｐ11は、Ｃ15Grid南側に所在し、若干Ｄ15Gridにかかっている。Fig. 21のように特異な形状を呈している。中央部には柱穴様の小ピッ

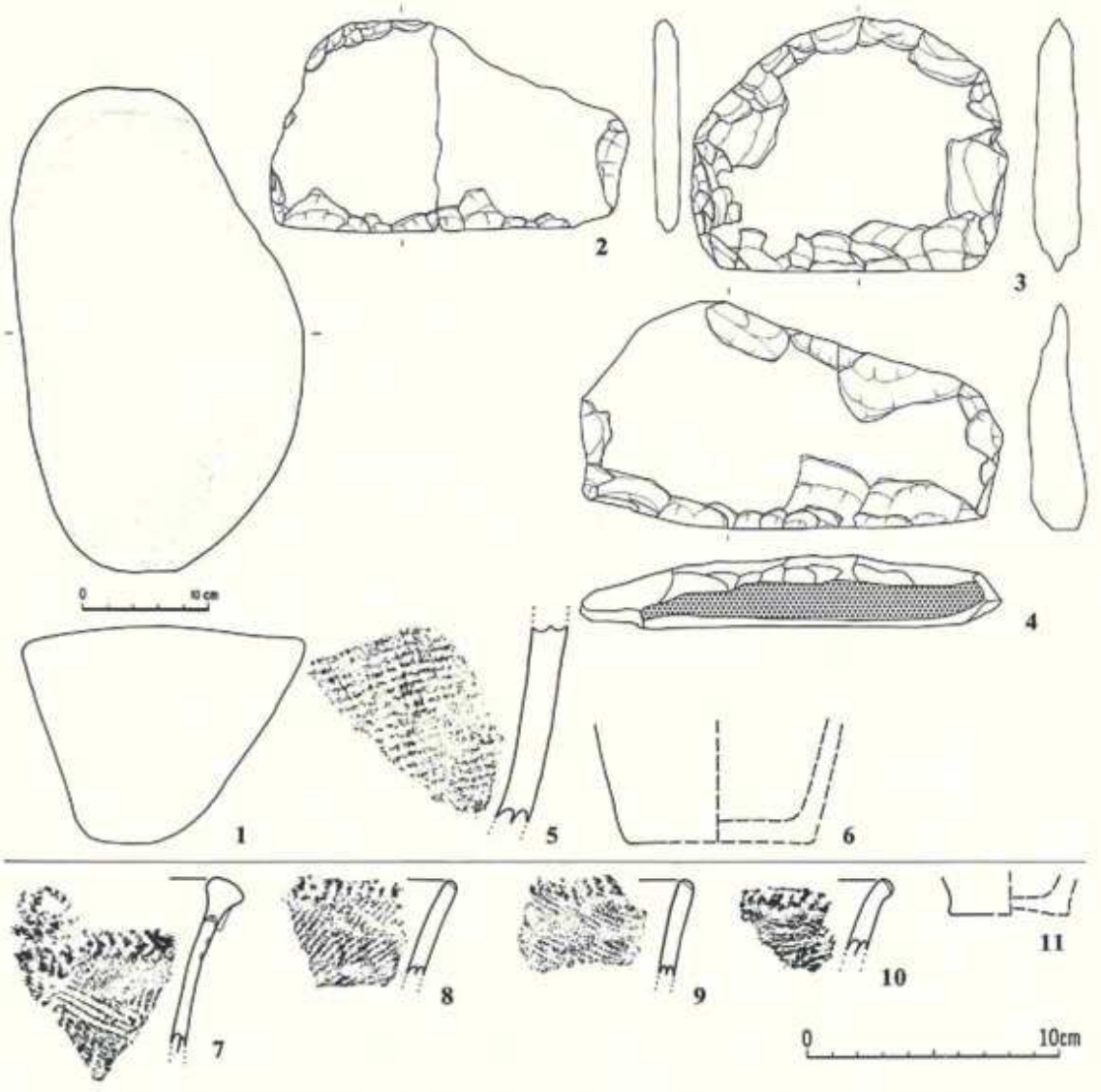


Fig. 16　P 4 出土の遺物（1～6 上層遺構，7～11覆土，1は縮尺1/6，他は1/3）

トがあり、全体としては皿状を呈している。セクションからも明確なように同一のピットである。長軸は、東両方向にほぼ対応している。出土遺物は土器片2点のみで覆土からの出土である。

ピット18　C17・D17・C18・D18Gridにまたがって検出された。このピットがどのようなプランであったのか、どのような遺構なのか全く不明である。崖の縁に所在することから大半は失われている。その上、北東部は木の根による攪乱が入っており全く不明である。トレンチにより確認したものであり中央部が失われているのはそのためである。トレンチを境とする左右のセクションも対応しない。Fig. 22のようにA・Bに分けてセクションを示したがBは、遺構外の標準土層である可能性もある。

P18からは、合計30点の遺物が出土した。内訳は、石鏃1点，土器片26点，フレーク3点で、このうち壙底部からは、石鏃1点，土器片13点，フレーク2点が出土した。Fig. 23—4は、I類a，5は、II類土器である。4は、突起部を欠いているもので胴部に張らみを有し懸垂文と弧状の沈線によって構成されている土器である。口唇部には縄

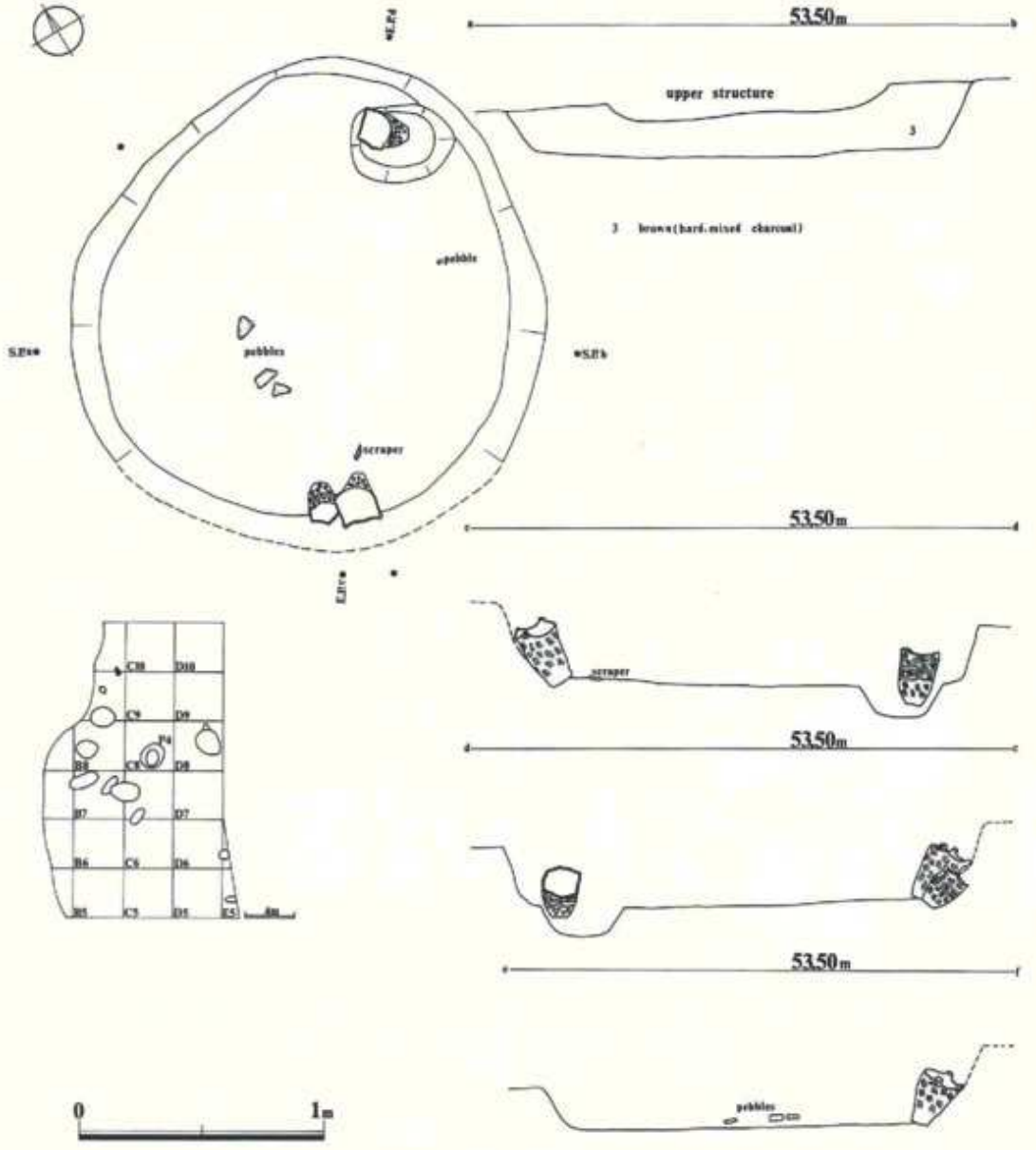


Fig. 17　P 4 検出状況

の圧痕，胴部には、ＲＬの斜縄文が施されている。

C．Ｔピット

今回の調査では、いわゆるＴピット類似の形態をなすものが９基検出された。いずれにも伴出遺物は認められなかったが、覆土から出土した遺物が少なからずある。

当該遺構の構築時期は明確ではないが、掘り込み面の観察等から本遺跡の出土遺物の主体である縄文時代中期中葉よりも若干、先行するものと、若干後出のものがみられる。しかし、いずれにしても該期を大きく隔てるものではないと考えられる。以下、ピットごとに詳述する。

ピット２　Ｐ２の北西部分は崖のため⅔ほどを失っている。本来的な大きさは、(200)×(55) cm程度あったとみられる。確認面からの深さは、(110) cmであり、ピット底部の幅は15cmと狭い。崖縁で

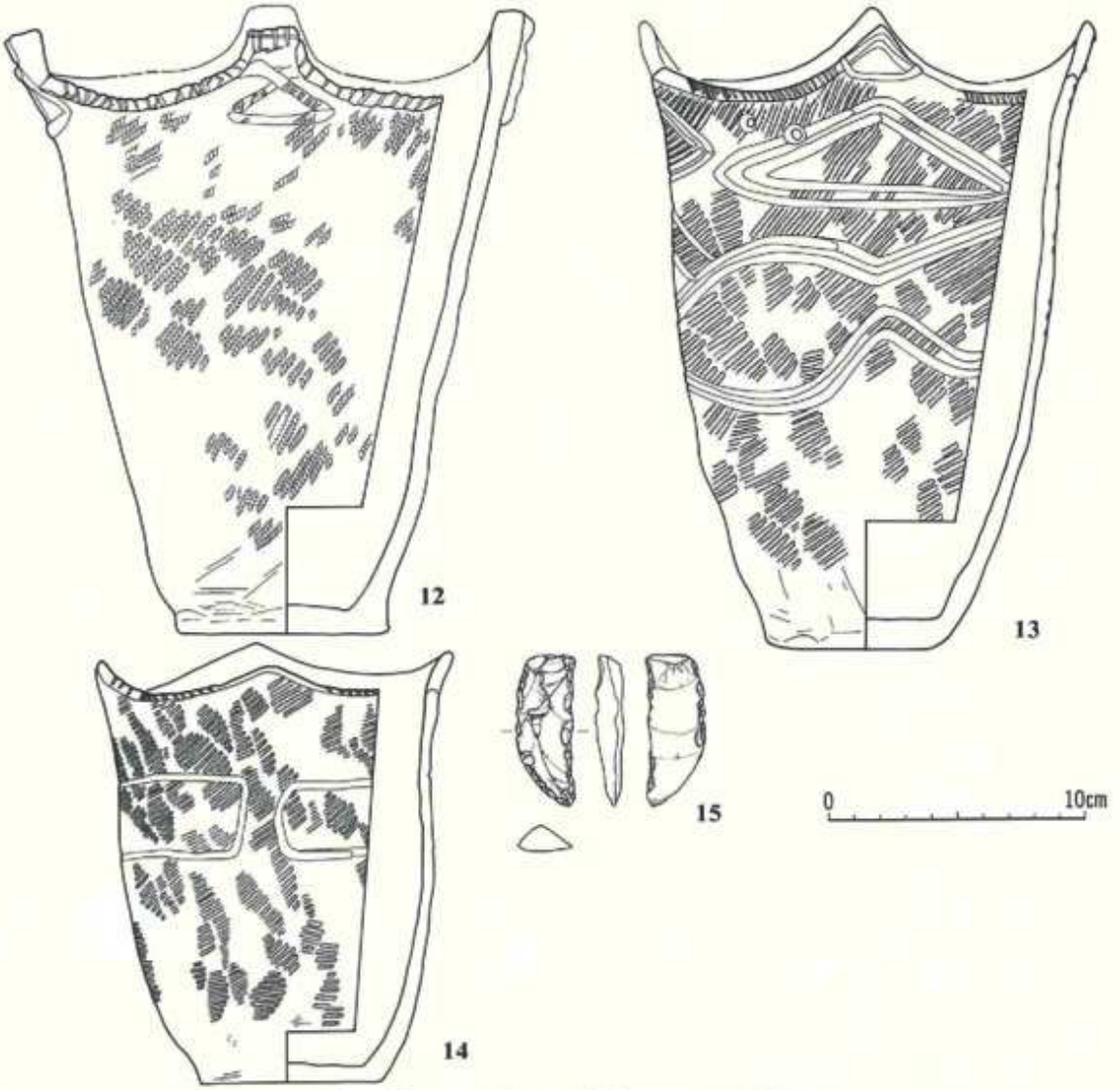


Fig. 18　P 4 出土の遺物（いずれも床直）

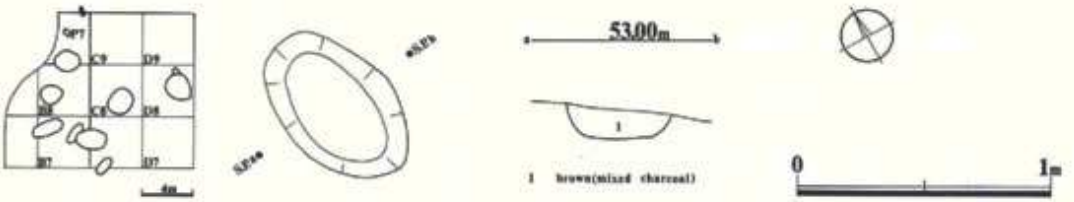


Fig. 19　P 7 検出状況

あるがため、セクションの観察にとっては好都合であった。Fig. 24のようにVI層が掘り込み面である。

覆土からの出土遺物は、土器片3点、フレーク2点の合計5点のみであった。小破片のため図示していない。

ピット6　プランは楕円形で底部は、他のTピット同様溝状を呈する。P14と重複関係にあるが

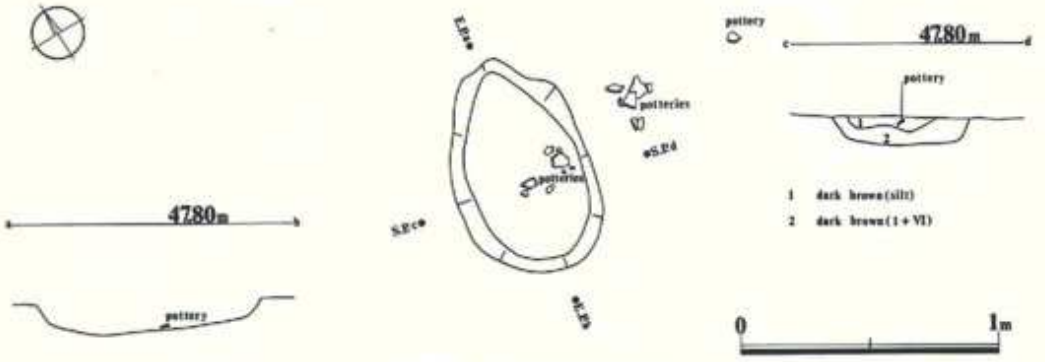


Fig. 20　P８検出状況

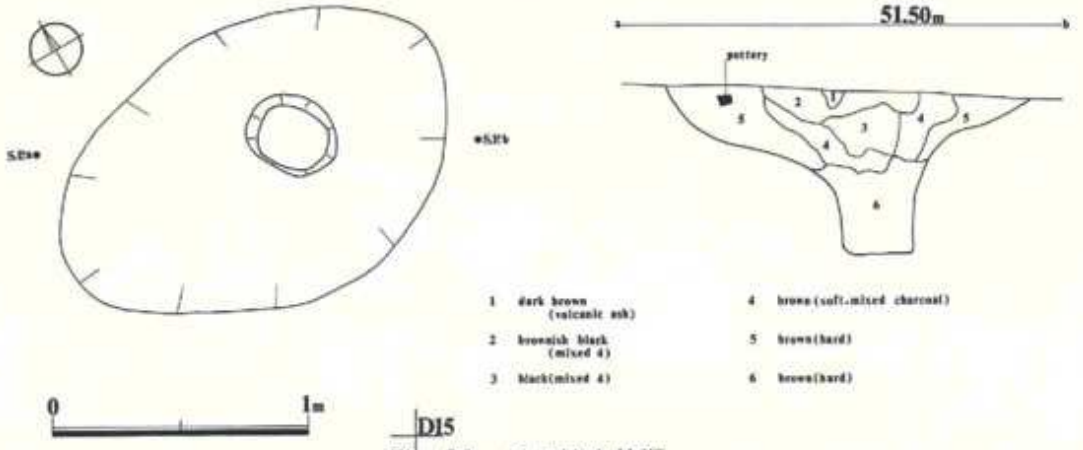


Fig. 21　P11検出状況

新旧関係は明確ではない。周辺が撹乱していたからでありFig. 25のうちプランのほとんどを破線で示したのは、そのような理由からである。しかし、Ｐ６の方がP14より若干上面で確認されていること等からＰ６の方が若干後出のものであると考えたい。ピットの大きさは、(200)cm×158cm，確認面から最も深い部分で127cmである。

出土遺物の合計は、29点でいずれも覆土からの出土である。内訳は、土器片27点，扁平打製石器１点，礫片１点である。

主要遺物は、Fig. 33－１～10に示した。２がＩ類ａ，３・４がＩ類ｂ，１・４・６がII類である。１は、ニ股突起で突起下部にはボタン状の貼付があり、口唇には原体を押圧している。２は、山形突起で口縁部には太い粘土紐を貼付している。10は半折している扁平打製石器である。

ピット10　C15・D15Gridにまたがって検出された。ピットの大きさは、203×84cm，確認面からの深さは105cmであり底部の幅は約12cmである。長軸は、ほぼ東西軸に対応している。

出土遺物は、土器片６点で、いずれも覆土遺物である。小破片のため図示していない。

ピット12　Ｅ５Gridより検出されたが東側は今回の調査区ではないため全掘していない。予想される大きさは、概ね200×50cm程度とみられる。確認面からの深さは約75cmでありＶ層が掘り込み面である。

出土遺物は、土器片15点で、いずれも覆土遺物である。Fig. 33－11～～14が主なものである。11（Ｉ類ａ）は口縁部，12は胴部，13・14は底部破片である。

ピット13　Ｄ６・Ｅ６ Gridにまたがって検出さ

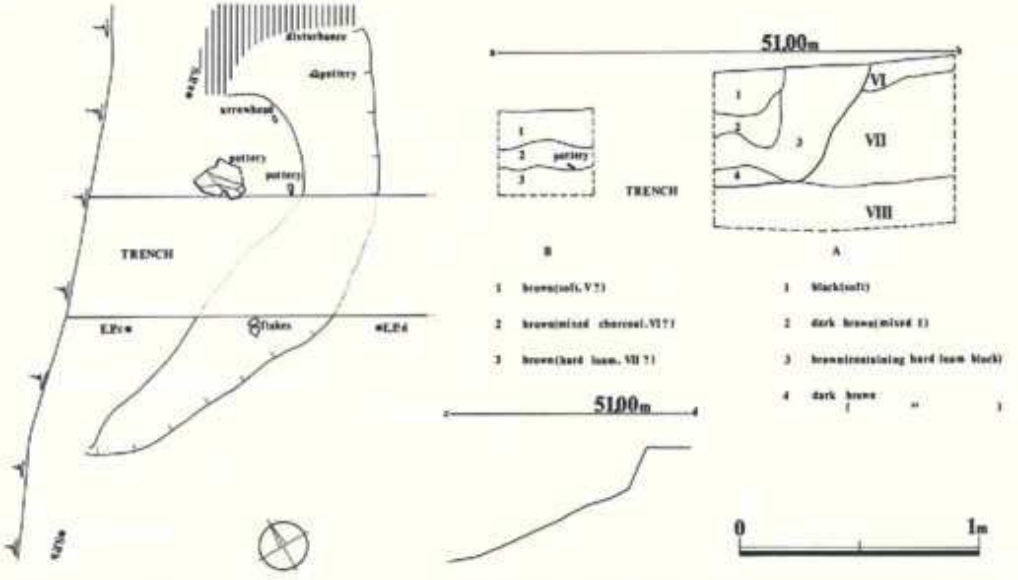


Fig. 22　P 18検出状況

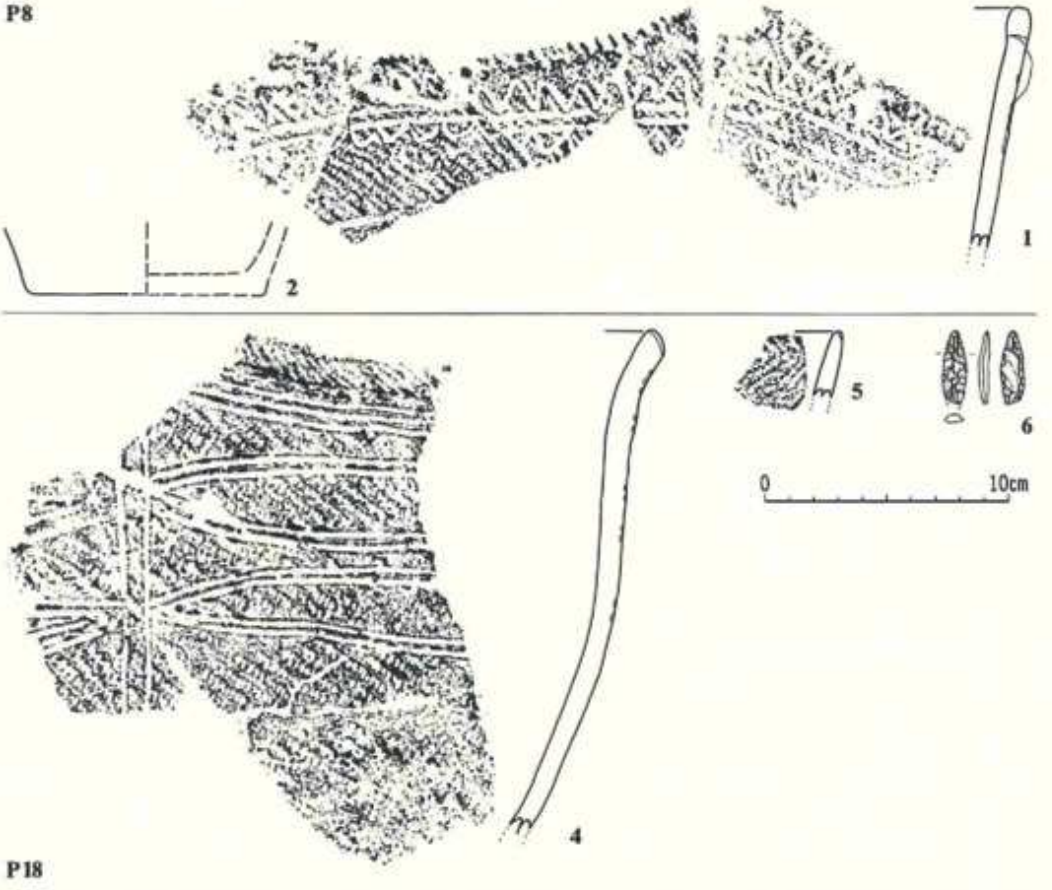


Fig. 23　P 8，P 18出土の遺物（1ピット近接，2・3・4・6 壙底部，5 覆土）

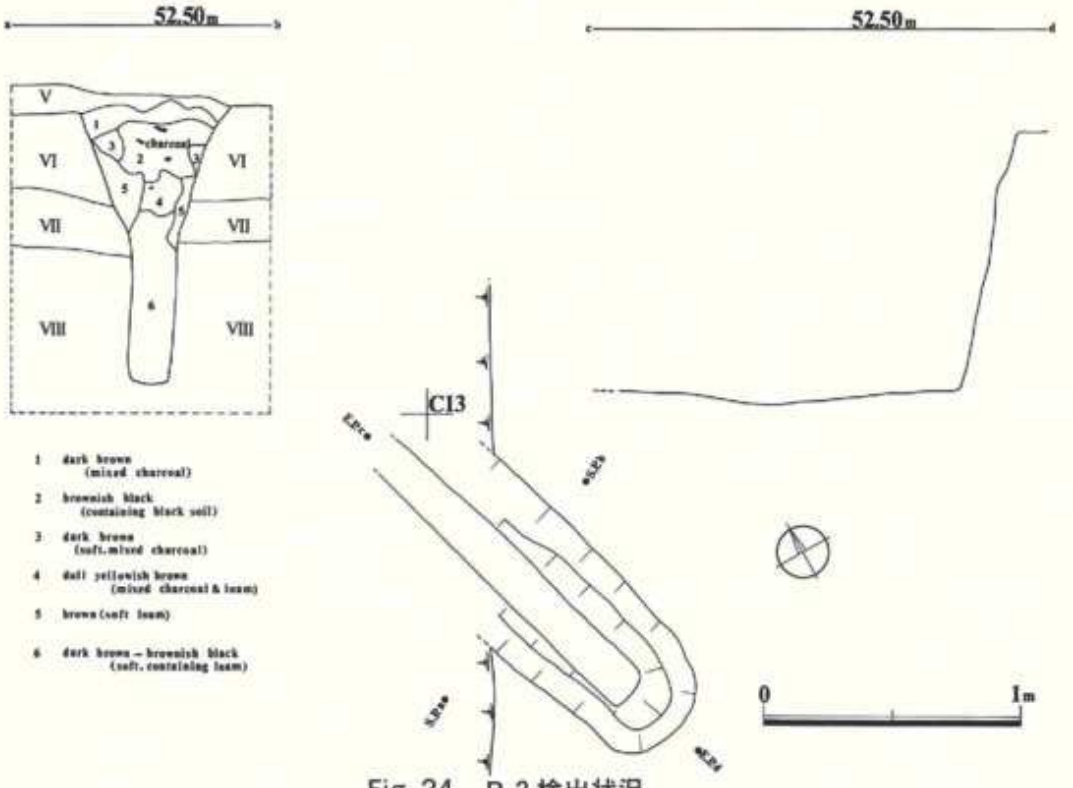


Fig. 24　P 2 検出状況

れた。他のTピットとは若干形態を異にするが、一応Tピットに分類した。P12同様、東側は未調査区であるため半分以上、検出されていない。

出土遺物は、合計20点で内訳は土器片19点，礫片1点であり総て覆土遺物である。Fig. 33—15～20が主なもので、20がⅠ類b，16～19がⅡ類である。16は、台状突起を有し口唇部は矢羽根状の刺突文が施されている。焼成は硬い。

ピット14　周辺の撹乱の状況やP 6との関係については、P 6の項で前述したとおりである。P 14の大きさは、(167)×(64)cm，確認面からの深さは約97cmである。

出土遺物の合計は15点で、いずれも覆土からの出土である。内訳は、土器片13点，礫2点である。Fig. 33—21の土器は、Ⅰ類aである。

ピット15　P15は、トレンチを入れたことにより確認したものでFig. 30の破線部分がそれである。ピットの大きさは、165×(70) cm，確認面からの深さは約88cmである。

出土遺物の合計は、9点でいずれも覆土からの出土である。小破片であるため図示していない。

ピット16　A 7・B 7 Gridにまたがって検出された。ピットの大きさは、137×94cm，確認面からの深さは約108cmである。

出土遺物は、土器片8点のみであった。Fig. 33—22（Ⅱ類）を除いて小破片であるため図示していない。

ピット17　D14Grid北側に所在する比較的小型のTピットである。142×61cmほどの大きさで確認面からの深さは、約93cmであり底部の幅は、20cmである。図示していないが土器の小破片が1点覆土より出土した。

d．焼　土

今回の調査によって、3ヵ所から焼土が確認された。いずれも地床炉とみられる。以下、焼土ごとに詳述する。

ＦＰ１　Ｂ９・Ｂ10Gridにまたがって検出された地床炉である。75×46cmほどの大きさで最も厚い部分で約15cmである。伴出遺物は皆無であった。

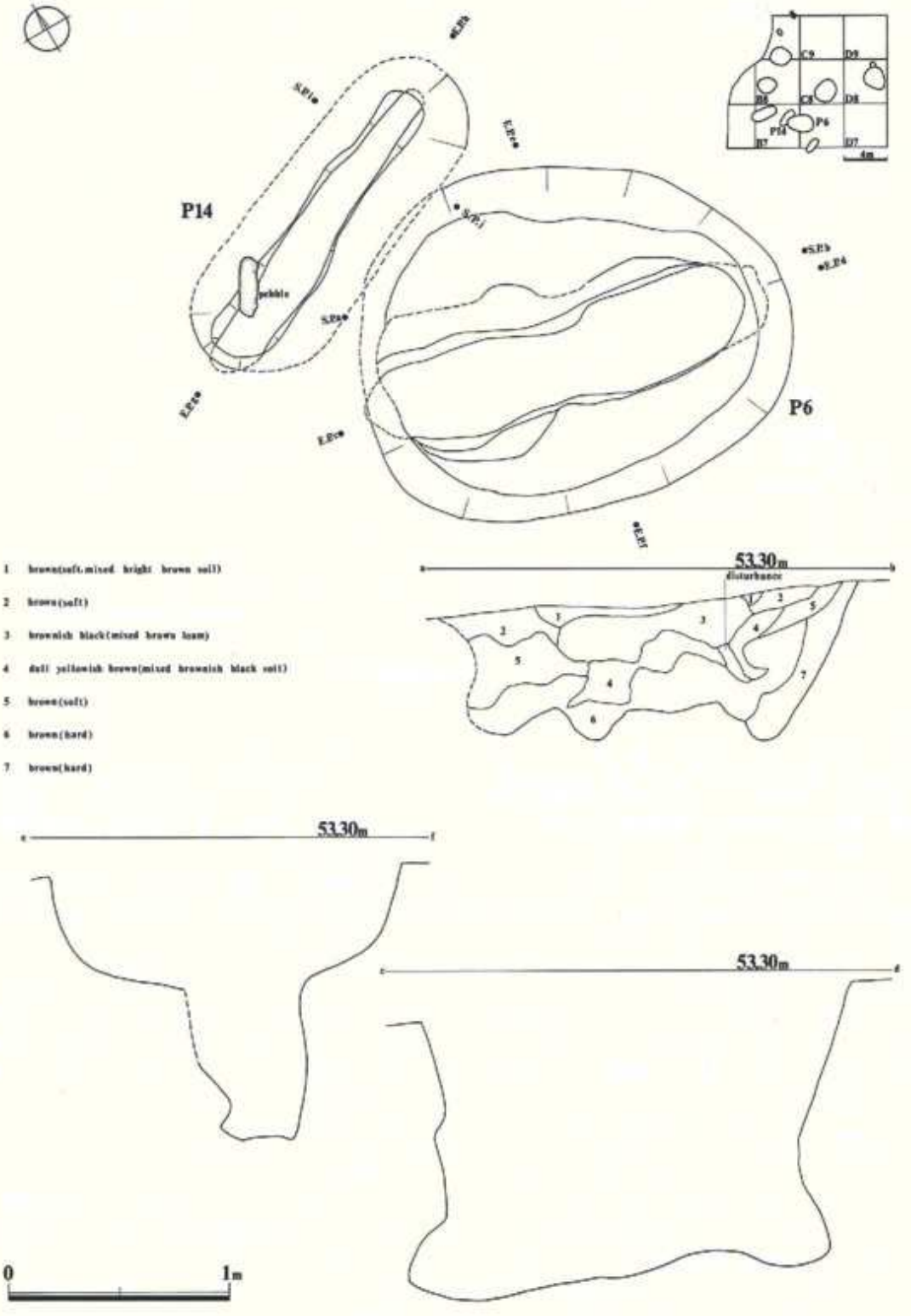


Fig. 25　P 6 ・ P 24検出状況

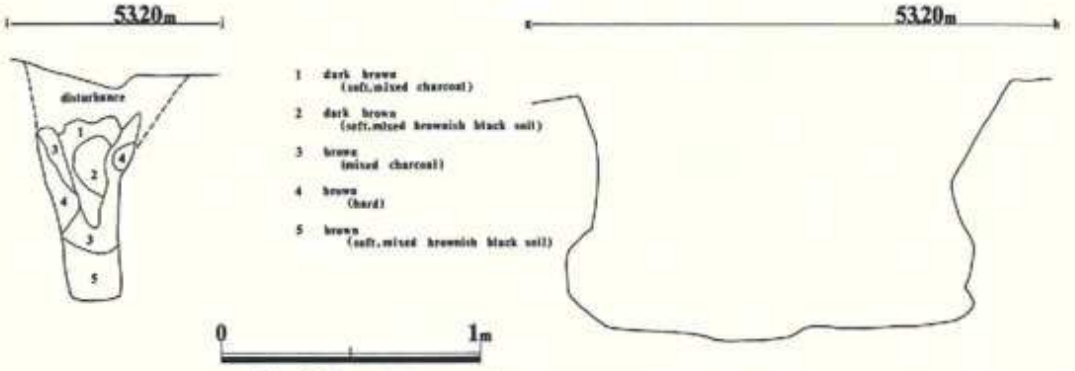


Fig. 26　P 14のセクションとエレベーション

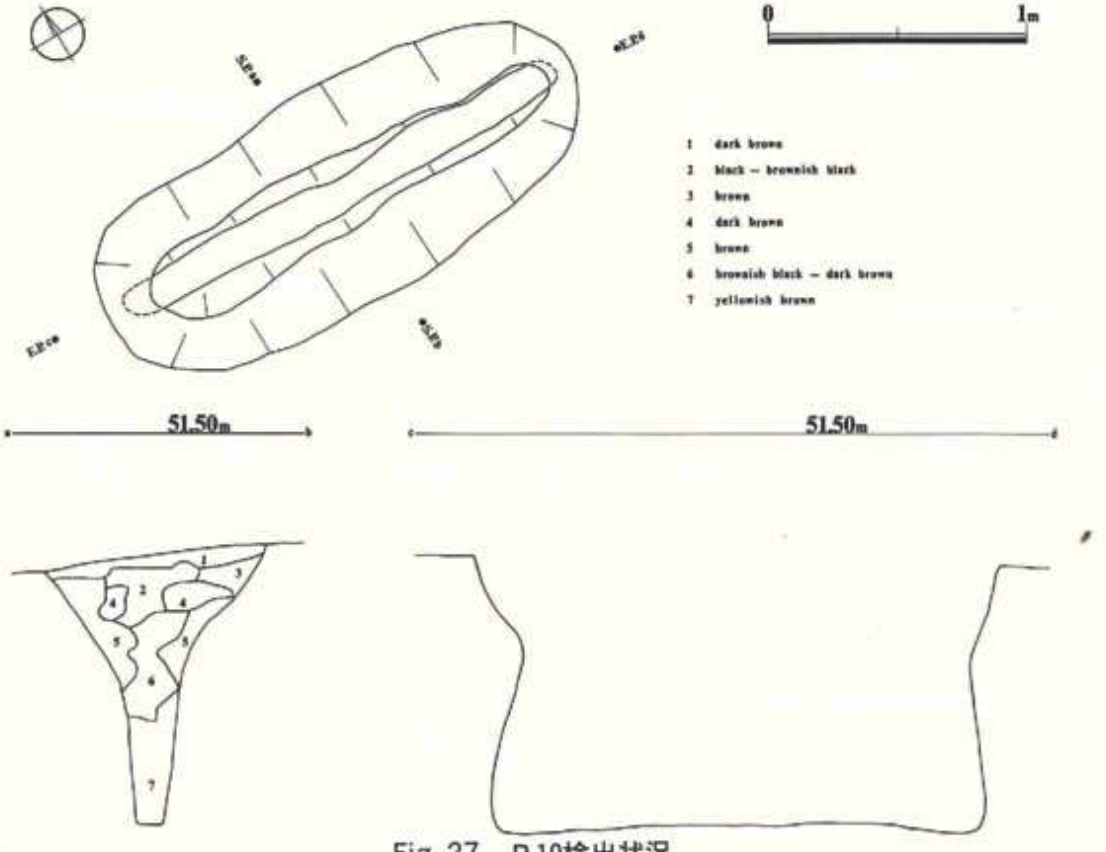


Fig. 27　P 10検出状況

焼土の色調は、明褐色（7.5Y R5/8）で粒子が細かい。

ＦＰ２　D12Gridの東側に所在する地床炉である。51×35cmほどの大きさで厚さは約15cmである。焼土の上部には土器片３点が認められた。焼土の色調は赤褐色（５Y R4/8）で細かな炭化物が混じっている。

ＦＰ３　D13Gridに所在し、ＦＰ２とは5mほどの距離でほぼ南北に並んでいる。38×31cmほどの大きさである。地床炉のセクションは、Fig. 36の

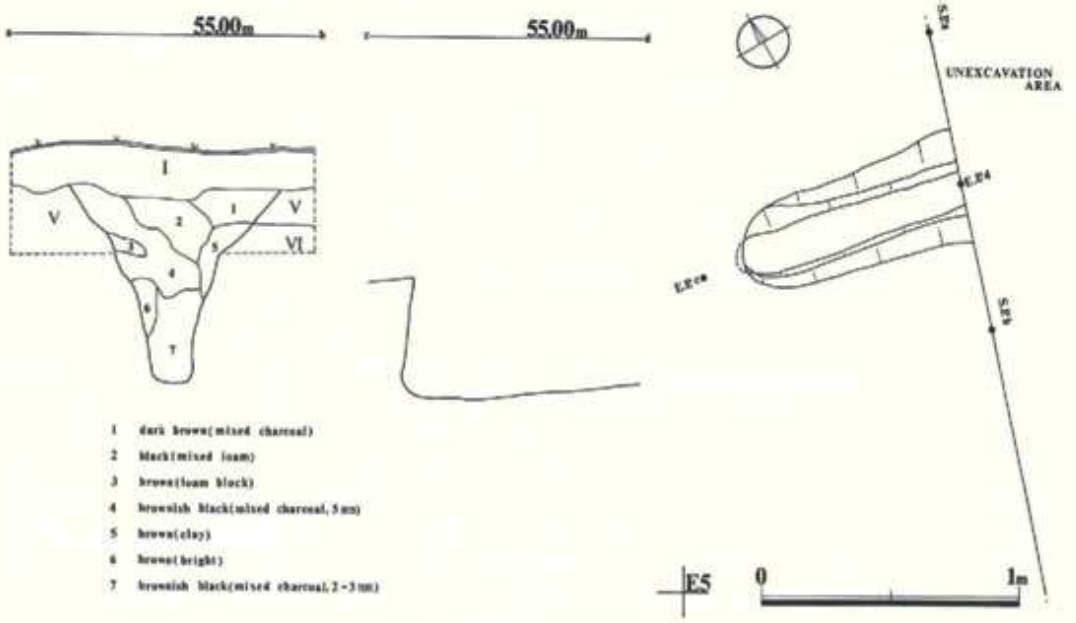


Fig. 28　P 12検出状況

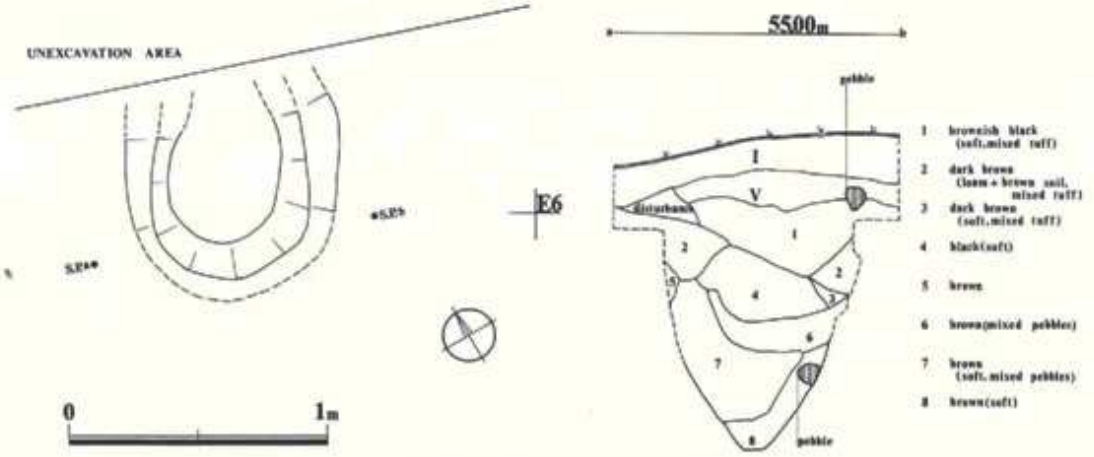


Fig. 29　P 13検出状況

とおりである。

1は、炭化物を混入する黒褐色土（10ＹＲ2/2）である。2は、炭化物を多く混入する焼土で赤褐色～明赤褐色（5ＹＲ4/8～5ＹＲ5/8）を呈する。

（鈴木・宮）

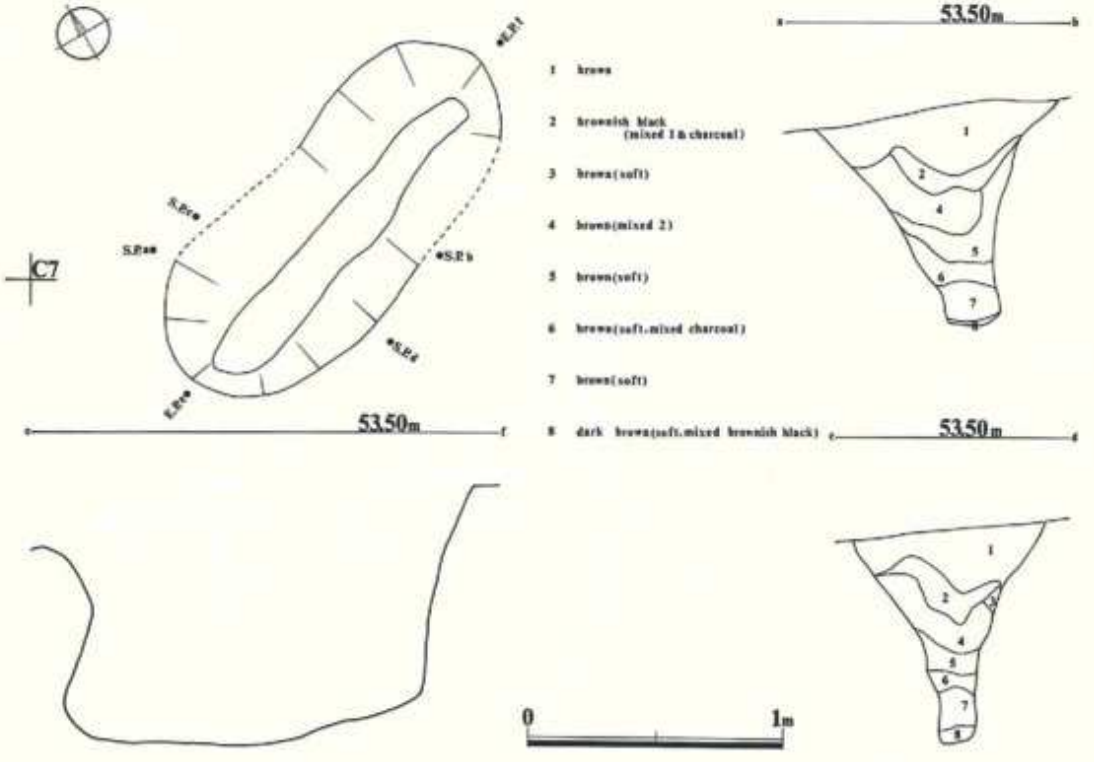


Fig. 30　P 15検出状況

Table 1　大岱沢Ａ遺跡遺構出土石器の属性

図版番号	遺構	出土位置	出土Grid	器種	大きさ(mm)	重さ(g)	石質	備考
Fig. 14－9	P 1	覆土	B 9	石鏃	(27)×14×6	(1.7)	頁岩	先端部若干欠損。
〃 14－10	P 1	〃	B8・B9	スクレイパー	55×24×10	(8.3)	〃	未整品(?),縁部調整ナシ,使用の痕跡ナシ。
〃 14－11	P 1	〃	〃	〃	66×32×9	13.7	〃	片面調整の削器、完形。
〃 14－12	P 1	〃	〃	U. F.	52×27×23	17.1	〃	使用痕の認められる剥片。
〃 16－1	P 4 上層	〃	C 8	台石	387×230×173	1,800.0	安山岩	側面に動物質のものとみられる附着物あり。
〃 16－2	〃	〃	〃	扁平打製石器	142×85×11	201.0	〃	半折していたものが接合、完形。
〃 16－3	〃	〃	〃	〃	127×102×19	355.0	〃	完形。
〃 16－4	〃	〃	〃	〃	168×90×23	470.0	〃	抽出された自然礫に調整加工を施している,完形
〃 18－15	P 4	壁底部	〃	スクレイパー	59×24×10	13.1	頁岩	片面調整のナイフ様石器。
〃 11－1	P 5	覆土	D 8	台石	272×238×44	3,958.0	安山岩	
〃 11－2	P 5	〃	〃	敲石	107×61×38	385.0	瑪瑙	両端に敲打痕あり,原石をそのまま利用。
〃 11－3	P 5	〃	〃	台石	160×204×66	2,482.0	安山岩	若干熱を受けている,敲打痕が認められる。
〃 33－10	P 6	〃	B7・C7	扁平打製石器	(95)×(75)×17	(181.0)	〃	半折している。
〃 23－6	P18	壁底部	D18	石鏃	(31)×10×4	(1.2)	流紋岩	先端部あるいは基部欠損。

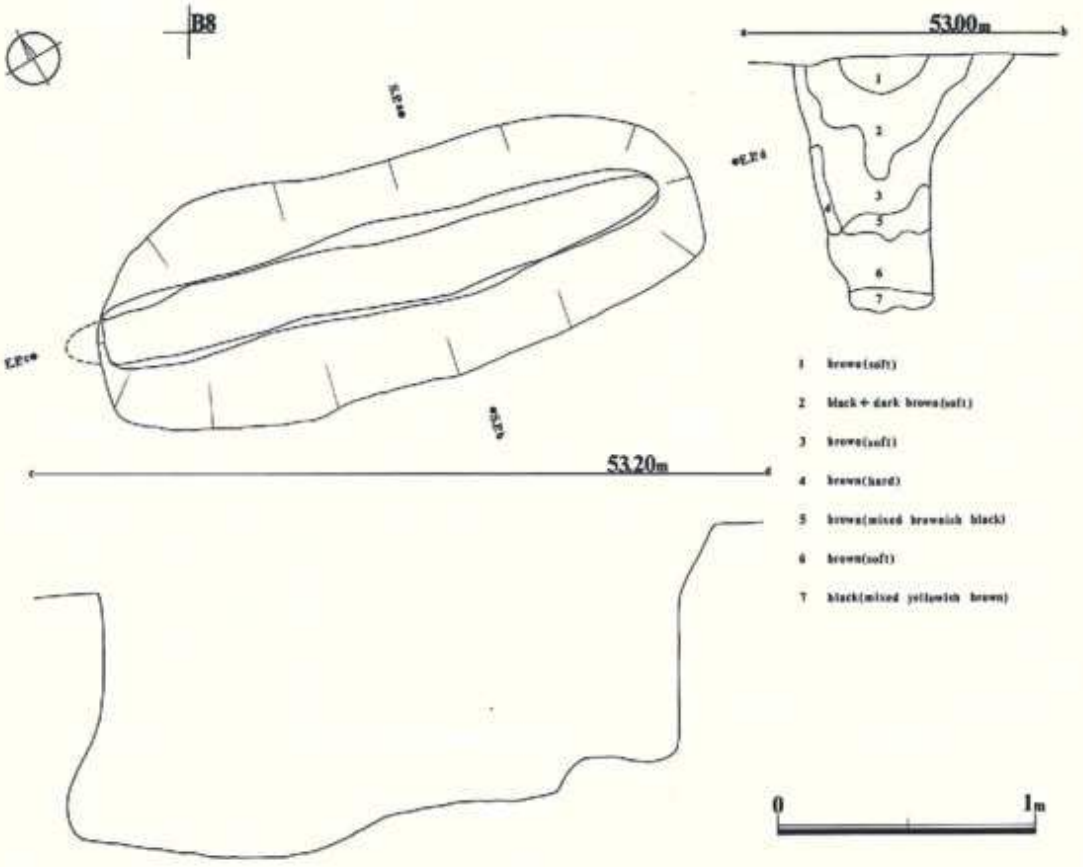


Fig. 31　P 16検出状況

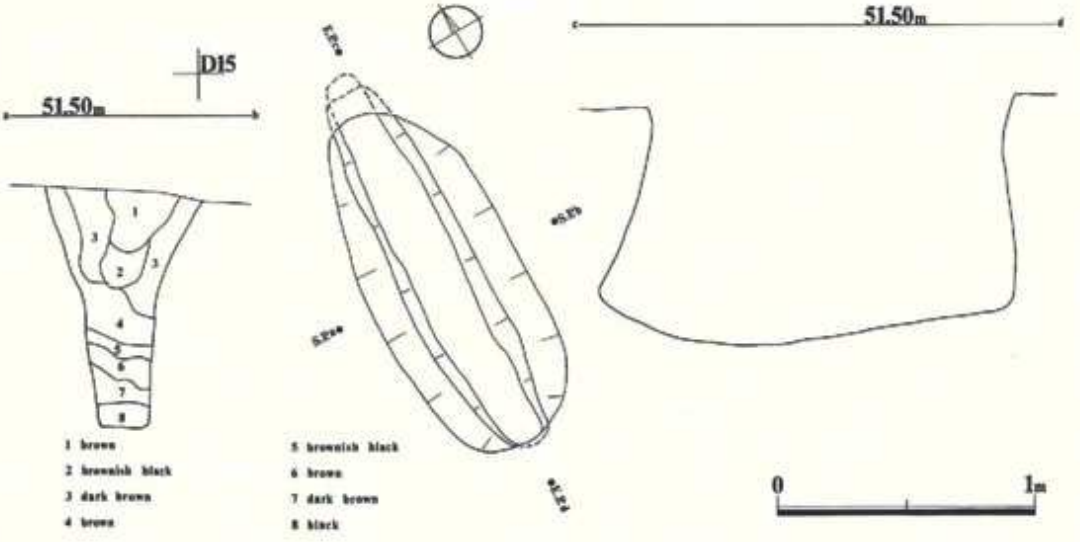


Fig. 32　P 17検出状況

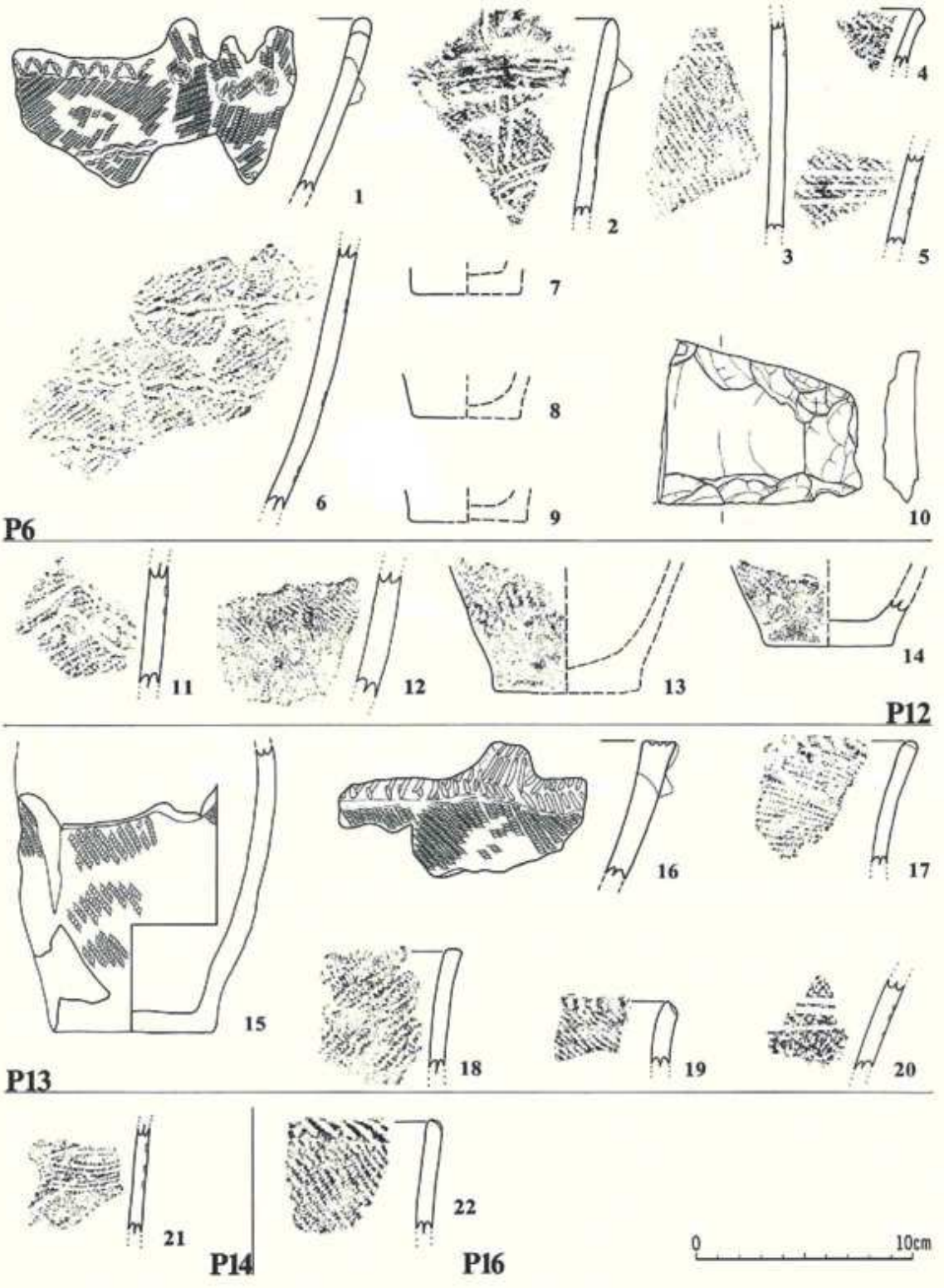


Fig. 33　Tピット覆土の出土遺物

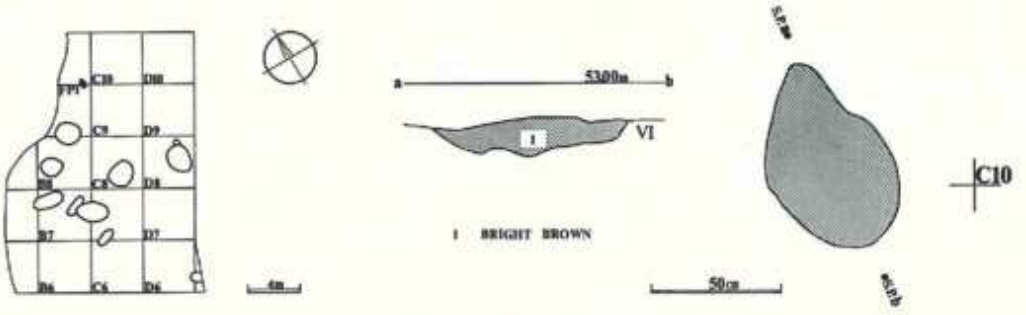


Fig. 34　FP1 検出状況

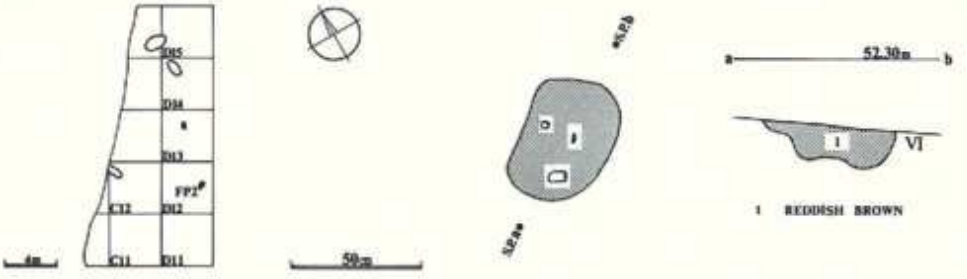


Fig. 35　FP2 検出状況

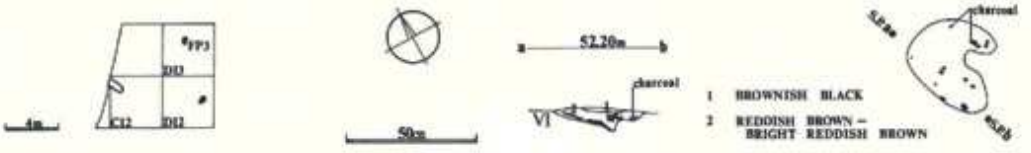


Fig. 36　FP3 検出状況

Ⅵ．遺構外出土の遺物

a．土　器

本遺跡より出土した土器は、縄文時代中期中葉に相当するものである。

1．土器の総数

出土した土器片の総数は、6,269点で、そのうち包含層（第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層）のものは、3,341点、第Ⅴ層出土のものが最も多い。

2．土器の水平・垂直分布

土器の水平分布をみると Fig. 37に示すように、そのブロックは調査区の北西側と南西側の台地上に形成されている。垂直分布については第Ⅴ層・Ⅳ層・Ⅵ層の順に多く出土している。

3．土　器

沈線文を有するものと地文の縄文のみのものに二分した。口縁部破片では、Fig. 38に示すように地文の縄文のみのものが82.1%で非常に多い。

Ⅰ類　沈線文を有するもの

沈線文を有するものは文様帯に弧状の沈線が施されるもの、横走する沈線文が施されるもの，その他、多種多様の沈線文が施されるものがある。

a）弧状の沈線文が施されるもので、懸垂文と弧状の沈線文の組合せのもの，連弧文のものなどがある（7，9～24，26～28，70)。

12，28などは、懸垂文と弧状の沈線文の組合せ，7，14，15，20，27などは、連弧文のものであり、その他、10，16，70のように横走する沈線と弧状の沈線文との組合せ、弧状の沈線が多様に駆使されるものがある。

b）横走する沈線文が施されるもので、1～4の懸垂文と横走する沈線文の組合せのもの，2～4本単位で横走する沈線文のもの，4本以上で横走する沈線文のものなどがある（8，30～43，44～69，71～73)。

29～31，68，69は、懸垂文と横走する沈線文の組合せのもの、33～38，40～62，64は、2～4本単位で横走する沈線文のもの、39，63，65，66は、4本以上で横走する沈線文のもので、その他32は、4本以上の懸垂文と4本以上の沈線文の組合せのものである。

c）多種多様の沈線文が施されるものである（8，25，74～76)。

8は、懸垂文と横走沈線文のものであるが、懸垂文の直下に三日月形の沈線文が施されており、25は、横走沈線文のものであるが沈線間に波状の沈線，突起直下に「U」字形の沈線が施されている。74は、横走沈線文の下位に「つ」字形の沈線，75には雲形の沈線，76は、横走する沈線に区画線が施されている。

口縁部破片では、Fig. 38に示すとおりaが46%で多く、次いでb・cの順である。

沈線の施文は、棒状，あるいは篦状の工具により施文されるのが一般的であり、半截竹管によるものもみうけられる。

Ⅱ類　地文が縄文のみのもの（2，3，5，122～183，185，186)。

地文の縄文は、斜縄文のものが圧倒的に多く羽状縄文のものは若干数である。縄文の原体については、単節のものが圧倒的に多く、無節・複節のものは若干数である。

2は、胴部下位の欠落したものであるが口縁部に4つの台状突起，胴部は、やや膨みをもち底部は、やや張り出しており、口唇部には縄の圧痕，羽状縄文が施されている。風化が激しく、焼成・胎土とも良くない。3は、口縁部に4つの三角形の山形突起，胴部は、やや膨みをもち、口唇部に縄の圧痕・斜縄文が施されており、焼成・胎土ともにあまり良くない。

①口縁部

口縁部の形態をみると突起を有するものと平縁を呈するものがあり、Fig. 38に示すとおり前者が92.7%で圧倒的に多い。

ⅰ.突起を有するもの

突起を有するものは、所謂台状突起のもの，三角形を呈する突起のもの，その他、2～3個の小突起を有するものに分けられる。

(イ)　口縁部に台状突起を有するもの

口縁部に台状突起を有するものには突起部分に粘土紐が貼付されるもの（1，77～83，88～90)，突起部分に沈線が施されるもの(14，93，95)，突起部分に粘土紐と沈線が施されるもの（87，94)，その他、地文に縄文のみが施されるもの（2，96～102，104，117）に細分される。

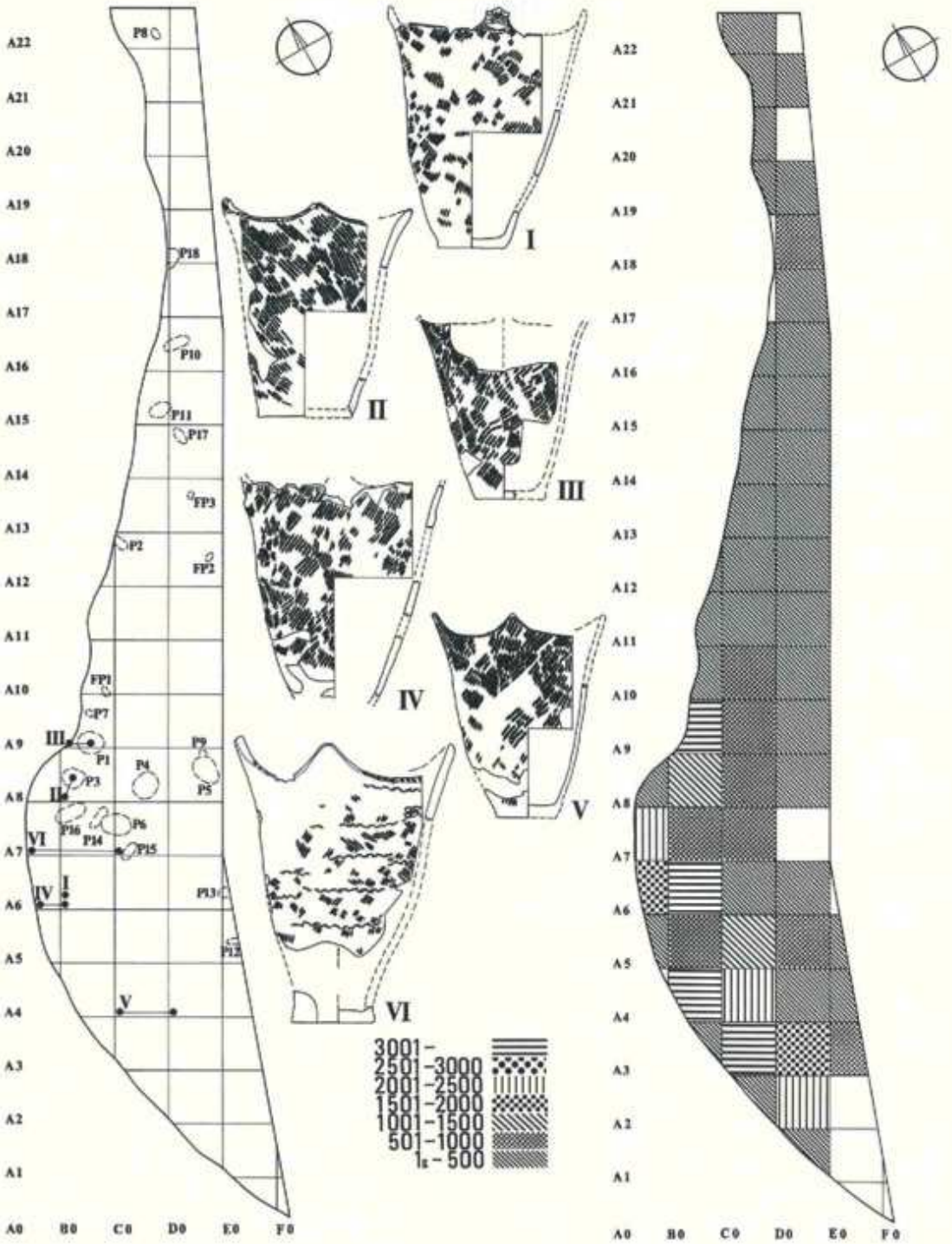


Fig. 37　主要土器の分布・遺構外出土土器重量分布

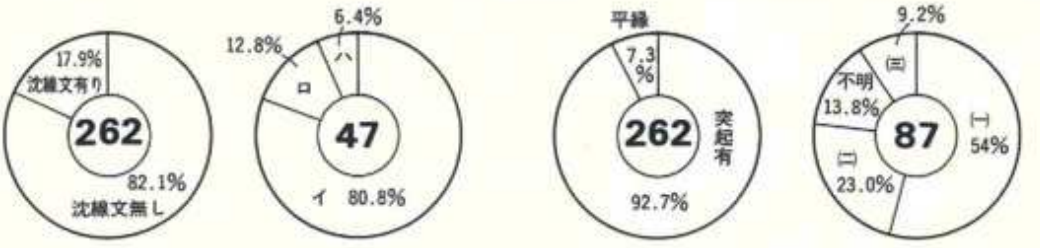


Fig. 38　土器の属性

台状突起の頭頂部は皿状を呈するもの，あるいは、2～3個の小突起を有するものなどがある。さらには台状突起の粘土紐には縄の圧痕が施されるものが一般的で、皿状を呈するもの，頭頂部に沈線，刻目、頭頂部の小突起に縄の圧痕が施される場合がある。

(ロ)　口縁部に三角形を呈する突起を有するもの

口縁部に三角形を呈する突起を有するものには突起部分に粘土紐が貼付されるもの(35, 103～107, 109～114, 115, 116)，突起部分に粘土瘤が貼付されるもの(86)，突起部分に縄の圧痕が施されるもの（121)，突起部分に粘土紐・粘土瘤・縄の圧痕・沈線などのいずれかが組合さって施文されたもの（85, 91, 92)，突起部分が地文の縄文のみのもの（118～120）がある。

(ハ)　口縁部に2～3個の小突起を有するもの

85は、2個の小突起を有するもので、下位にドーナツ状の粘土紐が貼付されている。

108は、同様に2個の小突起を有するもので下位に山形の貼付帯があり、斜縄文が施されている。

その他、4，122～186は、突起を有するものであるが詳細は不明である。4は、突起部分と底部が欠落したもので胴部は直線的で斜縄文が施され、焼成・胎土は、いずれもやや良である。

ii.平縁を呈するもの

平縁を呈するものには、沈線が施されるものと地文の縄文のみのものがある（187～204，208)。

187は、2本単位の沈線が斜位に施されたもので口唇部に刻目が施されている。

5，189，196，198～204は、地文の縄文のみのものであり斜縄文を施されたものが多く口唇部は縄の圧痕文・回転文が施されたものと無文のものがある。

5は、口縁部で下位が欠落、ややゆがんだ平縁で口唇部は無文・縄文が施されている。

208は、平縁に1個の台状突起を有し胴部はキャリパー状，口縁部はひらき、無節の斜縄文が施され、焼成・胎土いずれもあまり良くない。

188，197は、無文のもので器面に調整痕が残り、197は口唇部に縄の圧痕が施文されている。

②口唇部

口唇部については、無文のものと施文されているものがあり、施文されているものには縄の圧痕文・回転文，刺突文，刻目，沈線文があり縄の圧痕文・回転文が非常に多い。

122～130は、口唇部が施文されない無文のものである。

130～175は、縄の圧痕・回転文が施されるもので、口唇部に垂直に施文される場合，口唇部に斜位に施文される場合がある。

176～181，184，185は、刺突文が施されているもので、176，178，180，181，184，185には矢羽根状の刺突が施されている。

186は、口唇部に沈線文が施されているものである。

口唇部は、一般に隅丸、あるいは楕円を呈するものが多く、所謂三角形を呈するものはやや少ないようである。

③胴　部

胴部の形態は、直線的なもの，幾分膨みを有するもの，キャリパー状を呈するものがあり、全体としては、直線的な形態を示すものが幾分膨みを有するものよりやや多く、キャリパー状を呈するものは若干数である（6，205～207)。

6は、胴部から底部のもので、やや膨みをもち、

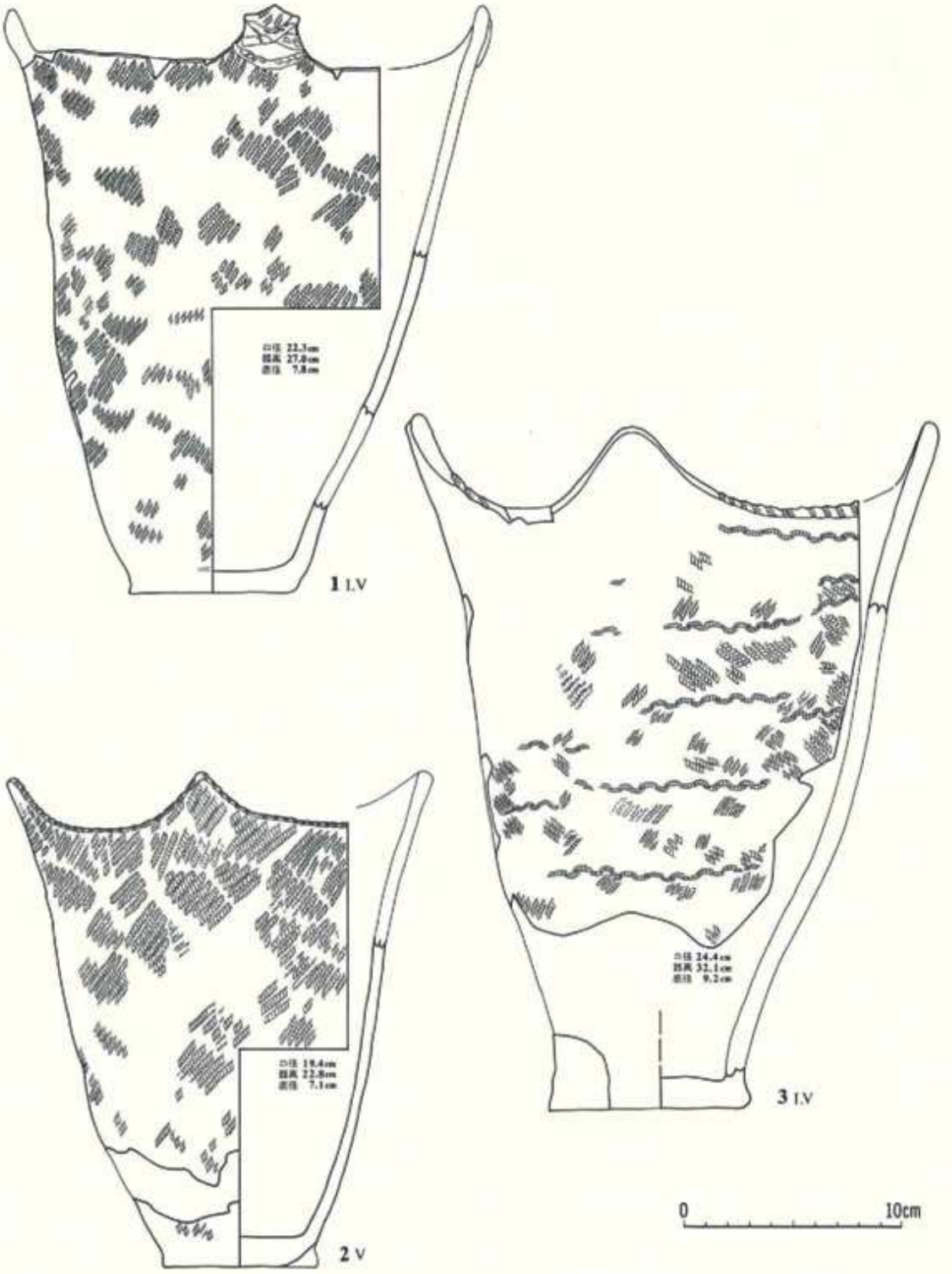


Fig. 39　遺構外出土土器(1)

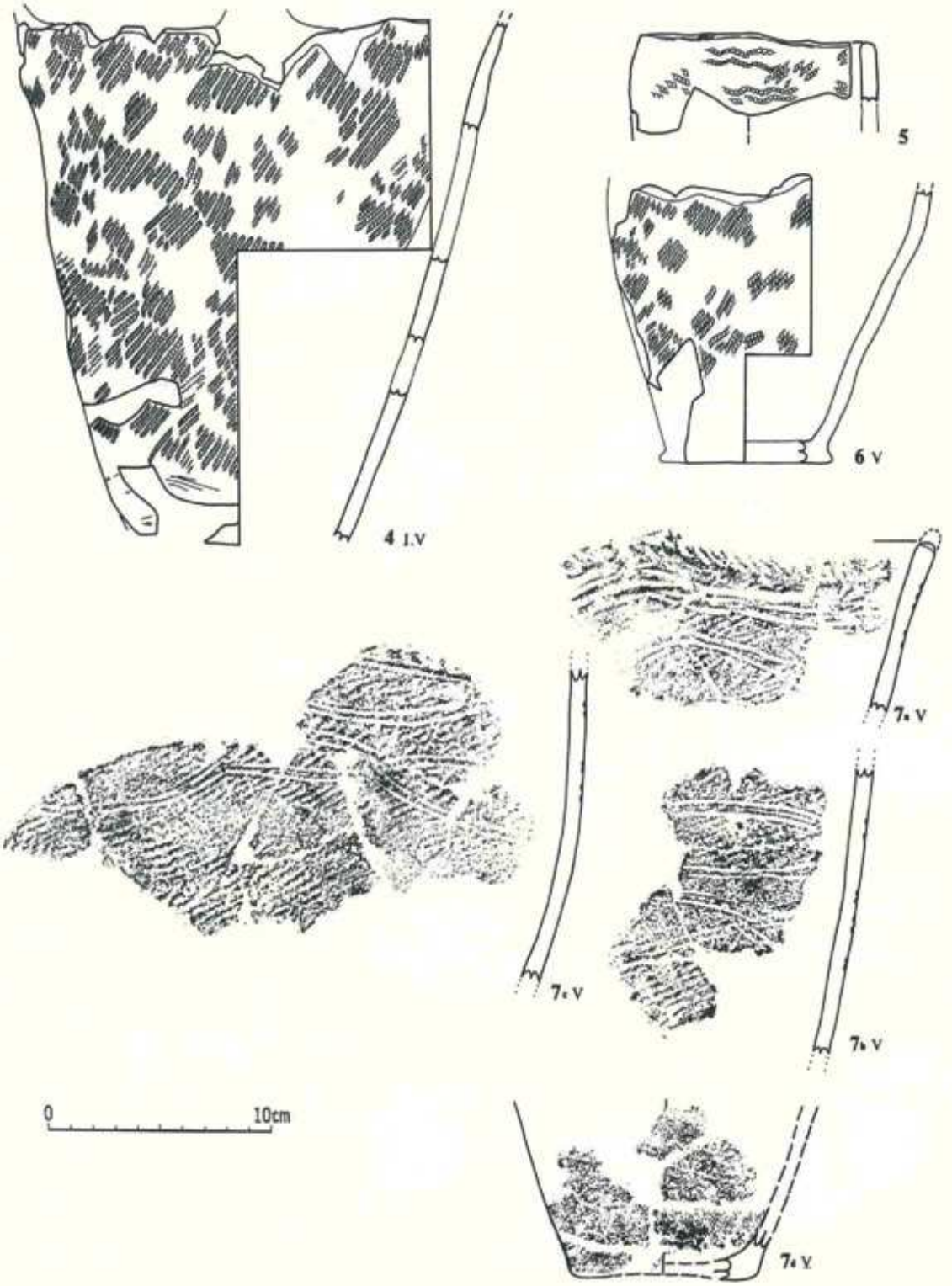


Fig. 40　遺構外出土土器(2)

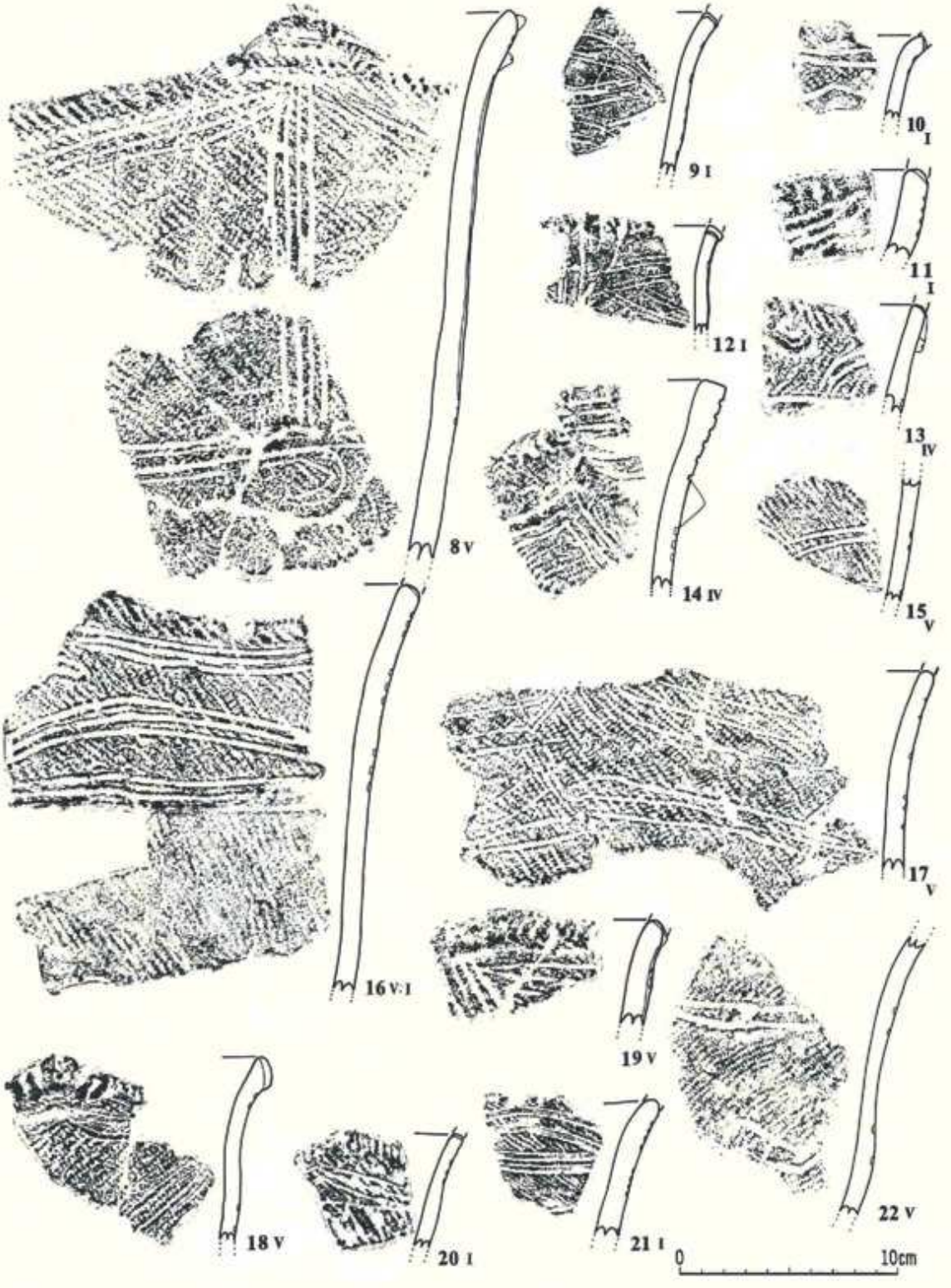


Fig. 41　遺構外出土土器(3)

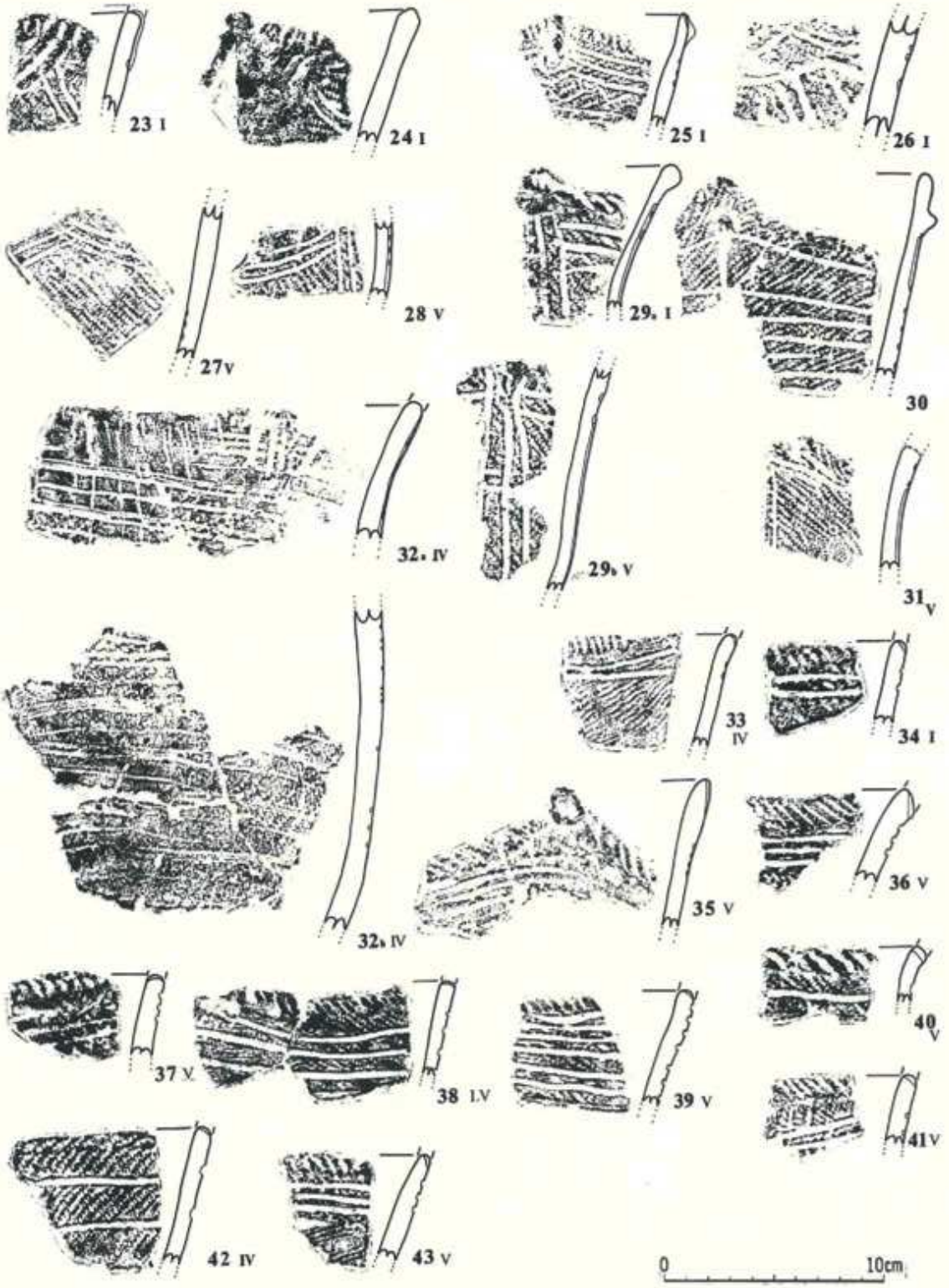


Fig. 42　遺構外出土土器(4)

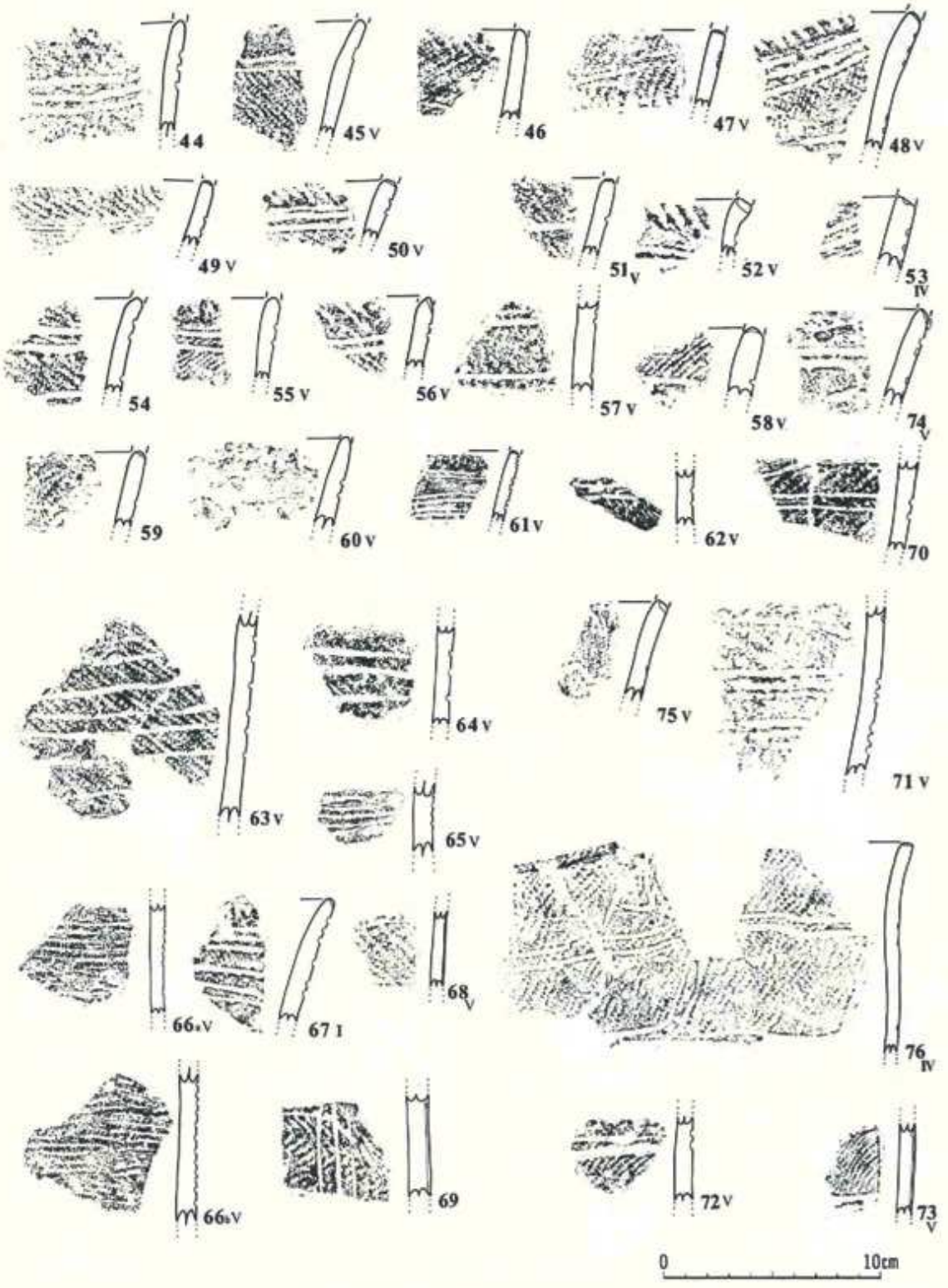


Fig. 43　遺構外出土土器(5)

Fig. 44　遺構外山土土器(6)

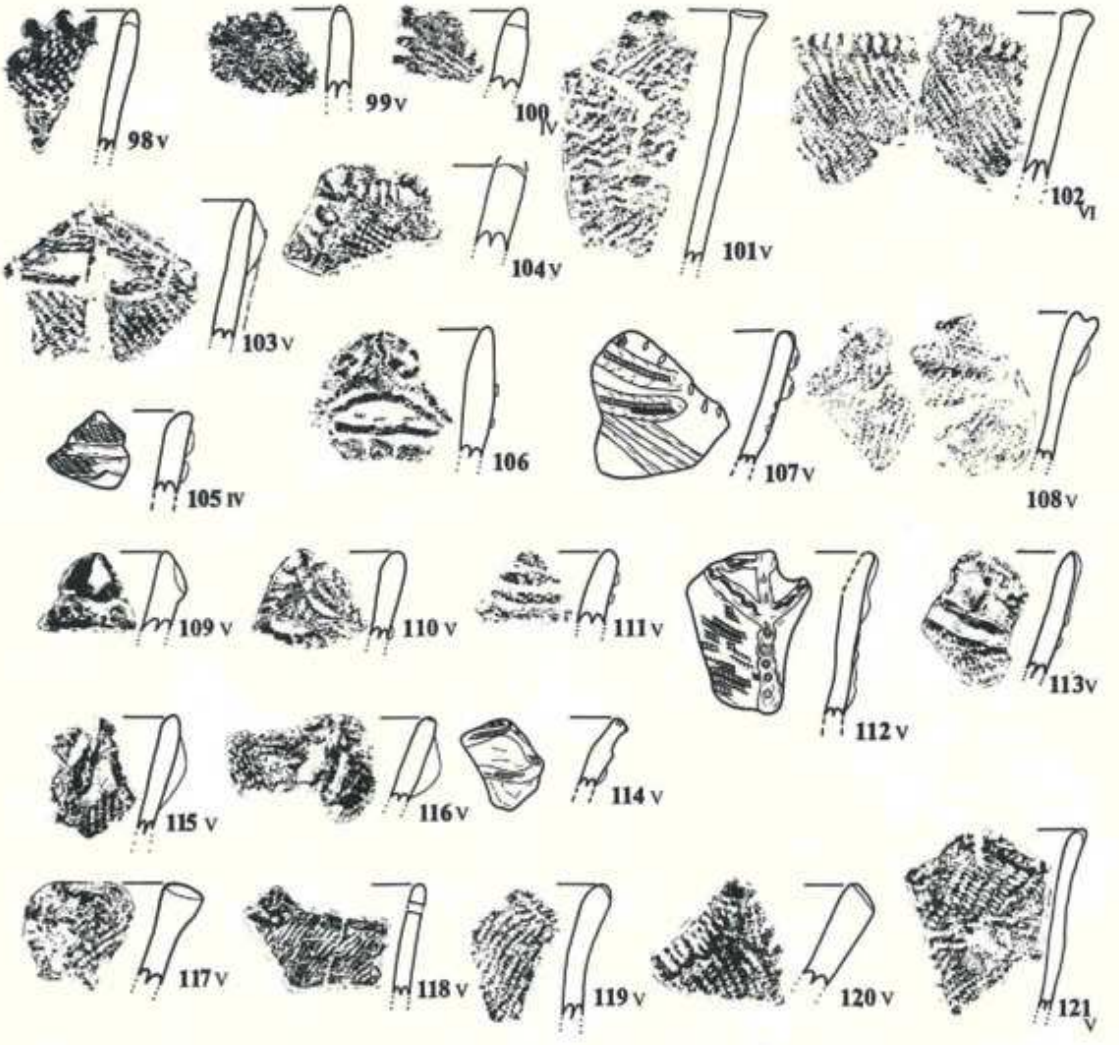


Fig. 45　遺構外出土土器(7)

斜縄文が施されており、焼成・胎土ともにあまり良くない。205～207は、いずれも胴部破片で、205は直線的，206，207は、やや膨みをもち、斜縄文が施されている。

④底　部

底部の形態は、胴部にかけて直線的なもの，底部直上がほぼ垂直に立ち上がるもの，底部が張り出すものに分けられ、Fig. 38に示すとおり、直線的な形状を呈するものが54％で多い（209～253）。

㈠　210～212，216，218～224，226，227，229，232は、底部から胴部にかけて直線的なもので底部直上に調整痕の残るものがあり、揚げ底のものが若干数ある。

㈡　209，211，213～215，217，225，230，231，233～241は、底部直上がほぼ垂直に立ちあがるもので、底部直上に調整痕の残るもの，揚げ底のものが若干数あり、236の底面には縄の圧痕が施されている。

㈢　228，241～253は、底部が張り出すもので、底部直上に調整痕の残るものがあり、揚げ底のものが若干数ある。

底部の焼成・胎土は、全般にわたりあまり良くない。

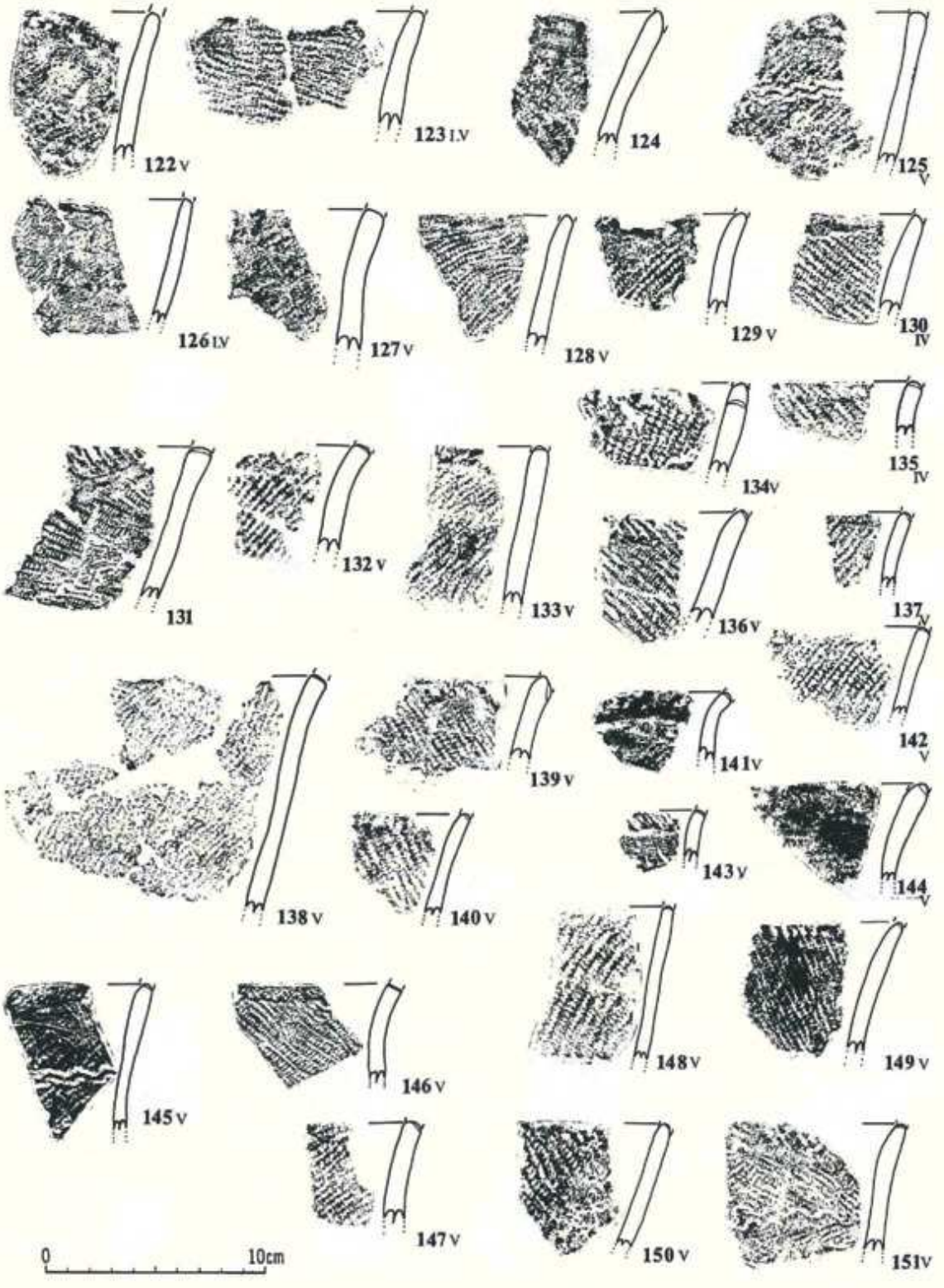


Fig. 46　遺構外出土土器(8)

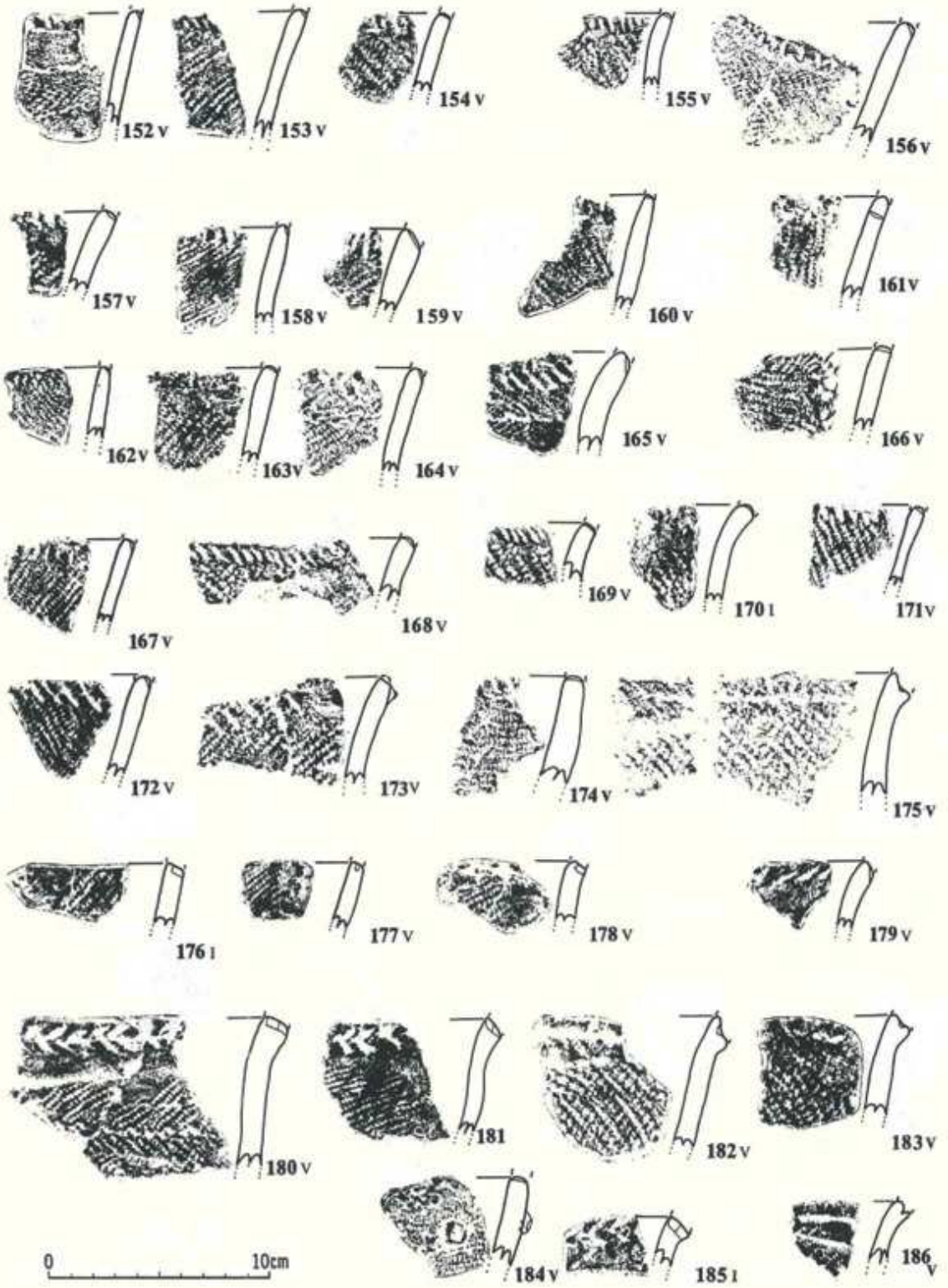


Fig. 47　遺構外出土土器(9)

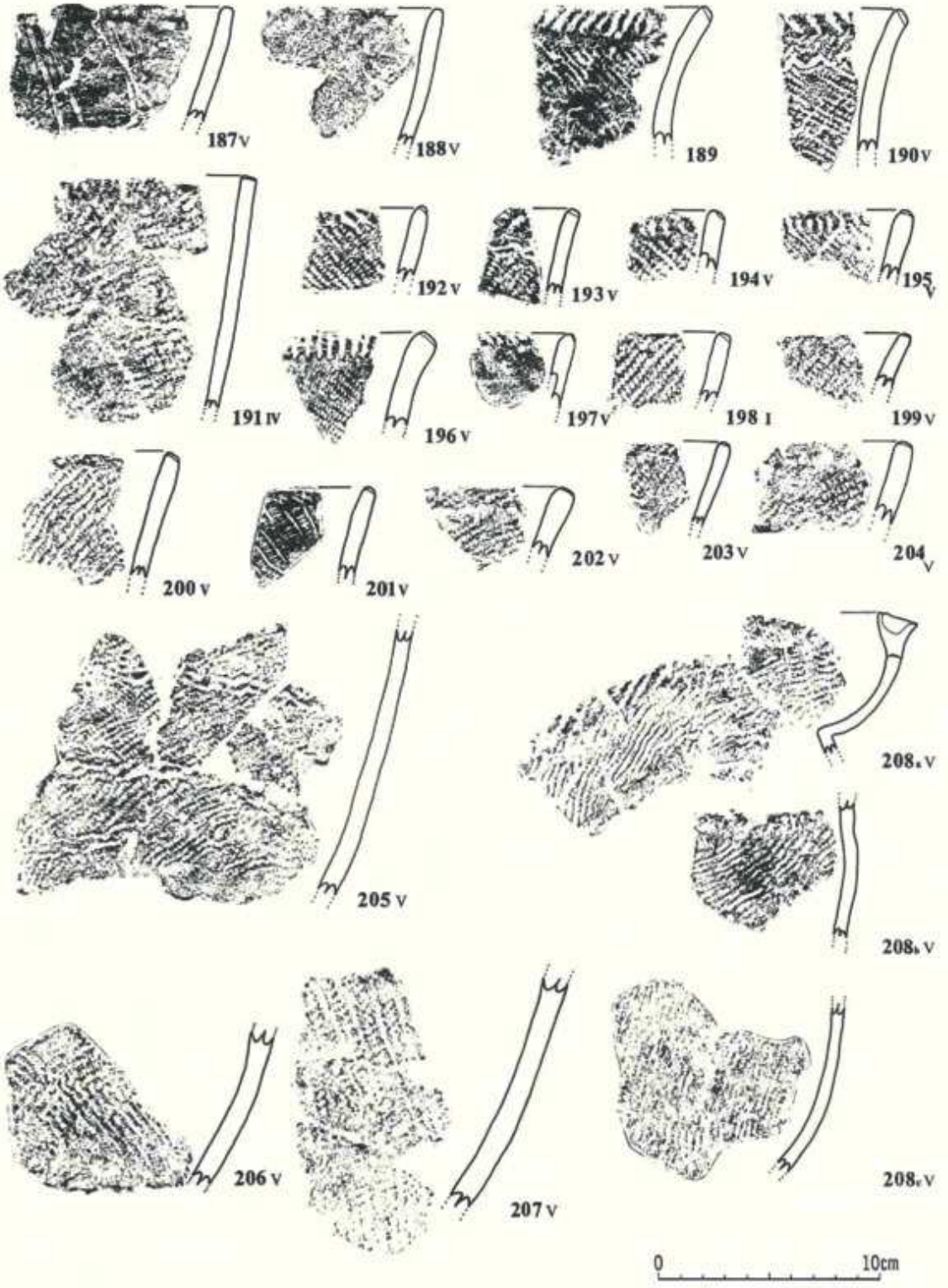


Fig. 48　遺構外出土土器(10)

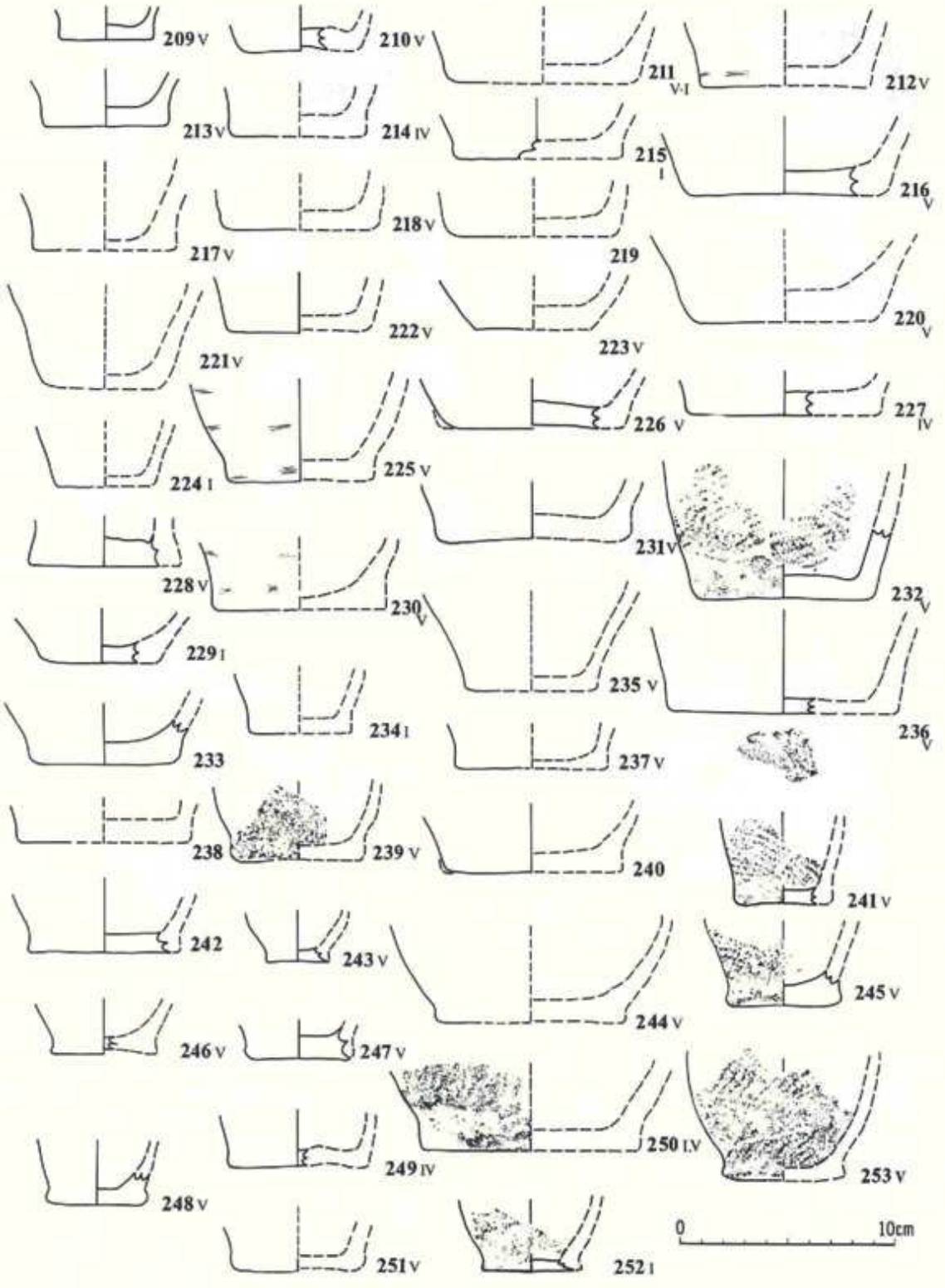


Fig. 49　遺構外出土土器(11)

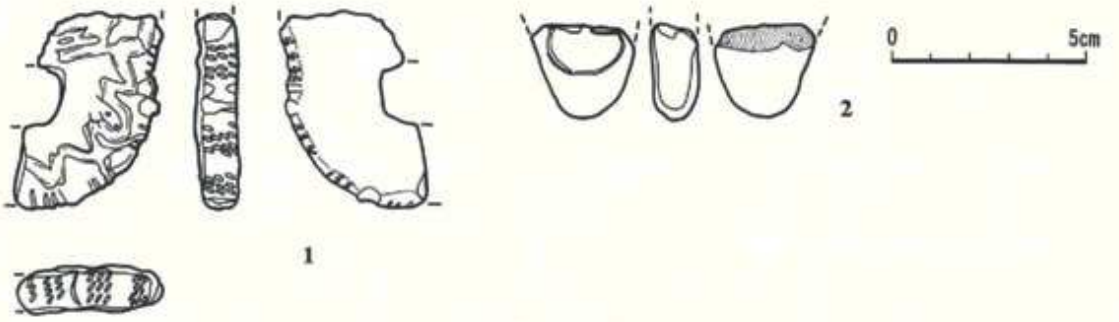


Fig. 50　土製品

小　括

本群の土器を概観すると、地文の縄文だけのものが非常に多く、沈線文が施されているもののなかでは、aの弧状の沈線が施文されるものが多い。沈線の施文具は、棒状、あるいは篦状工具によるものが多く、半截竹管によるものは、あまりみられない。さらに、胴部文様帯に貼付帯を有するものは、ほとんどみられない。器形をみると、口縁部に突起を有するものが多く、胴部から底部にかけて直線的なものがやや多い。器表面に施文される縄文については、単節の斜縄文のものが圧倒的に多く、文様帯に対する意識が薄れ、縄文への意識が顕著になっているようである。さらには、所謂大木系の土器の影響は、あまりみられない。

（鈴木）

b．土製品

Fig. 50—1・2いずれも土製品と分類した。土器の突起部の可能性を否定することはできないが、たとえば、1は、裏面がフラットであり、同様な文様や形状を示す土器が本遺跡から出土していないこと等を理由としてあげることができる。2も特異な形状を示すもので同様な土器は出土していない。したがって、土偶である可能性もあり、一応、土製品と分類したものである。

1は、D 2 GridV層より出土した。側縁部の表裏には縄の圧痕，表面には粘土紐による蛇様の貼付が施されている。有孔と考えられる。完形品がどのような形状を呈するものか不明であるが隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものと考えられる。とすれば、¼程度の破片とみられる。胎土には、石英や砂・小礫を比較的多く含んでいる。

2は、調査区北東の土堤部分より出土した。人の顔がモティーフとなっているように観察される。上・下関係は、不明確であるが、仮にFig. 50のように実測した。胎土には砂が多い。　（宮）

c．石　器

本調査で出土した石器・石製品は、総数247点である。大別すると、剥片石器類192点，磨製石器2点，礫石器類51点，石製品2点である。この他に素材・石屑として把握されるべき剥片・破片471点と礫が相当数出土している。

これらを器種ごとに分類し、形態・調整等の概要を記していく。分類基準（註1）は次に示すとおりであり、器種名は慣例的な呼称を用いた。

第Ⅰ群石器　剥片石器類　剥片剥離技術によって製作されたもの。

Ⅰ群A類　尖頭部と基部からなり、左右対称形を示す小型のもの。（石鏃）

Ⅰ群B類　尖頭部と基部からなり、左右対称形を示す大型のもの。（石槍）

Ⅰ群C類　器体長軸の一端に刃部を作出した篦状のもの。（篦状石器）

Ⅰ群D類　つまみ状の基部と刃部からなるもの。（石匙）

Ⅰ群E類　基部と尖頭状の錐部からなるもの。（石錐）

Ⅰ群F類　A～F類以外のもので、剥片に連続した調整剥離が施され、意図して刃部を作出したもの。（スクレイパー）

Ⅰ群G類　R. F.，U. F. を一括した。

第Ⅱ群石器　磨製石器　研磨技術によって製作されたもの。（磨製石斧）

第Ⅲ群石器　礫石器類　自然礫に調整加工を施したもの，磨痕・敲打痕・凹等の使用痕のみら

れるもの。

Ⅲ群A類　扁平な礫の周縁・縁辺を打ち欠いて整形し、機能面や刃部を作出するもの。（扁平打製石器）

Ⅲ群B類　自然礫の器面に磨りによる使用痕跡のみられるもの。（磨石）

Ⅲ群C類　自然礫の端部・側縁にハンマーとして使用されたと思われる痕跡及び加工を残すもの。（敲石）

Ⅲ群D類　自然礫の平坦面に、磨り・敲打等の痕跡を広く残すもの。（台石・砥石）

第Ⅳ群石器　　石製品　穿孔・研磨により製作されたもの。（垂飾）

第Ⅰ群石器

Ⅰ群A類　石鏃（1～33）　遺構内出土2点，遺構外出土33点の合計35点である。完形品17点，尖頭部のみを破損するもの9点，基部のみを破損するもの4点，尖頭部と基部を破損するもの3点である。破損率は、49%である。

〈形態〉　有茎と無茎があり、平面形態から次の様に分けられる。

a．円基鏃(1)　基部が最大幅をもち、弧状に作出されている。1点のみ出土した。

b．尖基鏃（2～5，P18－6）　側縁が緩やかに湾曲し、基部にかけてすぼまる形状である。基部は平担なものと尖るものがある。いわゆる柳葉形石鏃である。5点出土した。

c．（6～18，P1－9）　両端が尖り、器体ほぼ中位に最大幅をもち側縁が鋭く張り出す菱形状のものである。14点出土した。bと同じ尖基鏃として把えられる。17は、尖頭部が磨耗しており、ドリルに転用されている。

d．凸基有茎鏃（19～30・33）　器体中位に最大幅をもつが、側縁が丸味をもって加工され、基部から茎部にかけ撫で肩状に作出されるもの。13点出土している。

e．石鏃未製品（31・32）　2点出土した。

〈大きさ〉　器長51～22mm，器幅18～10mm，器厚8～2mmである。破損・未製品を除く完形品（略完形品含む）資料20点の長幅比は、3.0～1.7である。各類において、特に差異はない。尖頭部の開き角度は62°～34°の範囲にあり、cは、40°～44°に、dは、35°～40°位にまとまりがみられる。

〈素材・調整〉　素材には縦長の小破片を用いているものが、大多数を占めるが、1・4・8・10・12・14・15は横長の剥片が用いられている。

調整は、両面に周縁調整剥離が施されるが全般的に粗く、一次剥離面を残すものは、71%(24点)あり、cに多数みられる。

Ⅰ群B類　石槍（34～38）　全て遺構外からの出土である。完形品4点，破損品1点の合計5点である。

〈形態〉　出土数は少ないが、平面形態は多様である。基部が尖るものと、平坦なものがある。

a．34は、両端が尖り、中位に最大幅をもつ菱形状のものである。側縁の一方が石鏃c、対する側縁が石鏃d的である。

b．35は、尖頭部が丸みをもって作出され、基部は直線的にすぼまり、尖頭部比の小さい特異な形態である。

c．36・37は、両側縁がほぼ直線的で基部が平坦な五角形状のものである。38は、尖頭部だけの破損品で全体形は不明である。

〈大きさ〉　器長85～42mm，器幅35～24mm，器厚15～10mm，長幅比は、2.9～1.8である。尖頭部角は、63°～39°と、形態同様に較差が大きい。

〈調整〉調整剥離は、両面に施されるが、35の縁辺に細部調整が施されているのに比べ、36・37の調整は粗く、縁辺は、ステップフラクチャーを呈している。34の基部中央部分は肥厚しているが、始めの側縁調整が急峻で短い剥離であったために、その後、形状の小型化を避けるために調整は施されることなく残ったものと思われる。

Ⅰ群c類　箆状石器（39～41）　遺構外より3点出土した。

〈形態〉平面形態上、上方が狭く下方に開く短冊形及び撥形が、この種の基調となるものである。

a．39は、側縁が直線的で、刃部は弧状に作出される。全体的に短冊形である。41は、刃部を破損するため全体形は不明であるが、遺存する形状・厚さからみて石槍の基部とも思われず、本類に含めた。

b．40は、側縁が緩やかに内湾し、両端も丸味をもち、楕円形に近い形状である。本来の箆状石器とは異なる（註2）形状ではあるが、本類に含めた。

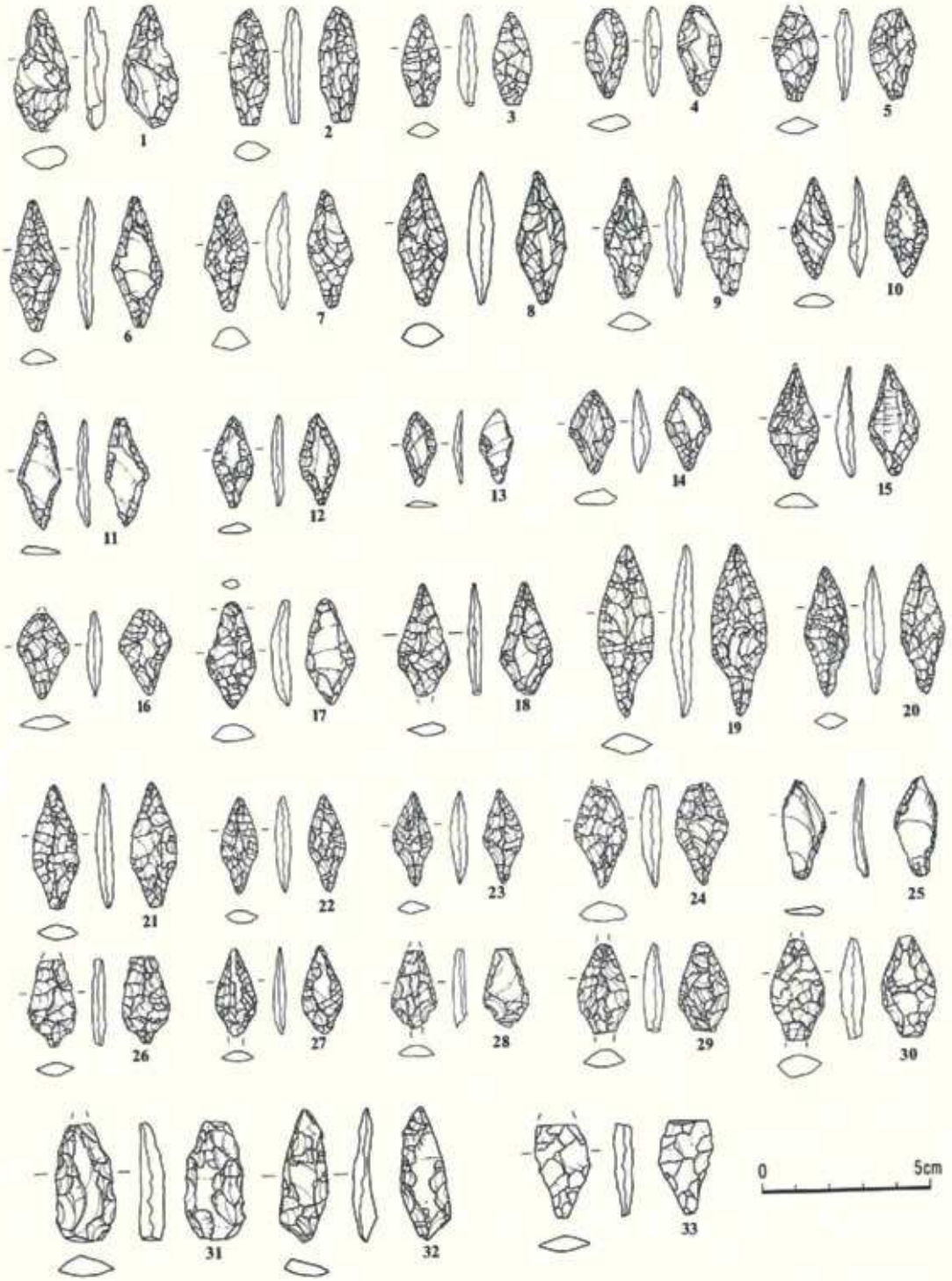

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
5cm

Fig. 51　剝片石器(1)

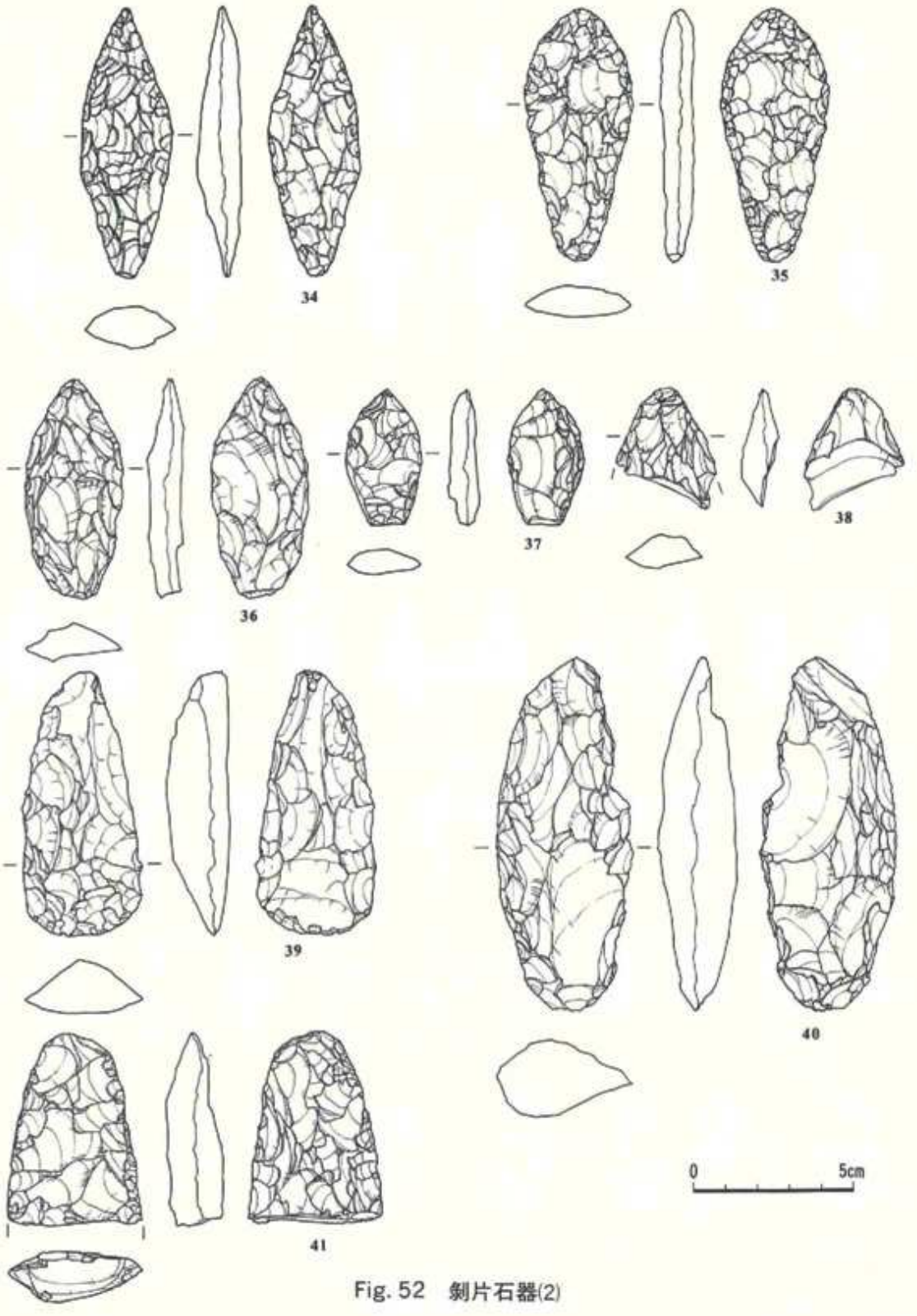


Fig. 52　剝片石器(2)

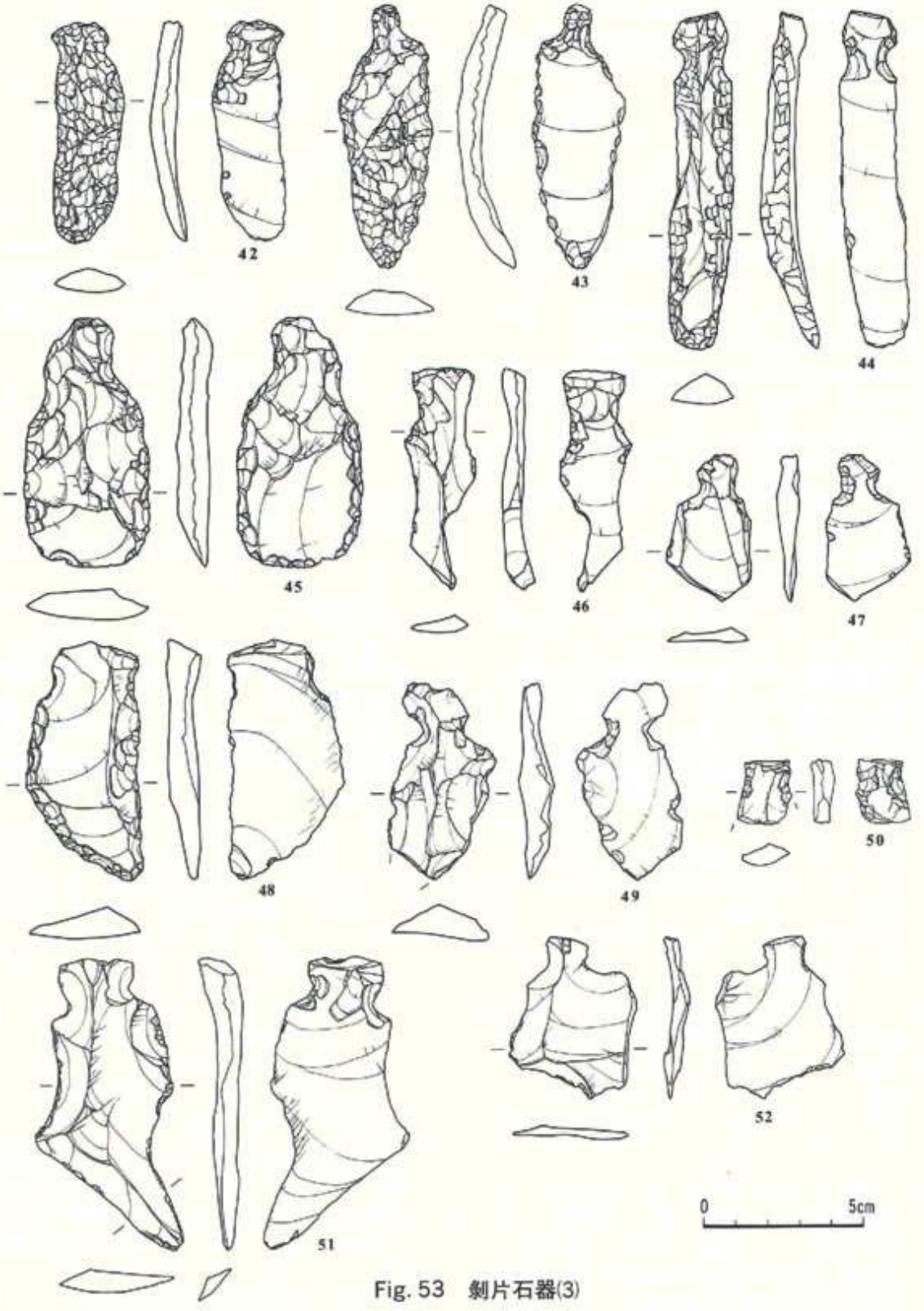


Fig. 53　剝片石器(3)

〈素材・調整〉　厚手の縦長剥片を素材とし、両面調整で整形される。39の背面側縁部の調整は粗く、急峻で高い剥離稜が残る。刃部の調整も背面に集中し、片刃に作出されている。刃部角は61°である。40も粗雑な調整であり、明瞭に刃部も作出されていない。両側縁は、つぶれているが、刃潰しとは断定できない。未製品の可能性もある。

Ⅰ群D類　石匙（42～52）　全て、遺構外からの出土である。完形品7点，破損品4点の合計11点である。

〈形態〉　つまみ軸と主要刃部の関係から、縦型石匙・横型石匙に大別すれば、本遺跡出土のほとんどのものは、主要刃部となる側縁がつまみ部とほぼ平行する縦型石匙に分類される。平面形態は様々であり、器幅の広いもの，狭いものがあるが意図的に器体を整形しているものは少ない。素材である剥片自体の形状に依存しているものが多く、特に形態に規格性はみられない。

〈素材・調整〉　素材には横長剥片を用いたもの（45・49・52）と縦長剥片を用いたもの（前記以外）がある。44は、背面に剥離稜をもつ縦長剥片が用いられている。

調整剥離は、つまみ部が両面調整により作出されるが、器体は、ほとんどのものが背面だけの片面調整である。剥片の周縁を調整し、刃部を作出するものと、素材剥片の鋭利な縁辺を刃部とし、簡易的につまみ部だけを作出したものに分けられる。つまみ部は、バルブの高まりを利用し、作出されるものが多く、打面を残すものもある。48は、ヒンジフラクチャー状の肥厚した剥片の端部に側縁を折り取る様な調整でつまみ部を作出している。49・52は、横長剥片の側縁につまみを作出しただけで、器体側縁にバルブ・打面を残す雑なものである。43は、丁寧な調整剥離が施され、尖頭状の器体をもつが、背面右側縁上部から左側縁に抜ける剥離が左側縁下部のエッジを剥取し、結果的に尖頭状の器体となっている。又、剥取によって出来上がった直角な側縁には、微細な剥離と磨滅がみられる。

Ⅰ群E類　石錐（56～60，80・84・85・87）　全て遺構外出土で、合計9点ある。回転穿孔及び刺突（突き錐）として機能したものを一括した。

〈形態〉　機能する錐部と保持するための基部が明瞭なものと、錐部から両側縁が広がる不明瞭なものとがある。平面形態は、二等辺三角形状，五角形状を基調としている。

〈調整〉

a．錐部と基部が周縁調整されるもの（56・58・60）。

b．錐部だけが調整されるもの（59・85）。

c．剥片の鋭利な端部が利用されるもの（80・87）。

56・58・60は、剥片の端部に尖頭状の短い錐部を作出するものである。59は、横長剥片の側端部に錐部だけを作出したものである。80・87は縦長剥片の端部を使用するもので、基部にはバルブを残す。87は削片状の剥片である。

錐部の断面形は、三角形状のものと、レンズ状のものがある。断面形は調整加工に左右されるもので、それは素材の形状に規制されているものと思われる。錐部の長さは、59を除き短いものが大半を占めるが、穿孔対象物が異なっていたものと考えられる。使用痕跡も顕著に磨滅しているものは少ない。

Ⅰ群F類　スクレイパー（53～55，61～79，81～85，86～100）　削器・掻器として機能したと考えられるものを一括した。遺構内4点，遺構外63点の合計67点が出土した。

〈形態〉　不整形剥片を素材とし、刃部の作出も一様でないため平面形は多様で、形態的特徴は促えにくい。

〈調整〉　ある程度、刃部の形状が意図され、剥片の形状を変える調整が施されるものと、剥片自体の形状に依存し、縁辺だけに調整剥離が施されるものとがある。調整状態で次の様に分けられる。

a．剥片の周縁・縁辺に両面調整が施され、尖頭部の器形となるもの（53～55，63，65，86）。53，54は、側縁が主要刃部として機能したと思われる。

b．a以外の両面調整が施されるものである（61～73，88～90，92）。周縁を両面調整されるもと一縁辺だけを両面調整するものの他に、70，71の様に錯交する調整剥離が施されるものもある。65は、石鏃未製品とも思われるが、急角度な調整剥離であることから区別した。68は、剥離で全面が覆われるものである。70，71は、破損したものか、折断されたものか不明であるが後者の可能性が強い。

c．剥片の背面のみに調整が施されるもの

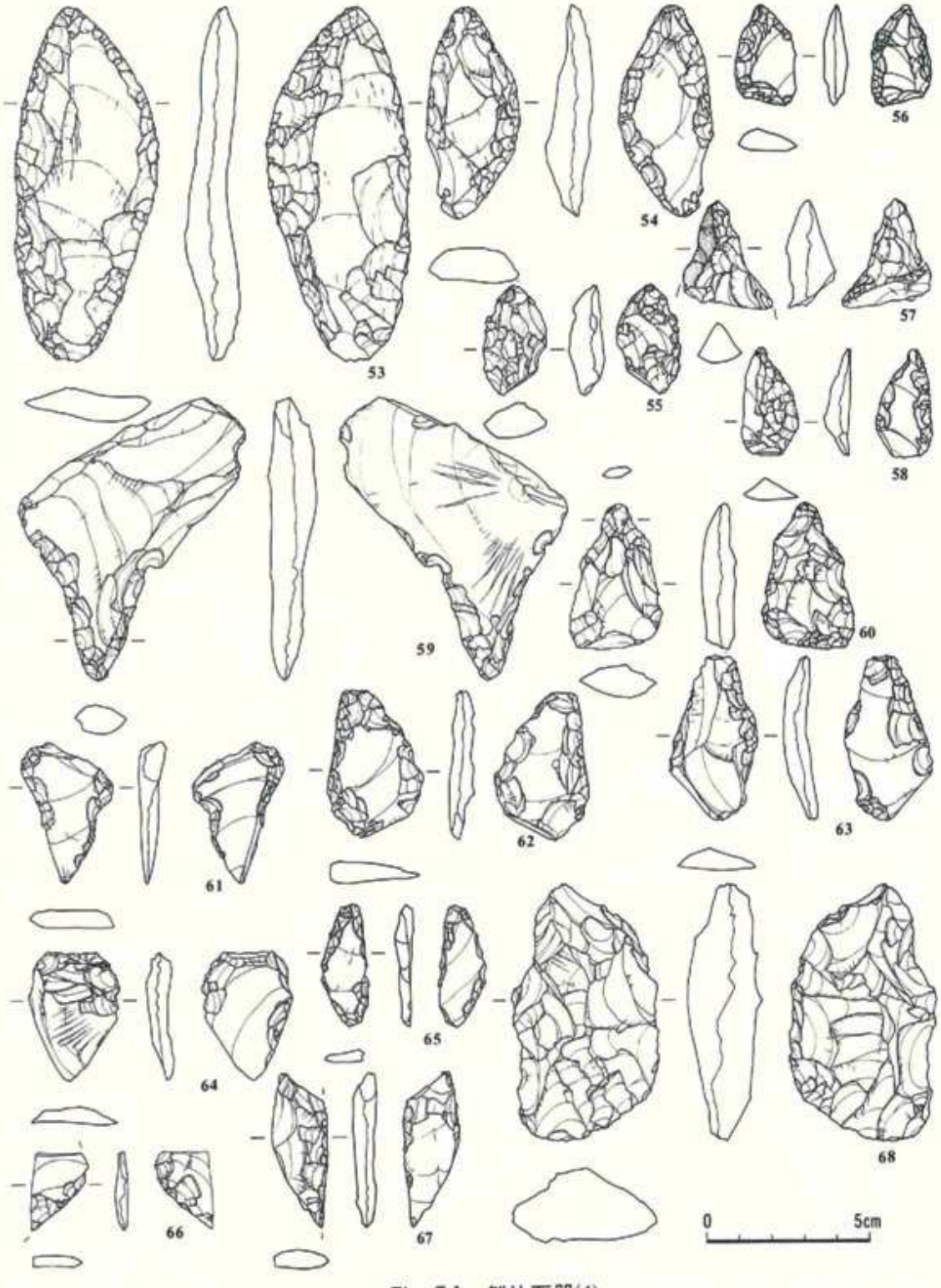


Fig. 54　剝片石器(4)

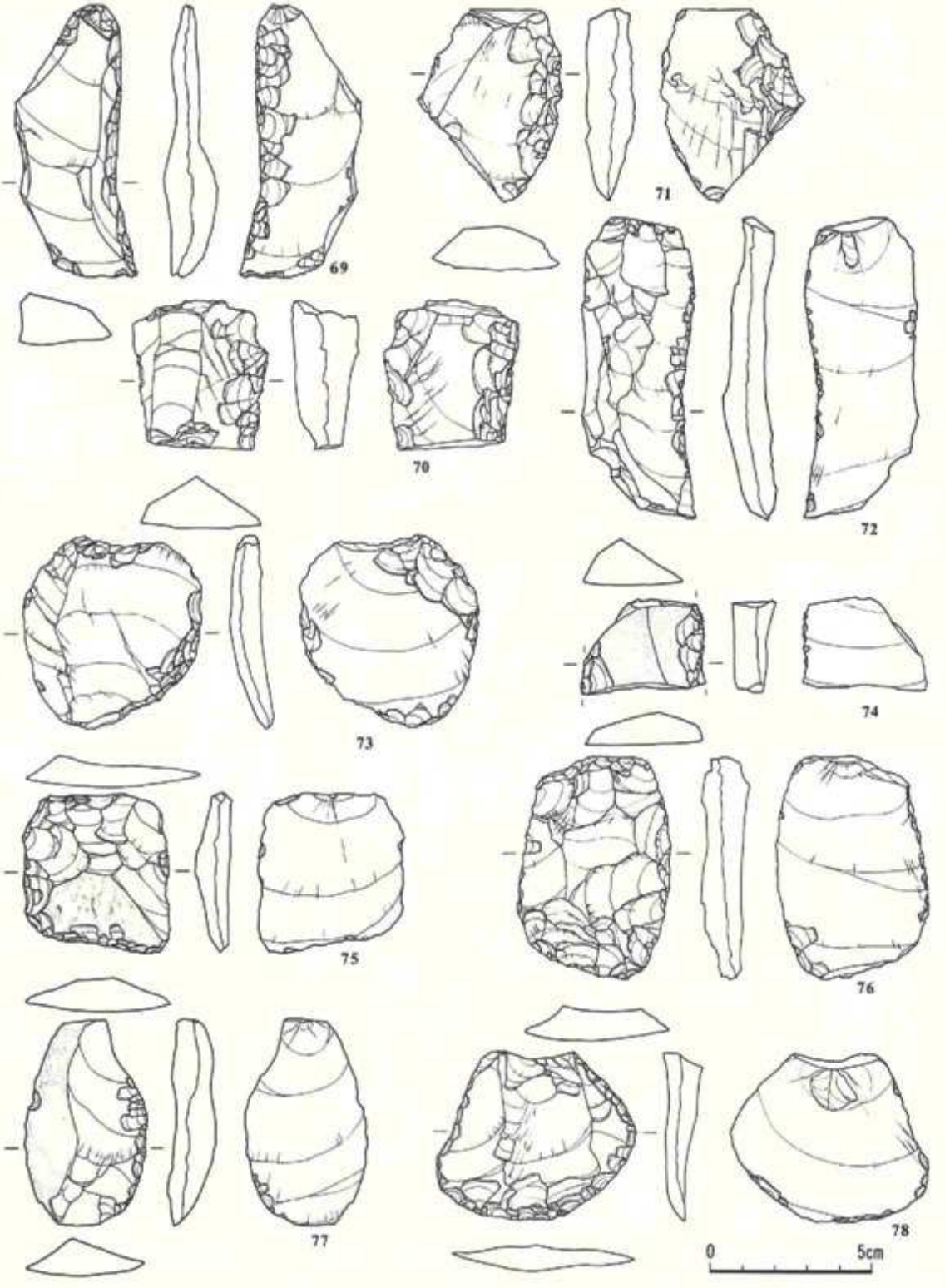


Fig. 55　剝片石器(5)

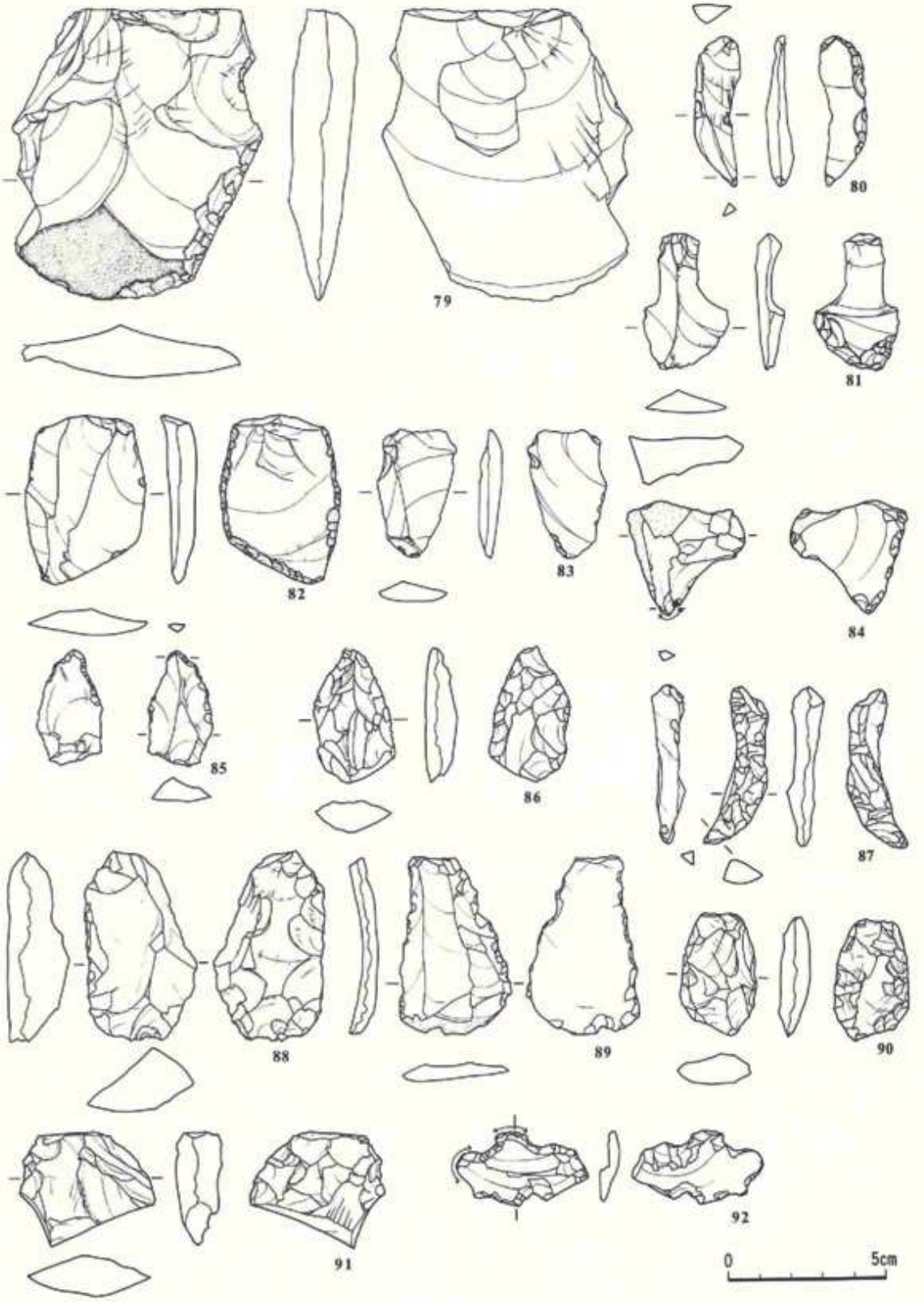


Fig. 56　剝片石器(6)

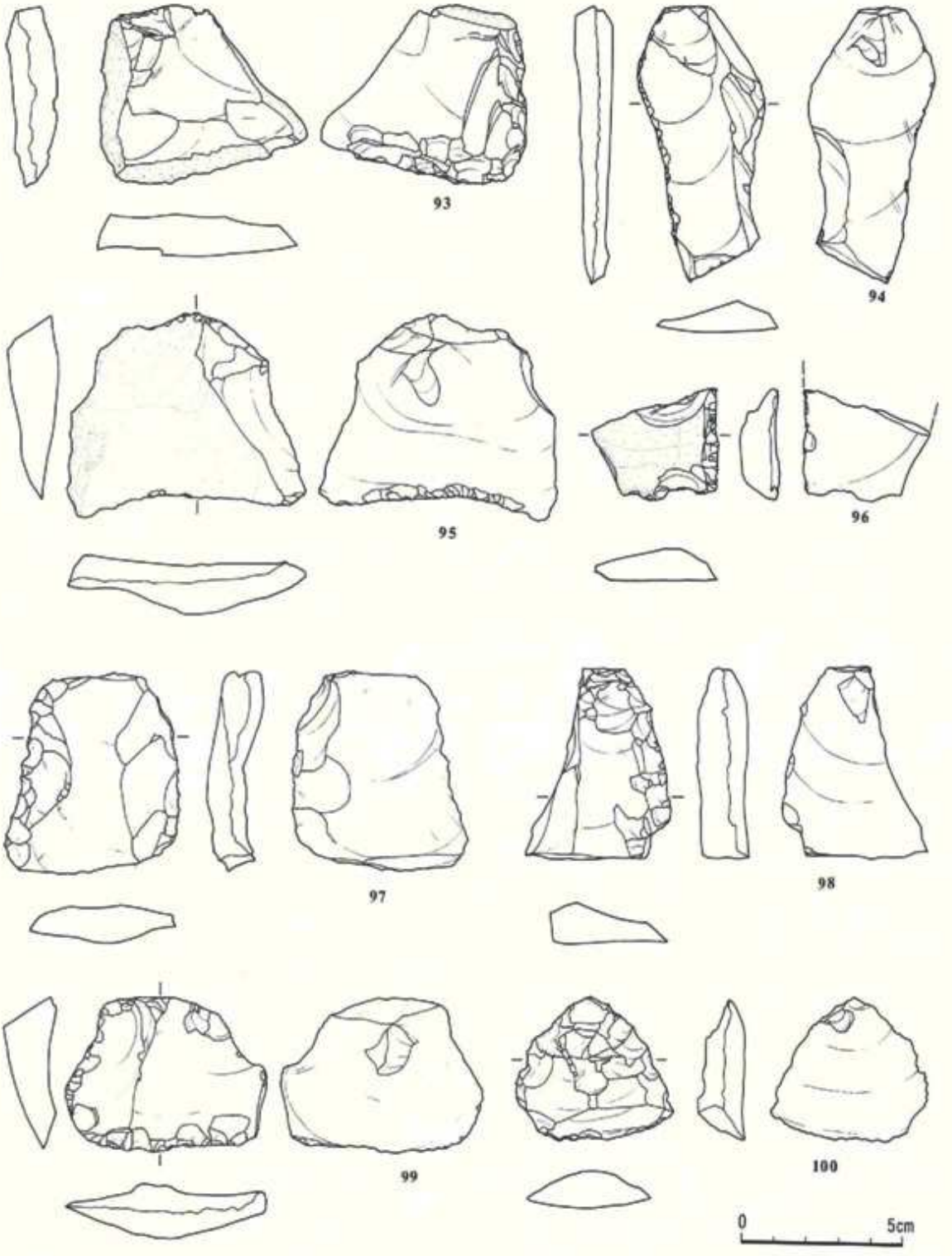


Fig. 57　剝片石器(7)

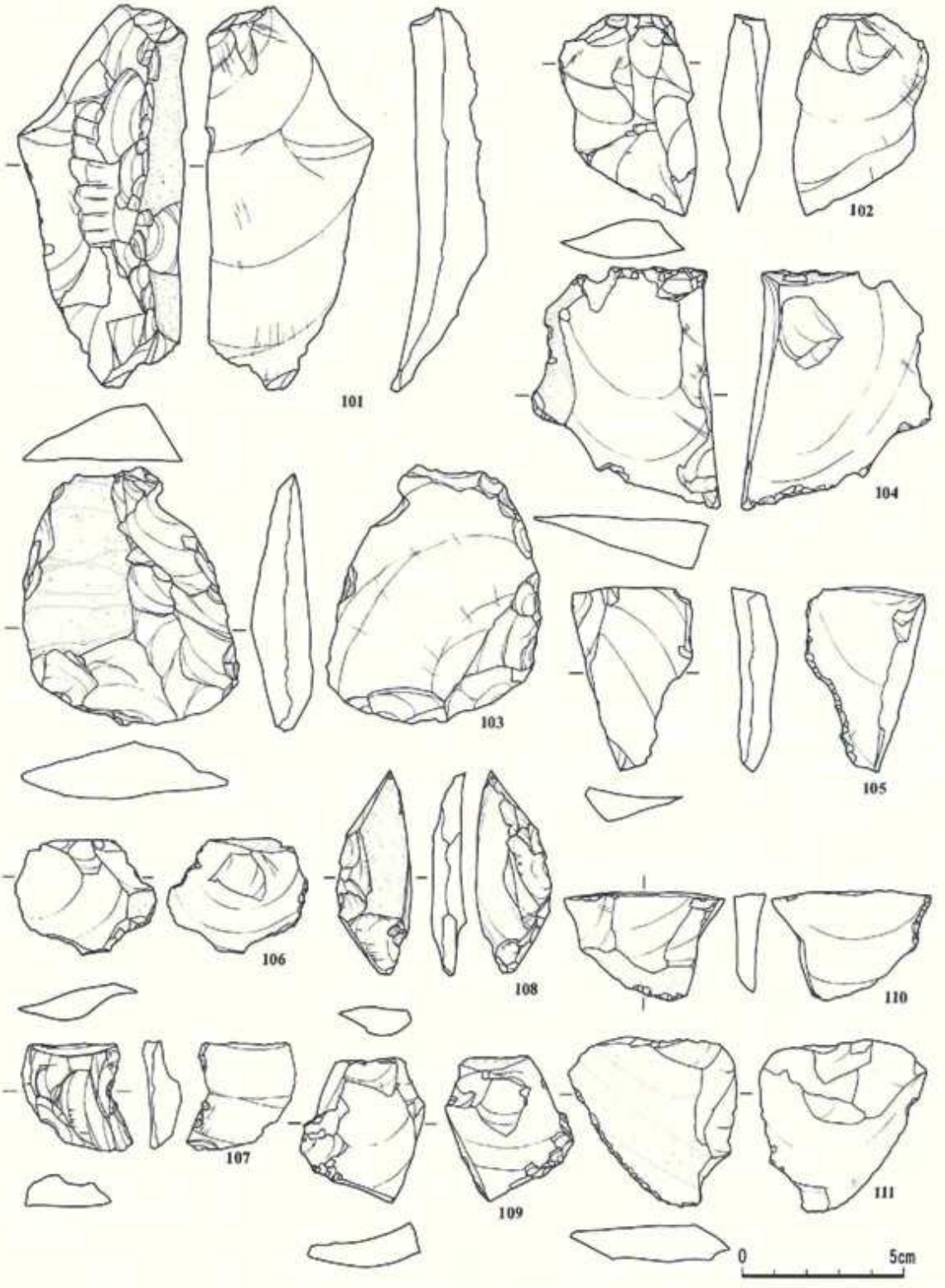


Fig. 58　剝片石器(8)

(74～79, 87, 94, 96～100)。75の背面が調整で覆われる他は、側縁・周縁調整が施されるものである。ほとんどのものが、腹面側に刃こぼれと思われる微細剥離を残している。

d．剥片の腹面のみに調整が施されるもの(81, 82, 91, 93, 95)。

Ⅰ群G類　R.F.，U.F.(83, 101～110)　剥離痕を有する剥片及び剥片の縁辺に使用痕跡として促えられる極微細な剥離・磨耗のみられるものを一括した。遺構内・遺構外を含め合計71点である。

全て肉眼観察によるものであるが、その使用痕跡は、剥片の鋭利な部位に顕著に認められるもので、大型の剥片から小剥片まで使用されている。R.F.においては、石器製作時の調整剥片も含まれている可能性もあるが、その判別は困難である。

第Ⅱ群石器　磨製石斧 (Fig. 59)

遺構外より基部を破損するもの1点と石斧残片1点が出土した。

〈形態〉　平面形は、胴部側縁が平行な細身の長方形である。横断面は、段状のくびれをもつ不整楕円形である。刃部は、緩やかな円刃で片刃である。刃部角は69°である。

〈製作技法〉　本資料は、擦り切り技法により製作されたものであり、胴部右側縁と正面左寄りに段状の擦り切り痕がみられる。正面上部に敲打痕が残るが、原材から打ち取る時のものか、整形上のものか不明である。器体には縦位の擦痕がみられるが、刃部には斜位の擦痕もみられる。又、刃こぼれと思われる小剥離があり、剥離後に再度研磨を施している。小型のものであり、一般に石ノミとして使用されたと理解されている。

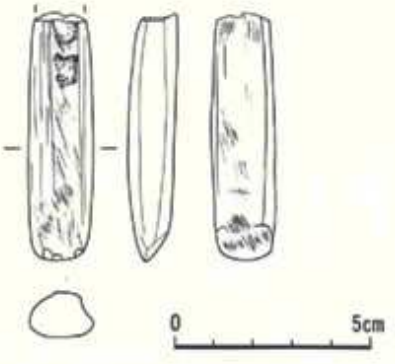


Fig. 59　石斧

第Ⅲ群石器

Ⅲ群A類　扁平打製石器 (1～21)　遺構内4点，遺構外27点の合計31点が出土した。完形品10点，接合完形品7点，破損品10点である。

〈形態〉　平面形態上、次の様に分けられる。

a．器体の一縁辺が直線的で、対する縁辺が弧状になる、半円状のもの (1～3，9～13, 21, P4－3)。

b．器体の二縁辺がほぼ直線的な楕円状ないし方形状のもの (4，14～16, 20)。

c．b類とほぼ同様に、二縁辺が直線的であるが、長幅比が2.0以上で細身の長方形状のもの(5，6，8，17, 18)。大きさは、器長186～109mm，器幅107～58mm，器厚35～11mm，長幅比は、2.4～1.2である。

〈素材・調整〉　素材には扁平な自然礫を用いたもの (4，11, 12, 15) と板状節理の礫を用いたもの (上記以外のもの) がある。

調整剥離は、ほとんどのものが両面調整であり、周縁調整されてるものと、一縁辺のみに調整が施されるものとがある。また、長軸辺に磨り面をもつ一群がある(1～9)。磨り面の幅は、最大20mm，平均しても10mm内外の狭く細長いものである。磨り面をもつものは10点あるが、特に形態との関連はみられず、各類にみられる。磨り面を有するものと、有しないものでは、破損率は後者が高く大きく2分割に破損する特徴がある。接合率も高い。12は、器体に敲打痕を有しているものである。

Ⅲ群B類　磨石類 (22～27)　磨る作業を主機能とするものを一括した。遺構外より6点が出土した。

〈形態・使用痕跡〉

a．平面形及び断面形が楕円形のもので、器面全体に使用痕跡がみられるもので2点 (22, 23) 出土している。23の一側面と両端部には敲打痕がみられる。

b．球形状のもので、全面に使用痕跡がみられる、いわゆる球状磨石である (24, 25)。

c．直線状の一縁辺とアーチ状に膨らむ対辺をもつもので、直線部が幅広の磨り面となっているもの(26, 27)。共に楕円状の礫を打割し、打割面を機能面としている。26の磨り面周縁の剥離は調整剥離と思われる。27は器面中央部に敲打による加工が全周する。いわゆる北海道式石冠である。

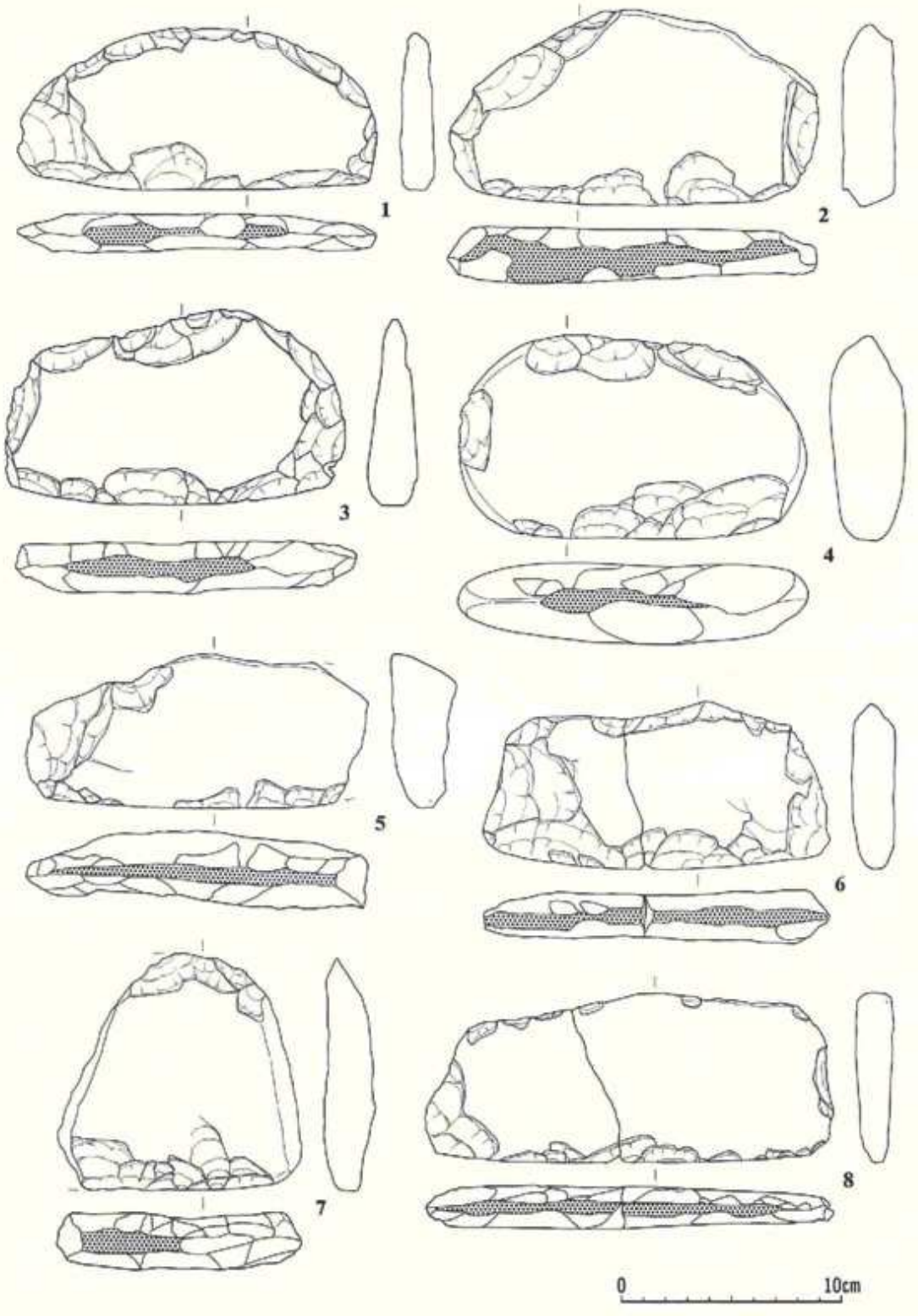


Fig. 60　礫石器(1)

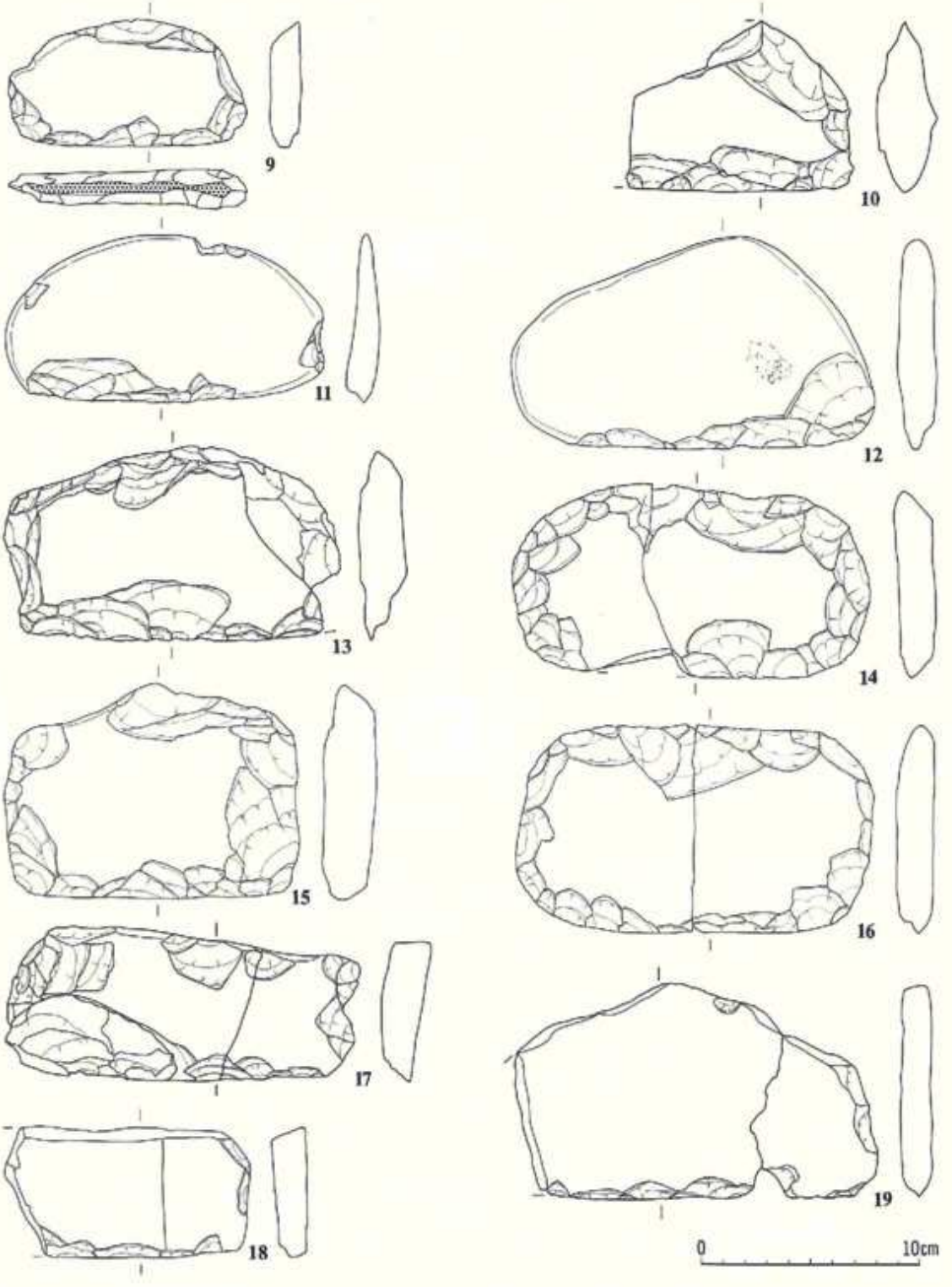


Fig. 61　礫石器(2)

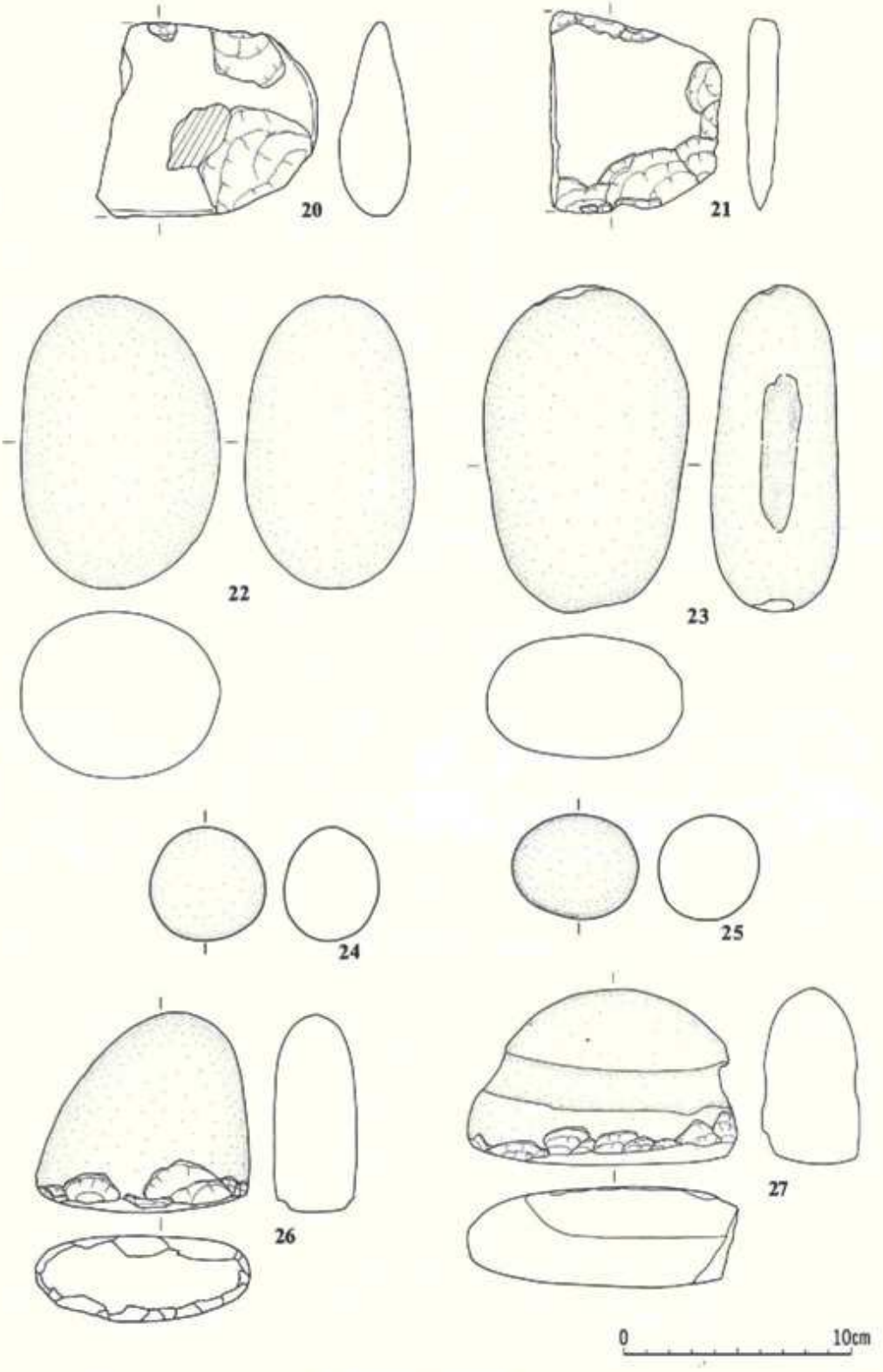


Fig. 62　礫石器(3)

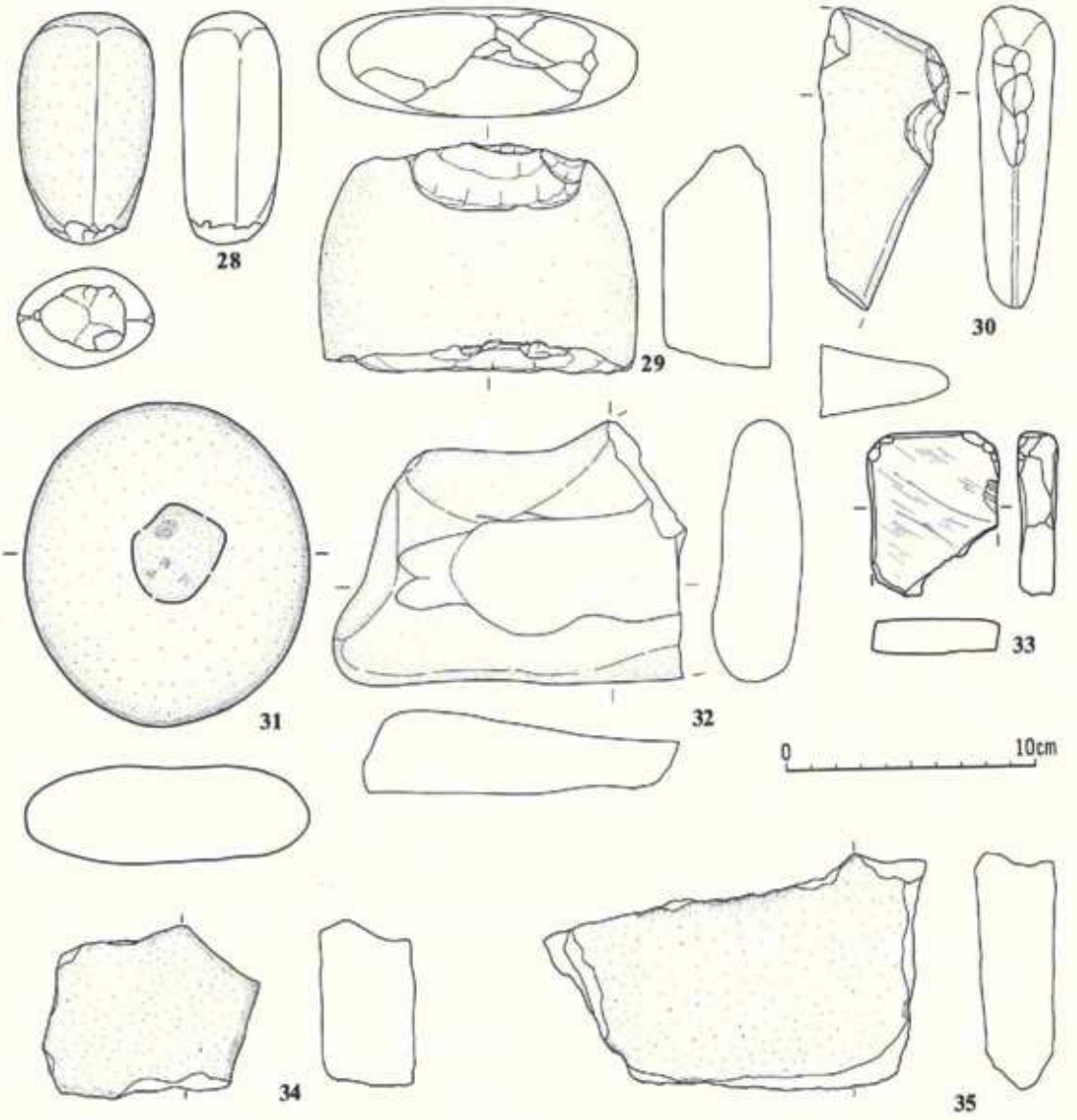


Fig. 63　礫石器(4)

0　10cm

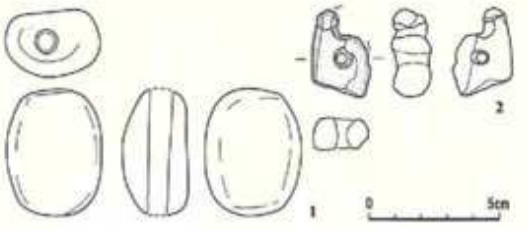


Fig. 64　石製品

ものを一括した。遺構内3点，遺構外5点の合計8点が出土した。

a．台として使用されたものである（34，35，P5－1）。合計6点出土している。31は、中型礫の中央部に浅い凹みをもつものである。

b．砥石として使用されたものであり、(32, 33) 2点出土している。33は、器体両面に顕著に磨り減った面をもつ。

第Ⅳ群石器　石製品（Fig. 64）　遺構外より2点出土した。内1点は破損品である。

〈形態〉　1は不整楕円形を呈し、横断面は蒲鉾形で単孔である。2は破損品であり、断定はできないが不整な方形状を呈するものと思われる。横断面は隅丸方形状で、双孔である。

〈製作技法〉　1は原石を研磨整形してはいるが、原形をそれ程変えるものではない。研磨は両端部に顕著である。穿孔は、一端からの片面穿孔であり、孔内にはリング状の回転痕が明瞭に観察できる。開孔部径と終孔部径の径差は2㎜である。2は軟質の石が用いられており、表面の風化損傷が著しく、器体整形の痕跡は不明である。穿孔は2ヵ所にみられ、共に両面穿孔である。この種の有孔石製品は、他の遺跡からも多数出土しているが1のような硬玉大珠は稀少である。森越遺跡から鰹節形大珠が出土している。蛇紋岩製で両面穿孔のものである。

剥片・砕片

総点数471点である。分布は、土器・石器と同様である。各々について詳細な観察はできなかったが、次の様な事がいえる。

○縦・横の長さが近似する不整形剥片が多い。

○打角は、90°～140°の範囲にあるが、110°～130°に集中する。

○剥片の末端は、ほとんどのものが、いわゆる feather end である。

D－10Gridから16点の剥片が集中して出土している（Fig. 66）。全てが同一母岩の剥片ではないが比較的大きめの剥片が意識的に集められ置かれた可能性がある。この中の数点には使用痕跡が認められた。

小　括

本遺跡から出土した石器類は、総数245点である。これらの石器を形態・製作技法・使用痕等から細分したが、分類に際しては、形態分類を主に行なった。

出土石器の95％以上が遺構外出土である。出土分布は Fig. 65に示す様に、調査区のほぼ全域より出土している。しかし数量的には相当の偏りがあり、調査区南側斜面から遺構の集中する付近に多く、標高53mのラインに沿う様に分布する。

出土した石器は、Ⅵaで前述したように縄文時代中期中葉のものとみられる。

次に、出土石器について気付いた点を器種ごとに記す。

石鏃は、尖基鏃，凸基有茎鏃が中心であり、一般的北日本の石鏃形態（工藤　1977）と一致するものである。石槍についても小型化する傾向で同様である。

石匙は、簡易的につまみだけを作出するものが多く、形態よりも機能を優先にした剥片利用が特徴的であり、ほぼ同時期である見晴町B遺跡出土のものも同様の特徴をもつ。縄文時代前期に多量に出土し、ある程度規格化された石匙が、以後急激に出土量を低下させる事と関連づければ、その機能を代用するものとしてスクレイパー，R.F.，U.F.があげられる。これらの石器は、出土数も多く、当時期において利器としての石器に対する概念に変化があったものと推察される。この事は、単に剥片を有効的に使用する合理性だけでなく、石器製作における目的剥片の剥取という剥離技術とも合わせて考えていく必要があるであろう。

扁平打製石器は、円筒式土器文化に特有な石器であり、これまで多数の遺跡で様々な分類が成され種々論じられている。本遺跡出土のものは、板状礫を素材とするものが多く（註5）、素材となる礫も相当数出土している。形態的には様々であるが、擦り面を持つものと持たないものがあり、数量的には極端な差はない。しかし、破損するものは、後者が多く、それが製作時の破損とも思われ

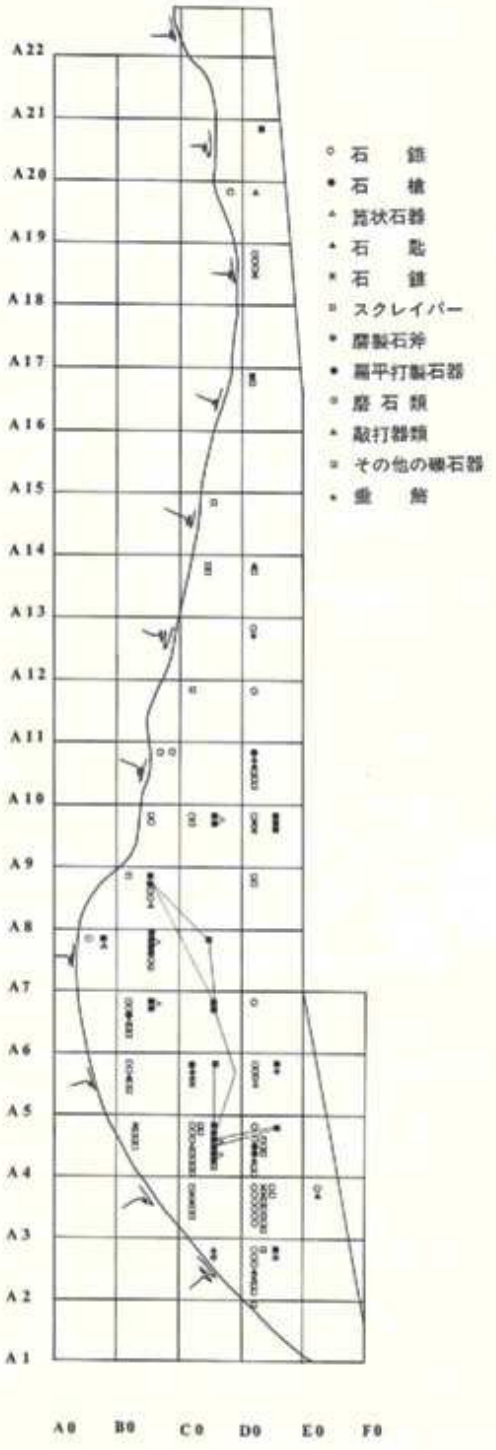


Fig. 65　遺構外出土石器分布図
（Ⅰ～Ⅵ層）

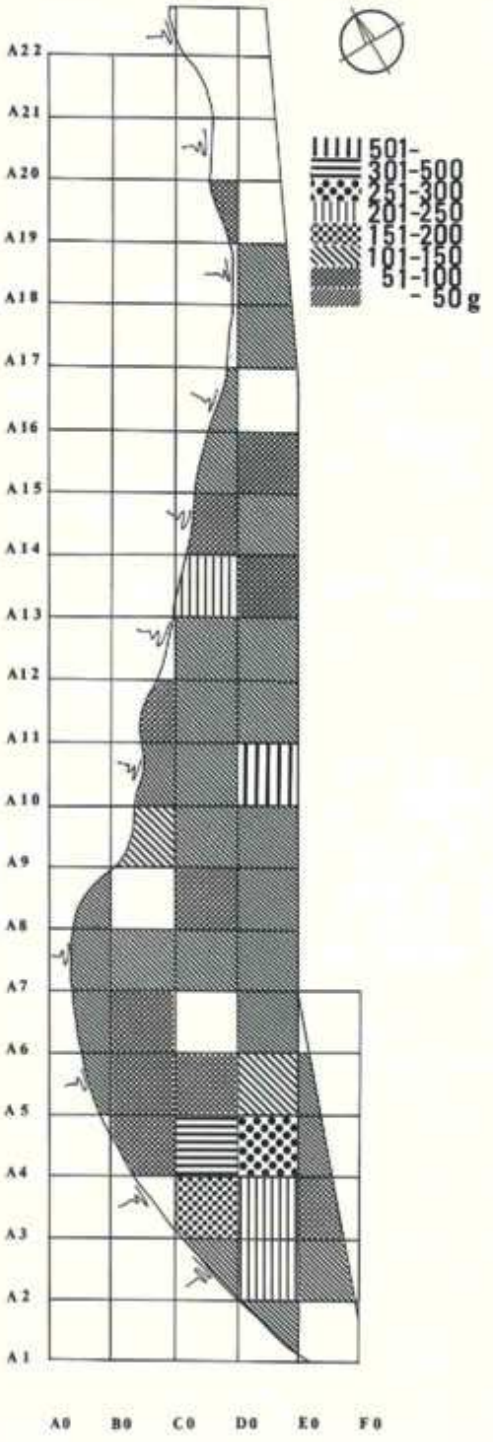


Fig. 66　遺構外出土の剝片石器と
剝片の重量分布(Ⅳ～Ⅵ層)

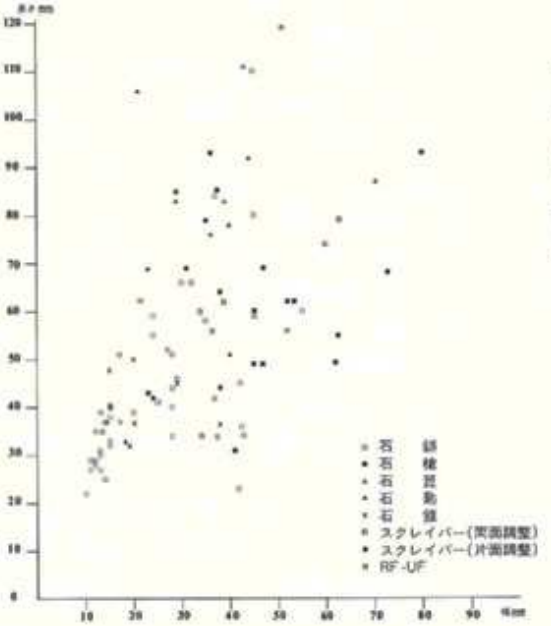


Fig. 67　剥片石器類長幅相関図

Fig. 72　大岱沢A遺跡出土石器組成図

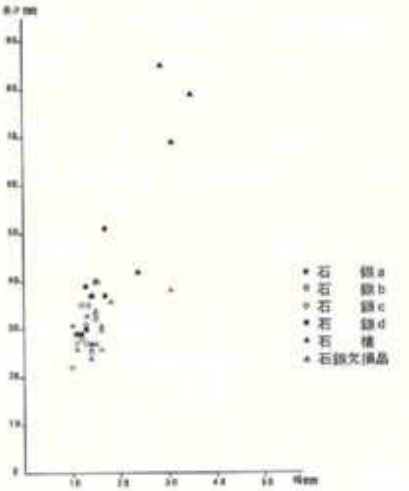


Fig. 68　石鏃長幅相関図

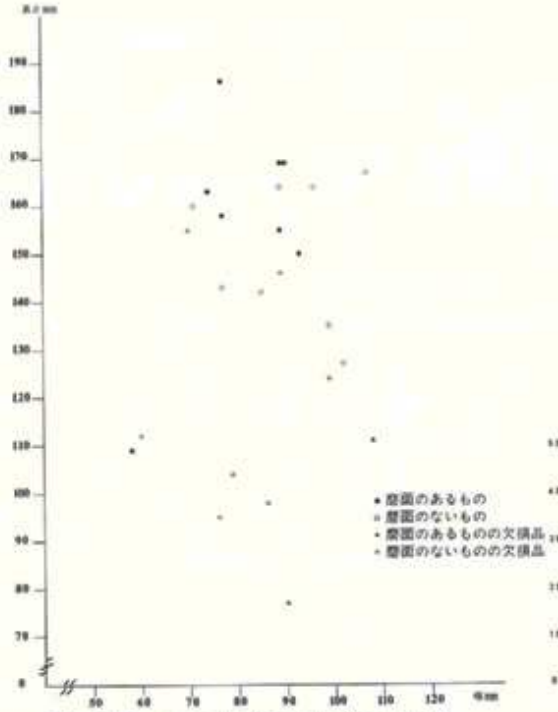


Fig. 71　扁平打製石器長幅相関図

Fig. 69　石鏃・石槍の長幅比・尖頭部比・尖頭部開き角度

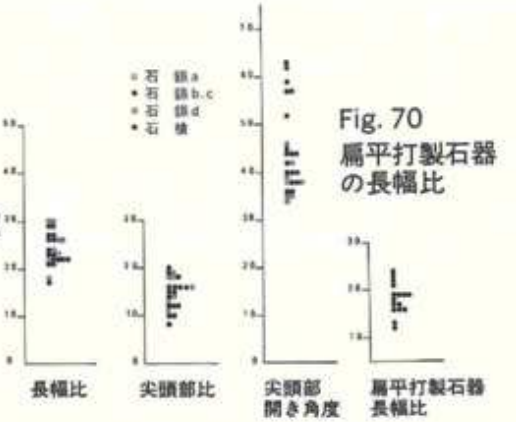


Fig. 70
扁平打製石器の長幅比

Fig. 67～72

ず、使用時の衝撃によるものであれば、敲く機能があげられる。また、擦り面を持つものと考え合わせると、擦り切る・敲き切るという機能が想定される。礫石器においては、複合的機能（註6）を有するものが多い事が知られているが、擦り面を持つものが使用頻度によるものか、別の機能・用途を兼ねるものかは断定できないが、P4上層遺構から台石と伴出した3点の資料をみると、2つのタイプが同時（註7）に使用されていたことが窺える。

石器組成は、Fig. 72に示したが、小面積(720m²)より出土した石器類で促えたものであり、限定された時期ではあるが組成としては不十分なものと思われる。組成を構成する一般的器種は、ほとんどのものが出土している。

剝片石器類では、R.F.，U.F.の割合がスクレイパーとほぼ同数であるのが特徴である。この2つを1つのものとしてみた場合、次いで石鏃が多く、ほぼ時期を同じくする。近野遺跡・山崎遺跡A－3区と似た傾向にある。

礫石器類では、扁平打製石器の割合が多く、縄文時代中期末には減少傾向にあるこの石器が他を圧倒しており、北海道式石冠がわずか1点より出土していない。近野・山崎両遺跡では、扁平打製石器と北海道式石冠が同率であり、他の磨石類に比べ出現率が少ない点で、当遺跡とは異なっている。全体的にみて、剝片が半数以上を占めているが石核の出土がなく、剝片は母岩から剝取された後、持ち込まれた可能性が強い。また、剝片の大半は使用剝片であることが特徴的であり、遺跡の性格（場の選定）を究明する上で重要な意味をもつものである。

（小田川）

註

（註1）　石器の分類・計測基準は『砂沢平遺跡』1979　青森県教育委員会を引用・参考とした。

（註2）　本資料と類似するものが、青森県『槻ノ木遺跡』　1982　より29点一括出土している。「篦状石器か打製石斧か決め難く、両方の可能性がある規格性の強い石器である」としている。

（註3）　『和野前山遺跡』　1983　青森県教育委員会　P214・215

（註4）　見晴町B遺跡・小砂子遺跡のものは、扁平な円礫を素材とするものが多く、小岱遺跡のものは円礫を素材とするものとほぼ同数である。

（註5）　同様の資料が、白坂遺跡から出土している。北海道式石冠の未製品の可能性もある。

（註6）　小砂子遺跡の擦石第5類に分類されているものは、素材・形態・調整で本遺跡のものと類似する点が多いが、長軸辺に擦り面を持たない。また、第6～8類に分類されている擦り面の対辺に敲打痕のあるものや、両端部を石錘様に調整するものは本遺跡からは出土していない。

（註7）　小岱遺跡では、本遺跡と同タイプのVA2類が最も多く出土している。他のすり石類と比較すると、遺構外から多く出土している。これは場によって使用器種が異なり、場は、作業対象物に規制されるものではないかと考えられる。

d．その他の遺物

その他の遺物として、陶磁器片9点，陶器片3点，鉄製品11点が出土している。

陶磁器は、鉢・蓋・皿など、陶器は小鉢(?)，大徳利，擂鉢で、確実な産地は特定はできないが、近世と近代所産のものであろう。鉄製品については、鉄鍋と思われるものがあるが、いずれも銹化が激しく、個体を特定出来ない。　（鈴木）

Table 2　大岱沢A遺跡出土の剥片石器の属性（Fig.51～55）

番号	名称	出土区	層	大きさ(mm)	重さ(g)	石質
1	石鏃	D 3	Ⅴ	37×17×7	3.3	頁岩
2	〃	D 3	Ⅰ	35×12×6	2.0	〃
3	〃	C 4	Ⅴ	28×12×5	1.3	〃
4	〃	D18	Ⅴ	27×13×5	1.6	〃
5	〃	D 4	Ⅰ	(27)×14×5	(1.6)	〃
6	〃	D 2	Ⅰ	40×15×5	2.1	〃
7	〃	C 3	Ⅰ	35×13×7	2.5	〃
8	〃	E 3	Ⅰ	40×15×7	3.4	〃
9	〃	B10	Ⅴ	37×14×6	2.1	〃
10	〃	B 6	Ⅴ	31×13×6	1.4	〃
11	〃	D 3	Ⅰ	(33)×13×4	(1.0)	〃
12	〃	C 4	Ⅴ	27×12×3	0.9	〃
13	〃	D 6	Ⅴ	22×10×2	0.4	黒耀石
14	〃	D 9	Ⅰ	25×14×5	1.4	頁岩
15	〃	D 2	Ⅶ	(33)×15×5	(1.8)	〃
16	〃	D12	Ⅴ	(26)×16×4	(1.3)	〃
17	〃	B 5	Ⅴ	32×15×5	2.0	〃
18	〃	表採	Ⅰ	(34)×15×4	(1.6)	〃
19	〃	D 2	Ⅰ	51×17×7	4.0	〃
20	〃	D 4	Ⅰ	39×13×5	2.3	〃
21	〃	A 7	Ⅴ	37×14×5	1.8	〃
22	〃	D 3	Ⅰ	(29)×11×4	(1.1)	〃
23	〃	D11	Ⅴ	29×12×5	1.0	〃
24	〃	D 3	Ⅴ	(31)×16×6	(2.3)	〃
25	〃	C 4	Ⅰ	30×13×4	1.0	〃
26	〃	C 9	Ⅰ	(26)×14×4	(1.25)	〃
27	〃	B 6	Ⅴ	(26)×12×4	(0.4)	〃
28	〃	D18	Ⅰ	(24)×14×4	(1.2)	流紋岩
29	〃	D 5	Ⅴ	(27)×15×6	(2.8)	頁岩
30	〃	B 5	Ⅴ	(30)×16×7	(2.8)	〃
31	〃	D 3	Ⅰ	(35)×18×8	(5.0)	硅岩
32	〃	D18	Ⅴ	40×15×7	2.8	頁岩
33	〃	C10	Ⅴ	(28)×17×6	(2.3)	〃
34	石槍	D10	Ⅴ	85×29×15	27.8	〃
35	〃	D 4	Ⅰ	79×35×11	28.0	流紋岩
36	〃	D 4	Ⅴ	69×31×12	22.5	頁岩
37	〃	C 5	Ⅰ	42×24×10	8.6	〃
38	〃	B 6	Ⅴ	(38)×(32)×(10)	(8.5)	流紋岩
39	箆状石器	B 6	Ⅰ	83×39×20	53.1	硅岩
40	〃	C 4	Ⅴ	111×43×25	101.7	流紋岩
41	〃	土壌	Ⅰ	(60)×42×17	(43.7)	頁岩
42	石匙	B 5	Ⅴ	69×23×12	13.0	〃
43	〃	C 5	Ⅴ	83×29×8	22.1	〃
44	〃	C 5	Ⅳ	106×21×8	22.8	〃
45	〃	C 2	Ⅰ	78×40×10	33.8	〃
46	〃	D10	Ⅴ	70×22×11	(8.1)	〃
47	〃	D 4	Ⅰ	(46)×(27)×5	(6.0)	〃
48	〃	E 3	Ⅰ	76×36×10	26.0	〃
49	〃	C 7	Ⅴ	62×34×12	13.4	〃
50	〃	D13	Ⅴ	(20)×(17)×(7)	(2.7)	〃
51	〃	D 2	Ⅴ	92×44×14	23.7	〃
52	〃	D10	Ⅴ	51×40×9	7.5	〃
53	スクレイパー	D 5	Ⅴ	110×45×17	61.3	〃
54	〃	D 3	Ⅰ	66×30×15	22.5	〃
55	〃	D 3	Ⅰ	39×20×11	6.4	黒耀石
56	石錐	D 3	Ⅴ	32×19×7	3.9	頁岩
57	〃	D18	Ⅰ	(34)×(28)×(15)	(8.0)	玄武岩
58	〃	D 3	Ⅴ	33×18×7	3.2	頁岩
59	〃	B 4	Ⅰ	87×70×15	57.7	〃
60	〃	D 2	Ⅴ	45×29×10	12.3	〃
61	スクレイパー	D 4	Ⅰ	44×28×9	7.2	〃
62	〃	D 8	Ⅴ	46×29×8	8.3	〃
63	〃	B 5	Ⅴ	51×28×10	9.7	〃
64	〃	D 8	Ⅴ	40×28×8	7.5	〃
65	〃	D 4	Ⅰ	38×15×6	9.4	〃
66	〃	D 3	Ⅰ	(24)×(18)×(4)	(1.5)	〃
67	〃	D 3	Ⅰ	(48)×(18)×7	(5.9)	硅岩
68	〃	C19	Ⅴ	80×45×24	70.9	頁岩
69	〃	D 2	Ⅰ	84×37×17	37.3	〃
70	〃	D 4	Ⅰ	45×42×21	36.3	〃
71	〃	B 4	Ⅴ	59×45×15	38.5	〃
72	〃	表採	Ⅰ	93×36×16	45.6	〃
73	〃	B 9	Ⅴ	60×55×13	33.3	硅岩
74	〃	D 2	Ⅰ	(29)×(39)×(13)	(13.6)	頁岩
75	〃	B 6	Ⅴ	49×45×16	23.9	流紋岩
76	〃	C13	Ⅴ	69×47×15	45.8	頁岩

Table 3　大岱沢A遺跡出土の剝片石器・磨製石器・礫石器・石製品の属性(Fig. 55～64)

剝片石器 (Fig. 55～58)

番号	名称	出土区	層	大きさ(mm)	重さ(g)	石質
77	スクレイパー	D10	V	64×38×15	30.5	頁岩
78	〃	C 9	V	52×62×12	25.8	〃
79	〃	B 8	I	93×80×21	137.5	流紋岩
80	石錐	D 9	V	48×15×8	3.3	頁岩
81	スクレイパー	C14	V	43×23×(9)	(5.6)	〃
82	〃	D13	V	44×38×11	20.7	〃
83	U F－R F	D 3	I	41×25×7	6.7	〃
84	石錐	C 5	I	36×38×16	14.3	〃
85	〃	C 3	V	37×20×8	5.1	〃
86	スクレイパー	C 3	V	43×26×10	8.4	〃
87	石錐	D 9	V	50×20×11	4.9	黒耀石
88	スクレイパー	D 1	I	59×36×20	29.2	頁岩
89	〃	C 4	V	56×36×11	11.8	〃
90	〃	D 3	I	39×24×10	9.1	〃
91	〃	C 4	I	37×43×14	18.7	〃
92	異形石器	D 3	IV	24×42×6	4.8	瑪瑙質頁岩
93	スクレイパー	C 4	V	56×64×16	47.8	頁岩
94	〃	C 3	I	86×39×14	30.1	〃
95	〃	B 5	I	64×74×16	58.0	〃
96	〃	B 4	I	35×39×12	15.0	流紋岩
97	〃	B 6	I	62×55×18	53.9	瑪瑙
98	〃	D 4	V	60×46×17	44.7	頁岩
99	〃	C13	V	48×62×17	36.3	〃
100	〃	C11	V	49×45×15	25.1	〃
101	U F－R F	D10	V	119×52×30	100.0	〃
102	〃	D 2	V	62×42×16	32.0	〃
103	〃	C 4	V	80×67×19	83.7	流紋岩
104	〃	C 4	V	75×59×15	60.0	頁岩
105	〃	D 5	V	58×37.5×12	17.2	〃
106	〃	D 2	V	36×43×12	11.5	〃
107	〃	D10	V	34×34×10	11.3	〃
108	〃	B 4	V	64×23×10	11.8	〃
109	〃	B 4	I	46×38×14	14.4	〃
110	〃	D 3	V	34×50×10	15.3	〃
111	〃	D 4	I	53×52×12	25.6	〃

磨製石器 (Fig. 59)

1	磨製石斧	D 2	V	(64)×17×13	(22.75)	結晶片岩

礫石器 (Fig. 60～63)

番号	名称	出土区	層	大きさ(mm)	重さ(g)	石質
1	扁平打製石器	B 7	I	163×74×18	300.0	安山岩
2	〃	表採	I	169×89×25	590.0	〃
3	〃	B 7	I	155×89×24	445.0	〃
4	〃	D20	I	150×93×35	258.0	〃
5	〃	D 9	V	(155)×70×32	(432.0)	〃
6	〃	C 4 C 5	I V	158×77×25	393.0	〃
7	〃	D 9	V	(111)×(108)×26	(430.0)	〃
8	〃	C 6 C 4	I V	186×77×20	422.0	〃
9	〃	土塊	I	109×58×18	163.2	〃
10	〃	D16	I	(104)×79×28	(273.0)	〃
11	〃	D 2	I	143×77×16	210.0	〃
12	〃	A 7	V	167×107×19	390.0	凝灰岩
13	〃	C 4 D 4 C 4	I V V	153.8×89×22	(366.0)	安山岩
14	〃	C 4 C 4	I V	164×89×20	210.8	〃
15	〃	C 9	V	135×99×25	552.0	〃
16	〃	B 6	V	164×96×18	490.0	〃
17	〃	B 8 C 6 C 7	I V I	160×71×23	417.0	〃
18	〃	B 8	V	(112)×(60)×16	(175.0)	〃
19	〃	D 9	V	(166)×99×19	(414.0)	〃
20	〃	B 7	I	(98)×86×31	(285.0)	〃
21	〃	D 5	I	(77)×(90)×(15)	(175.0)	〃
22	磨石類	B 7	V	130×88×74	1,270.0	〃
23	〃	B10	V	115×91×56	1,020.0	〃
24	〃	B 8	V	52×51×42	145.0	〃
25	〃	B 8	I	56×46×45	165.0	〃
26	〃	土塊	I	89×95×38	465.0	〃
27	〃	B 7	I	121×78×45	615.0	珪岩
28	敲打器類	D16	I	93×55×40	290.0	安山岩
29	〃	C 4	V	93×128×54	875.0	珪岩
30	〃	B 7	V	(122)×(53)×(32)	(180.0)	安山岩
31	台石・敲石類	A 7	V	131×114×40	930.0	〃
32	〃	土塊	I	(143)×(106)×(37)	(905.0)	砂岩
33	〃	D19	I	(66)×53×16	(75.0)	凝灰岩
34	〃	B 8	I	175×138×77	2,509.0	安山岩
35	〃	D 5	I	309×291×74	5,958.0	〃

石製品 (Fig. 64)

2	垂飾	D12	V	49×37×25	85.7	蛇紋
3	〃	D 4	V	(34)×(23)×(15)	(5.5)	砂岩

Ⅶ．総　　括

a．遺　構

(1) 検出遺構の概要

今回の調査によって、フラスコ状ピット　2，土壙　7，Tピット　9，焼土　3の合計21の遺構が検出された。いずれも、出土土器が示す年代（縄文時代中期中葉）と大きく隔たるものではないとみられるが、Tピットについては、掘り込み面の観察等（V_c参照）から若干前後するものがあるように考えられる。

土壙として分類したものは、性格不明の中型ないし小型のピットを一括したものである。この中には墓壙としての性格を有するものも含まれているとみられる。

土壙の中でも最も特徴的で、かつ興味深い出土状況を示していたものにP4（Fig. 15～18）がある。小竪穴の上部の窪みを利用した作業址（P4上層遺構）では、台石と扁平打製石器がセットで出土しており、遺跡における性格の一端を示す証左として注目される。

本遺跡のTピットは、比較的小型で深さも、さほど深くないものである。検出されたTピットには概ね、2つのタイプがある。P2・10・12～17とP6の両者である。

前者は、長円形・溝状で、後者は、円形に近い楕円形のプランを有する。P14とP6の重複関係から後者が前者よりも若干、後出のものである可能性がある。

検出された3ヵ所の焼土は、いずれも野外における地床炉とみられる。

フラスコ状ピットについては、後述する。（宮）

(2) フラスコ状ピットについて

フラスコ状ピットは、今回の調査で2基（P3・P5）検出された。

両ピットともに開壙部は卵円形を呈し、筒状の頸部を有し、胴部壁面は幾分長く、壙底部の径が2m前後で大型のものである。P3とP5は、いずれも壙底部に皿状のピット、壙底部直上壁面に複数の横穴、覆土が埋め戻された点で共通している。P3からは、壙底面より大岱沢A遺跡Ⅱ類の完形土器、P5からは、覆土より同類の土器片が出土している。

大岱沢A遺跡Ⅰ・Ⅱ類の時期に相当するフラスコ状ピットの検出例は多く、小岱遺跡，新道4遺跡，サイベ沢遺跡，権現台場遺跡，臼尻B遺跡，栄浜1遺跡などがある。

i）　形態・付設ピット

新道4遺跡，栄浜1遺跡のものは、開壙部が小さく、頸部の括れの少ない、断面が三角形を呈するものが多い。権現台場遺跡のものは、開壙部と壙底部の径の差違がさほどなく寸胴型で、頸部の括れるものもみられる。その他、臼尻B遺跡のものは、壙底部の径に比して浅いものとなっている。このように、フラスコ状ピットの形態は様々であるが、本遺跡の調査で検出されたピットに類似する例は以外に少ない。

中央に皿状のピットを有する類例は多く、その機能については、柱穴などが考えられている。

本遺跡のフラスコ状ピットに付設するものに、特徴的な横穴の存在がある。壁面の横穴については、報告例が少ない。栄浜1遺跡では114基のフラスコ状ピットが検出され、そのうち17基が横穴を有するものであり、川汲遺跡でも1例検出されている。この横穴は、当該ピットと同様に、個数は1～7，中央より放射状に伸びるものである。岩手県卯遠坂遺跡（註1）の例では、壁面全体に横穴が穿たれており、横穴は幾分小さめで、ラセン状に配置されている。この横穴については、壙底部の皿状ピットと同様、機能的な面での存在などが考えられるが、詳細は定かではない。

ii）　遺跡内でのフラスコ状ピットの分布

フラスコ状ピットの分布、特に集落内での位置づけなどは、当該ピットの性格を考える上で重要である。永瀬福男氏（註2）の論考では、住居群の外側に群集する例（Aパターン），住居群内と住居内に付設されるものが混在する例（Bパターン），大部分が住居内に付設される例（Cパターン）に分類し、秋田県下での類例、縄文時代における時期的な考察などを加えている。

北海道南西部での各遺跡の検出例を当てると、Aパターンの遺跡に新道4遺跡A地区・御幸町遺跡，Bパターンの遺跡に臼尻B遺跡・権現台場遺

跡が該当し，Cパターンの遺跡については見当らない。但し、臼尻B遺跡・権現台場遺跡については、Cパターンに該当する可能性もある。

iii） 出土遺物

本遺跡のP５の壙底面から完形土器が出土し、炭化物・骨片の分布もみられる。当該ピットの遺物の出土状況と類似する例は、栄浜１遺跡・臼尻B遺跡などにもあり、その他、遺物を投棄する例は東北地方等にみられる。但し、一般的には、覆土と混在する例が多いようである。

iv）まとめ

フラスコ状ピット、あるいは、それに類するものは、一般的には、縄文時代前期～中期に多く存在し、その分布は、関東～北海道南西部にみとめられる。

性格については、貯蔵穴としてよさそうである。但し、墓壙あるいは、投棄施設として転用されている事例も少なくない。

本遺跡から検出されたフラスコ状ピットについては、縄文時代中期中葉のものに相当する。P５は、墓壙として転用された可能性が高い。（松本）

註

（註１） 狩野敏男・石川長喜・中村清也ほか 1979 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ 岩手県教育委員会・日本道路公団

（註２） 永瀬福男 1981 「秋田県下におけるフラスコ状ピットについて」 『秋田地方史論集』 半田教授退官記念会編

b．遺 物

(1) 土器について

本遺跡出土の土器片の総数は、約6,300点，細片も多く、他の遺跡と比較して決して多い数量とは言えないが、資料の内容は、かなり密度の濃いものである。

調査区をみると、遺跡本体末端とおもわれ、従って将来的には今回の調査資料と異なるものが得られる可能性もある。

土器の分布は、北東側と南西側のブロックを形成しており、南西側では遺構の配置とほぼ一致し、その周辺に広がっていることから、遺構の性格と密接な関係をもっているものと思われる。

本遺跡の土器群は、縄文時代中期中葉、桧山地方では、十兵衛沢遺跡Ⅲ類（渡辺他、1959）に相当し、その幾分新しい段階のものかとも考えられる。

その他町内では、小砂子遺跡（1979）Ⅳ群の一部，小岱遺跡Ⅰ群ａ・ｂ類の一部が大岱沢Ａ遺跡Ⅰ・Ⅱ類に相当する。さらに桧山では、元和第２・第５地点Ｄ群の一部，元和７遺跡第２群一類の一部，渡島では、白坂第１・第６・第８地点第９群土器の一部，森越遺跡第Ⅲ群第一段階・第二段階の一部などがこれに相当する。

北海道では、縄文時代中期中葉の土器として、サイベ沢Ⅶ式土器が知られている。大岱沢Ａ遺跡Ⅰ・Ⅱ類は、沈線文，地文が斜縄文のものが主体を占め、胴部文様帯を有するものは、ほとんどみられない。従って本類はサイベ沢Ⅶ式の範疇では、より新しい段階の土器群と考えられる。

現在、道南では、縄文時代中期の様相は、かなりはっきりしてきているが、所謂円筒上層式の最終末については、かなり混乱しており。明確な編年が確立されていない。本遺跡の資料がその研究にいくらかでも役立てば幸いである。 （鈴木）

(2) 石器・石製品について

石器・石製品については前述しているとおりである。ここでは、そのうち最も特徴的なものについてのみ若干言及したい。

本遺跡出土の礫石器で最も特徴的なものは、扁平打製石器である。従来から石包丁・打製石包丁形石器・擦石・半円状扁平打製石器等さまざまな名称で呼ばれているものであるが、なかなか適切な名称がみあたらない。したがって研究者間においても統一名称が定着していないのが実状である。

扁平打製石器は、「扁平な礫の周縁・縁辺を打ち欠いて整形し、機能面や刃部を作出」しているものであり、機能面がU字形の純角をなしているのが一般的である。分布は、道南と東北地方北部が中心であり円筒土器の分布と概ねオーバーラップしている。特に終末期の円筒土器に多数伴出しており、本遺跡もその例にもれない。

いわゆる北海道式石冠と呼ばれているものが２点出土している。「直線状の一縁辺とアーチ状に膨らむ対辺をもち、直線部が磨り面となっているもので、共に楕円状の礫を打割し、打割面を機能面

としている」ものである。いずれも、楕円形あるいは山形に敲打によって全体が調整されている。

分布は、道央・道南・東北地方北部などが中心で、これも円筒土器と概ねオーバーラップしているが、前述した扁平打製石器よりも若干分布が広い。時期的にも若干古い段階から存在するものとみられる。

機能面の幅から両者の違いを考えてみた場合、前者は、0～2cm（0とは刃部を有するもの）であるのに対して、後者は、4～5cm前後と非常に大きい。同一の機能を有しているものとすれば、前者は後者に対して著しく効率の悪い道具であるといえよう。高橋正勝氏（1974）も述べているように効率の良いものと悪いものを同時に持っていたとは考えにくく、両者に機能・用途の違いがあったことを示すものであろう。したがって、前者は後者よりも切る，削る，掻くといった機能がより強く、後者は、擦り潰す，敲くといった機能が主体であったと考えられる。

次に、本遺跡から1点出土したヒスイの大珠について若干、言及したい。

図示（Fig. 64）したヒスイの大珠は、いわゆる緒締型（安藤文一1983）に属するもので、原石の両端部を若干截断して整形し、研磨段階を経て穿孔して完成させたものとみられる。

素材の長軸を貫通する孔は、中央部よりやや一方に偏在している。これは、他の多くのヒスイの大珠に一般的にみられる傾向であり、一方向穿孔（開孔部径が終孔部径より大きい、いわゆる管錐穿孔）とともに「独特な社会的規制が働いていた」と考えられる注目すべき点である（八幡　1940，安藤　1983）。

一方に偏在する貫通孔については、佩用する際の装着安定感にかかわるものとみられる。したがって、紐づれの痕跡も偏在する側に観察されるのが一般的であるが、本遺跡出土の当該資料には、どの部分にも紐づれによる痕跡が認められない。したがって佩用された期間が、きわめて短期間であったのか、佩用前のものと考えられる。これは本遺跡の性格の一端にもかかわる問題であるかもしれない。

本遺跡出土のものは、長さ5cm程のものであり、ヒスイの大珠としては、最も小形に属する。10cmを越えるような大形から中形のものは、北陸・中部・関東地方等で出土しているのみであり、東北地方や北海道では、小形のものがほとんどである。

ヒスイの原石産地をはじめとする生産文化圏から離れた遠隔地であるためと考えられる。

筆者管見の限り東日本を中心に総数約250点弱の資料が出土しているものとみられる。北海道では、本遺跡例を含め7点出土している（註1）ようであり、多くは鰹節型を呈するものである。当該資料は、縄文時代中期のものが主体であるが、本遺跡例を除く道内出土のものは、ほとんどが縄文時代の後期のものとみられる。やはり、これもヒスイの原産地をはじめとする生産文化圏から離れた遠隔地であることに起因するようである。現状では、旭川市出土の全長76mmの当該資料（沢　四郎 1959）が道内最大のものとみられる。

本遺跡出土のヒスイの大珠は、D12GridV層から出土した。出土位置の東側数十センチが未調査区であり、将来この東側部分を再び調査する機会がおとずれる暁には、大きな期待がかけられよう。

（宮）

註

（註1）　大正時代に旭川の練兵場建設の際に出土（沢 1959）した他、ニセコ町滝台（駒井編 1957），同町曾我北栄（駒井 1952），深川市音江向陽（駒井 1955），小樽市鮏澗（小樽市立博物館蔵，未報告）から出土している。

松下　亘・沢　四郎・竹田輝雄氏等より御教授教授賜わった。

c．遺跡の性格等について

大岱沢A遺跡の今回の調査区は、本遺跡の主体部ではなく西側縁辺部と考えられる。したがって、主体は東側の未調査区であるとみられる。おそらく数基～10基を越える住居址群が包蔵されているのであろう。

遺構については詳述したように、貯蔵穴としてのフラスコ状ピット，貯蔵穴を墓壙に転用したフラスコ状ピット，墓壙を含む性格不明の土壙，陥穴としてのTピット，野外における地床炉である焼土等が検出されたように、集落の周辺における貯蔵施設，野外におけるさまざまな作業の空間，

廃棄空間，あるいは、集落の周辺に出没する動物の捕獲、そして一部ではあるが、最後に埋葬の場として、きわめて多岐に亘るものである。

遺跡の形成が、きわめて限定された時間の中でのものではあるが、数世代に亘り縄文時代人の生活が営まれたものとみられる。

Ｐ５とＰ９あるいは、Ｐ６とＰ14の重複事例を引くまでもなく検出遺構にも時間差があったことが明確である。

大岱沢Ａ遺跡の全容は、遺跡主体部の調査によって、はじめて明らかになるものと考えられる。

（宮）

参 考 文 献

青森県埋蔵文化財センター
1987 「縄文時代後期の集落跡から出土した硬玉製大珠と加工痕のある水晶」『埋文あおもり』

秋元信夫他 1979 『大面遺跡』 青森県教育委員会

安藤文一 1983 「翡翠大珠」 『縄文文化の研究』 5 雄山閣

市川金丸他 1974 『中の平遺跡』 青森県教育委員会

一町田工他 1983 『一ノ渡遺跡』 青森県教育委員会

入田整三 1940 所謂「玉」について 『考古学雑誌』 第13巻第６号

大沼忠春他 1976 『元和』 乙部町教育委員会

〃 1977 『元和(続)』乙部町教育委員会

〃 1985 『建川１遺跡・新道４遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

大場利夫他 1955 『桧山南部の遺跡』 上ノ国町教育委員会・江差町教育委員会

小笠原忠久 1985 『臼尻Ｂ遺跡』 南茅部町教育委員会

小笠原忠久・鈴木正語 1979 『ハマナス野遺跡調査報告書』 南茅部町教育委員会

小笠原忠久・松岡達郎 1981 『ハマナス野遺跡Ⅷ』南茅部町教育委員会

小笠原忠久 1984 『ハマナス野遺跡 Ｘ』 南茅部町教育委員会

小笠原忠久 1985 『川汲遺跡』南茅部町教育委員会

小笠原幸範他 1977 『熊沢遺跡』 青森県教育委員会

鬼柳 彰他 1985 『上ノ国町 豊田西遺跡』北海道埋蔵文財センター

〃 1985 『上ノ国町 小岱遺跡』 北海道埋蔵文化財センター

加藤邦雄編 1979 『小砂子遺跡』 上ノ国町教育委員会

加藤晋平他編 1983 「道具と技術」 『縄文文化の研究』 7 雄山閣

工藤 大他 1979 『砂沢平遺跡』 青森県教育委員会

工藤竹久 1977 「北日本の石槍・石鏃」 『北奥の古代文化』 第９号 北奥古代文化研究会

久保 泰他 1983 『白坂』 松前町教育委員会

倉谷泰賢他 1972 『大安在Ｂ遺跡』 上ノ国町教育委員会

駒井和愛 1952 「日本における巨石記念物(続々)」『考古学雑誌』第38巻第１号

〃 1955 「北海道音江の環状列石」『考古学雑誌』第41巻第１号

〃 1957 『考古学概説』日本評論社

佐藤忠雄他 1975 『館崎』 福島町教育委員会

沢 四郎 1959 「大珠と土製玦状耳飾の新例」『考古学雑誌』第45巻第１号

高橋正勝 1974 「北海道における擦石・石冠について」『北海道の文化』22号 北海道文化財保護協会

田原良信 1979 『見晴町Ｂ遺跡』 函館市教育委員会

田原良信・鈴木正語 1986 『サイベ沢遺跡』Ⅱ 函館市教育委員会

千代 肇 1971 『川汲ハマナス野遺跡調査報告書』 南茅部町教育委員会

野辺地初雄・前田正憲他 1981 『椴現台場遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会

畠山 昇他 1981 『山崎遺跡』 青森県教育委員会

畠山昇他　1982　『槻ノ木遺跡』　青森県教育委員会
〃　1977　『三内沢部遺跡』　青森県教育委員会
原田淑人　1940　「我国の硬玉問題について」『考古学雑誌』　第13巻第6号
樋口清之　1940　「垂飾考」　『考古学雑誌』　第13巻第6号
樋口清之　1948　「日本の硬玉問題」　『上代文化』　第18輯
桧山農業改良推進委員会他　1968　『上ノ国町土壌調査報告書』　北海道農業試験場
藤田　登　1985　『御幸町』　森町教育委員会
松崎岩穂　1956　『上ノ国村史』　上ノ国村役場
〃　1962　『続上ノ国村史』　上ノ国村役場
三浦孝一・柴田信一　1983　『八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書』　八雲町教育委員会
峰山　巌・大島直行他　1975　『森越』　知内町教育委員会
三宅徹也　1983　『和野前山遺跡』　青森県教育委員会
村越　潔　1976　「円筒土器に伴なう特殊な石器」『東北考古学の諸問題』　寧楽社
八幡一郎　1938　「先史時代の交易―硬玉と軟玉―」『人類学・先史学講座』上・中・下　雄山閣
〃　1940　「硬玉製大珠の問題」　『考古学雑誌』　第13巻第5号
山田昌久　1983　『一戸町バイパス関係埋蔵文化財報告書III』　一戸町文化財愛護協会
渡辺兼庸他　1959　「北海道椴川、十兵衛沢、勝山館遺跡」『考古学雑誌』第44巻第4号

写　真　図　版

発掘調査状況

大岱沢Ａ遺跡遠景

調査区北東部土堤の状況(C21・C22Grid)

調査区東部土堤の状況(D18Grid)

土堤の状況とそのセクション(C22Grid)

遺跡の標準層序(E10Grid西壁)

PL. V

ヒスイの大珠出土状況(D12Grid V 層)

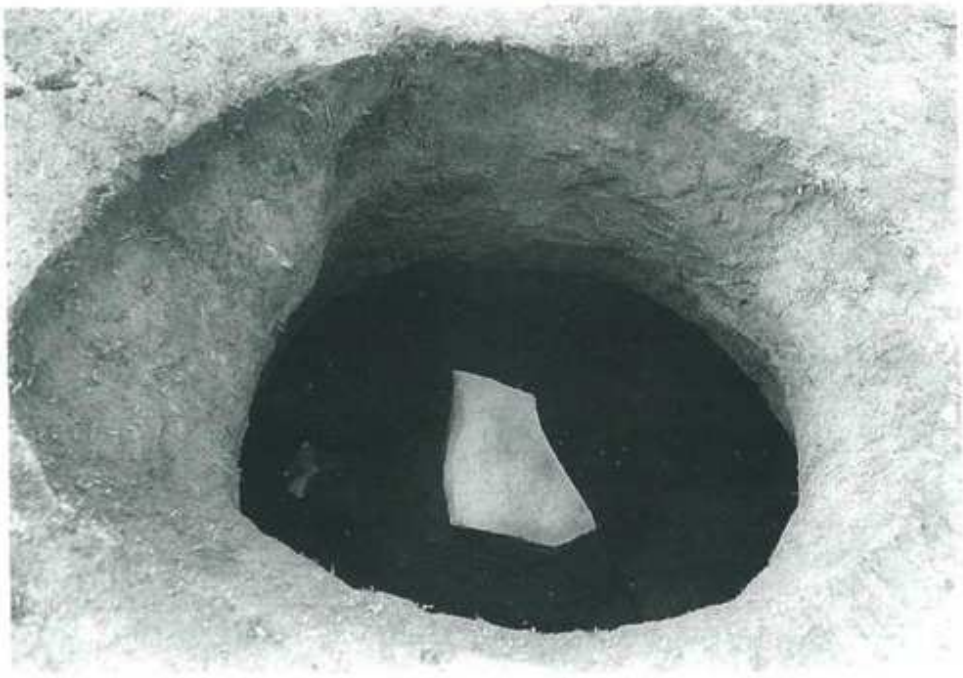
ヒスイの大珠(左), メノウの原石(右)

遺物出土状況(B 9 Grid, V層)

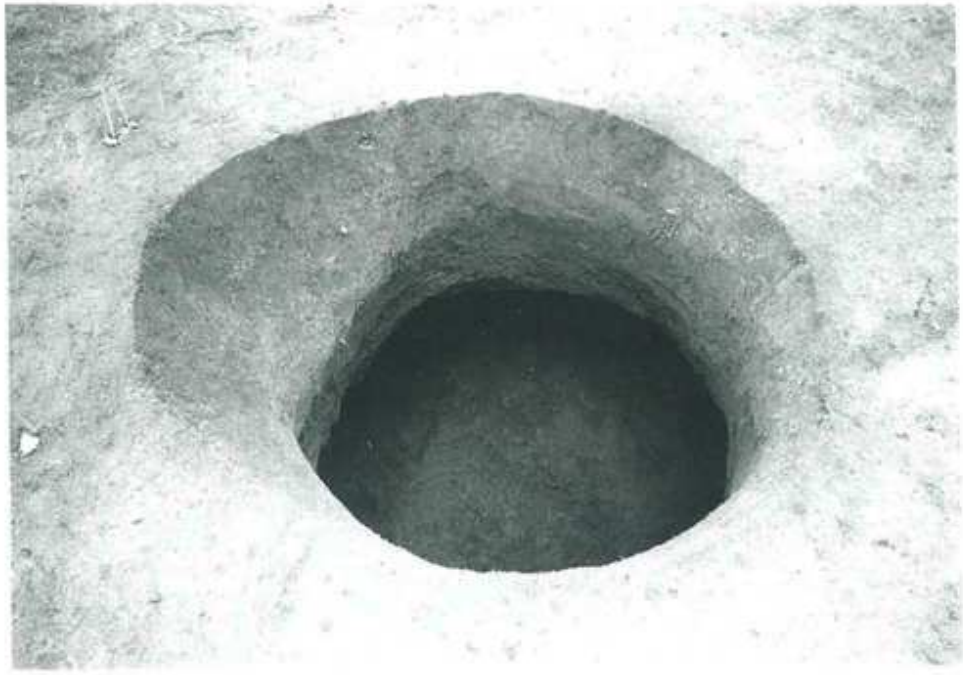
遺物出土状況(B 9 Grid, V層)

P1　遺物出土状況(B8, 9Grid)

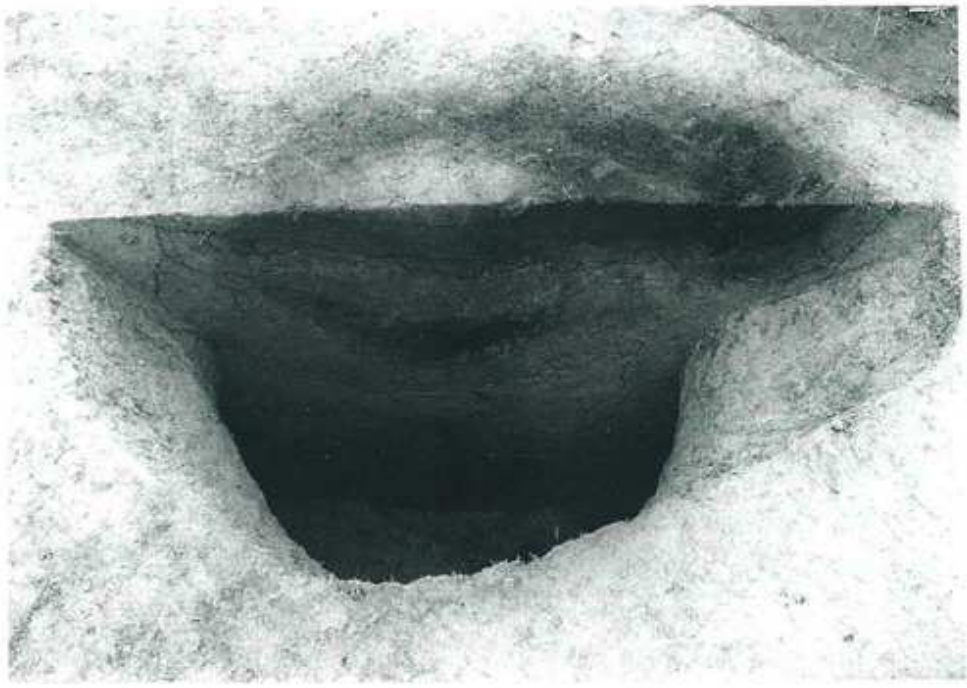
P7　遺構検出状況(B 9 Grid)



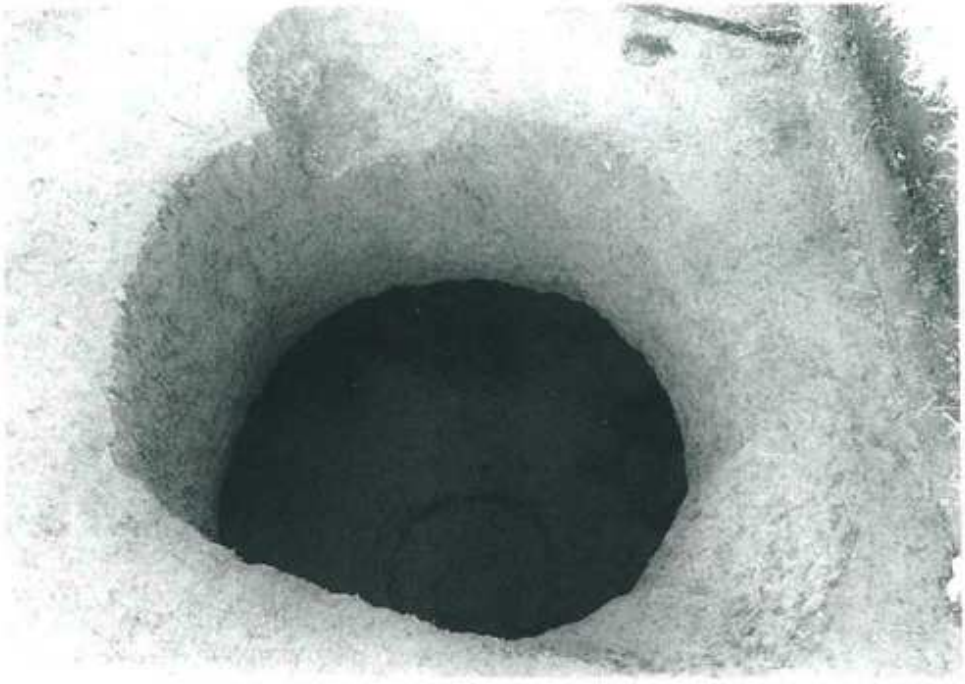
P3　覆土の大型礫出土状況(B 8 Grid)



P3　遺構完掘状況



P5　覆土堆積状況(B 8 Grid)



P5(大)・P9(小)　検出状況(D 8 Grid)

P4上層遺構　礫石器出土状況

P4　遺物伴出状況

P4　伴出遺物出土状況

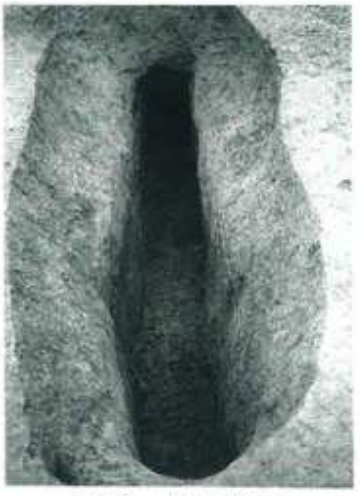
P4　完掘状況

P2　検出状況

P2　セクション

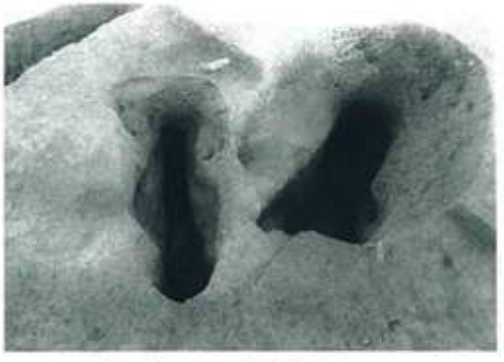
P10　検出状況

P15　検出状況



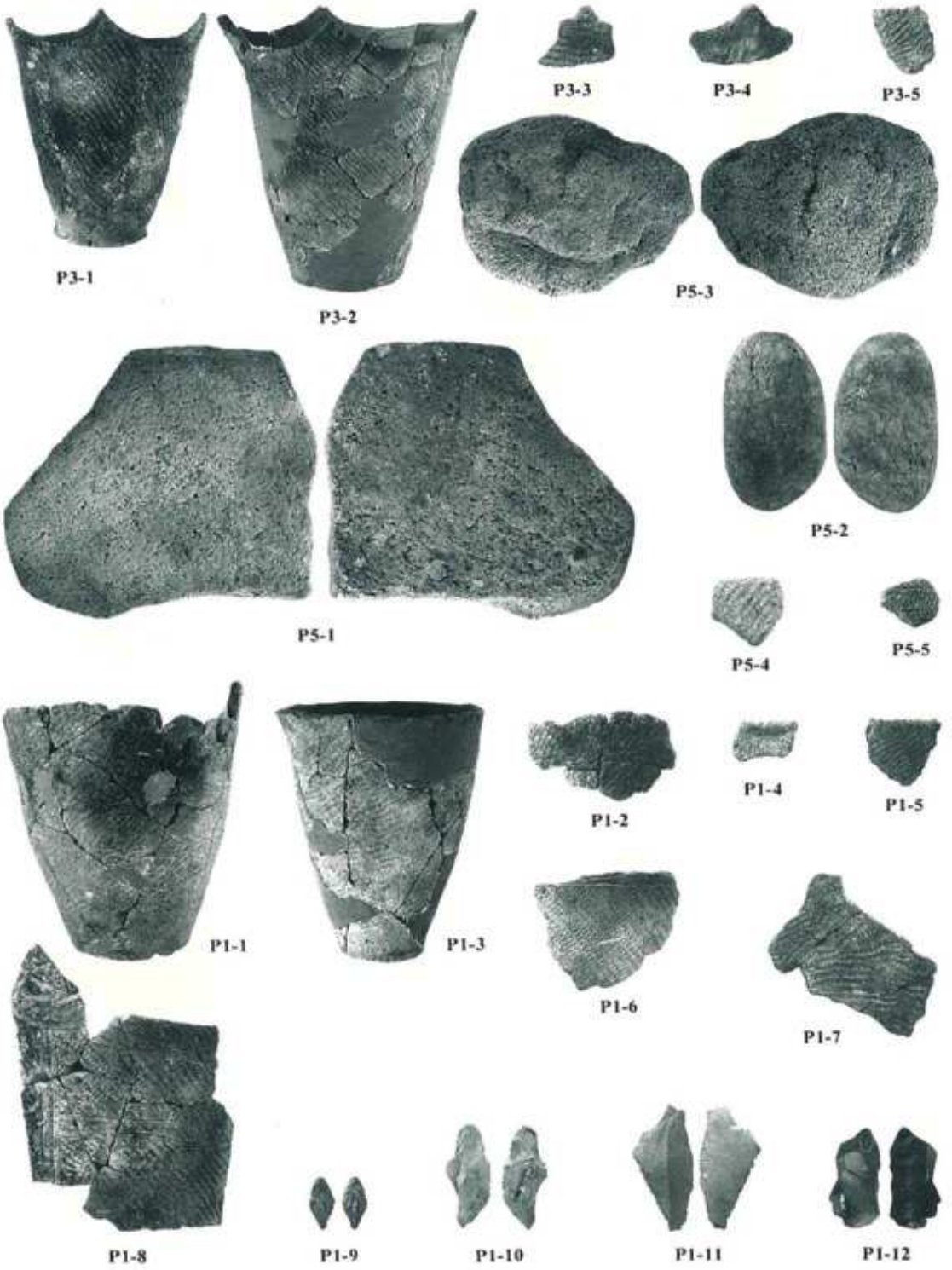
P16　検出状況

P17　セクション



P6(右)・P14(左)　検出状況

P12　セクション



フラスコ状ピットと土壙出土の遺物(Fig. 9・11・13・14)

PL. XIII

P4上層遺構1

P4上層遺構2

P4上層遺構3

P4上層遺構4

P4上層遺構5

P4上層遺構6

P4-7

P4-8

P4-9

P4-10

P4-11

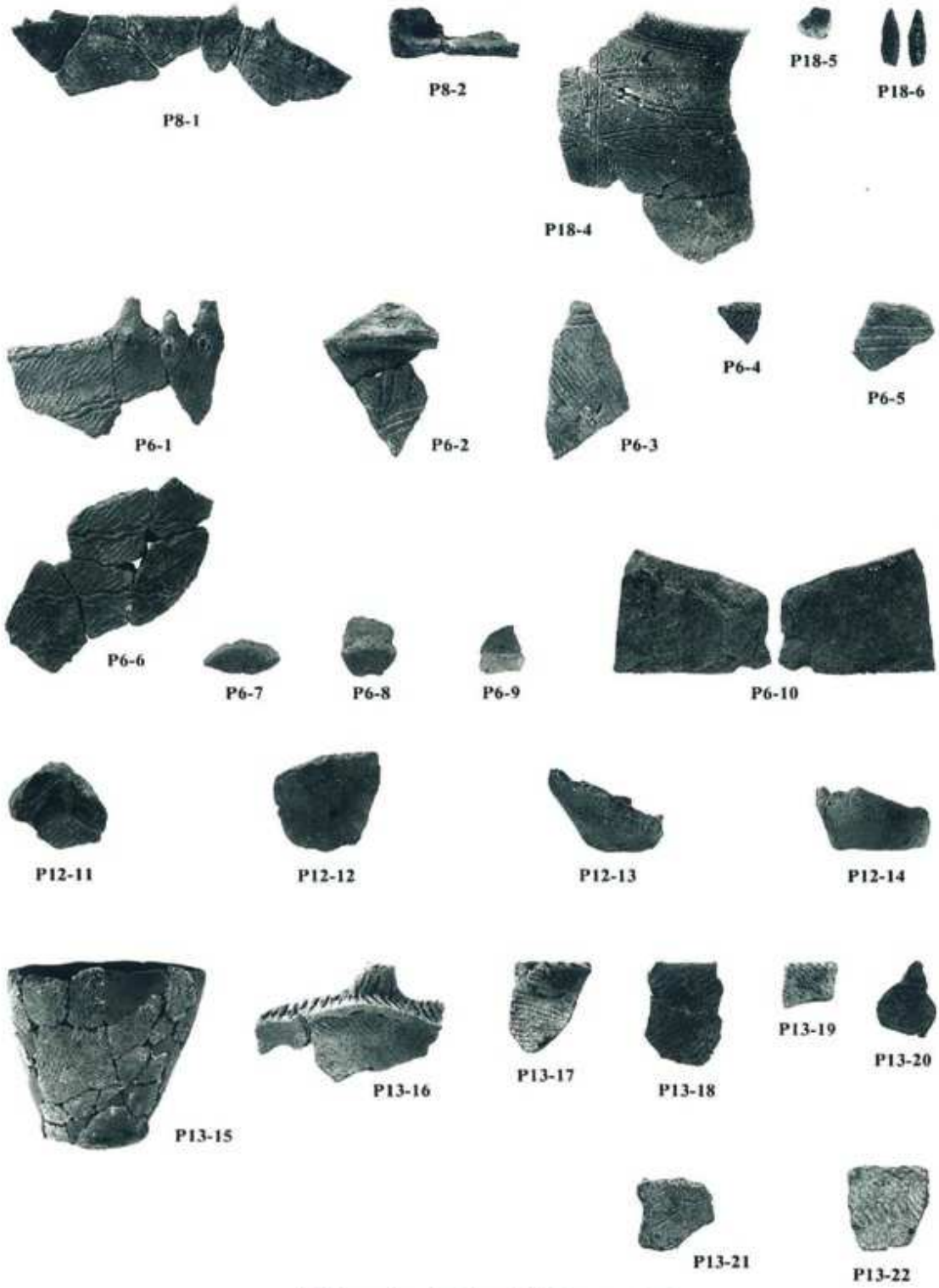
P4-12

P4-13

P4-14

P4-15

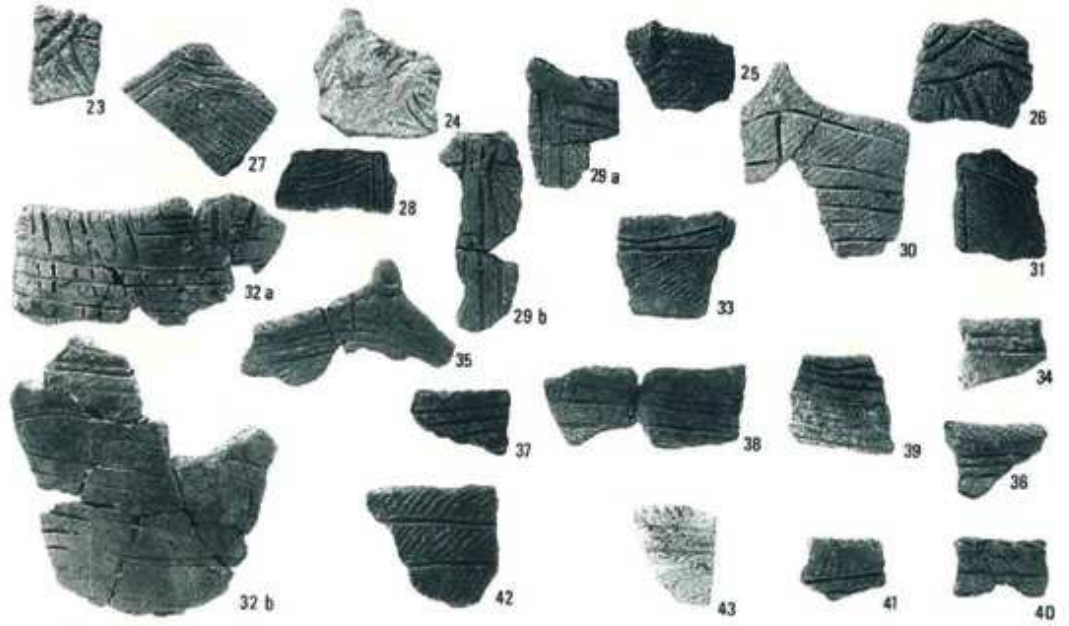
P4 出土の遺物(Fig. 16・18)

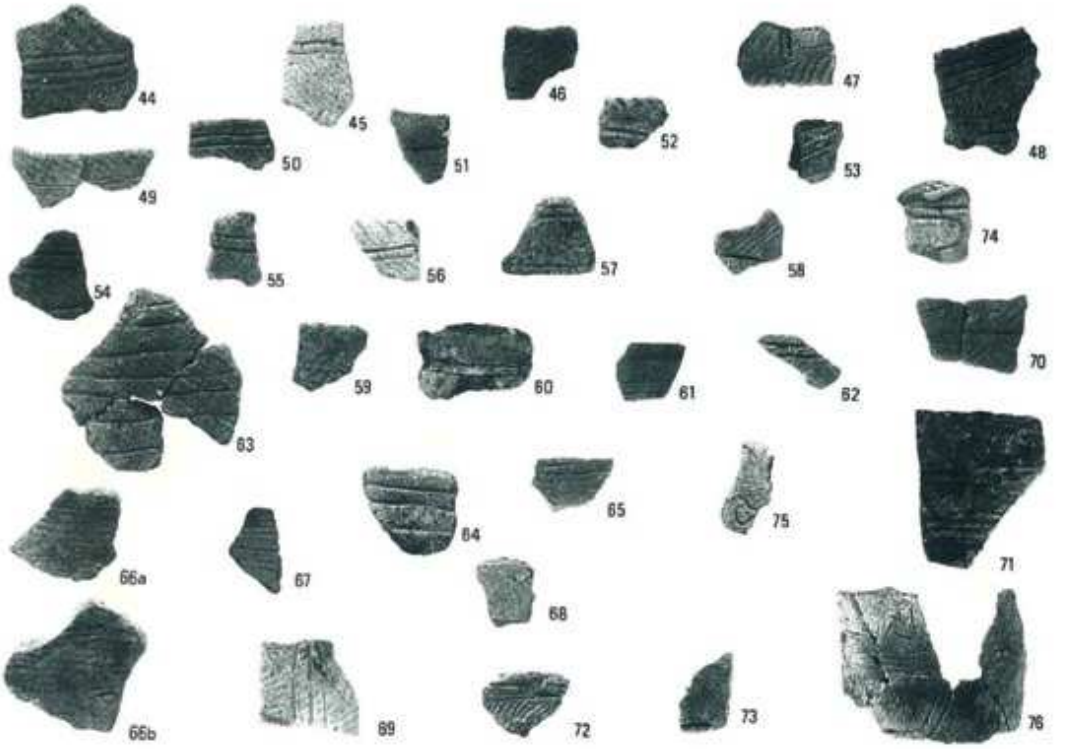


土壙とTピット出土の遺物(Fig. 23・33)

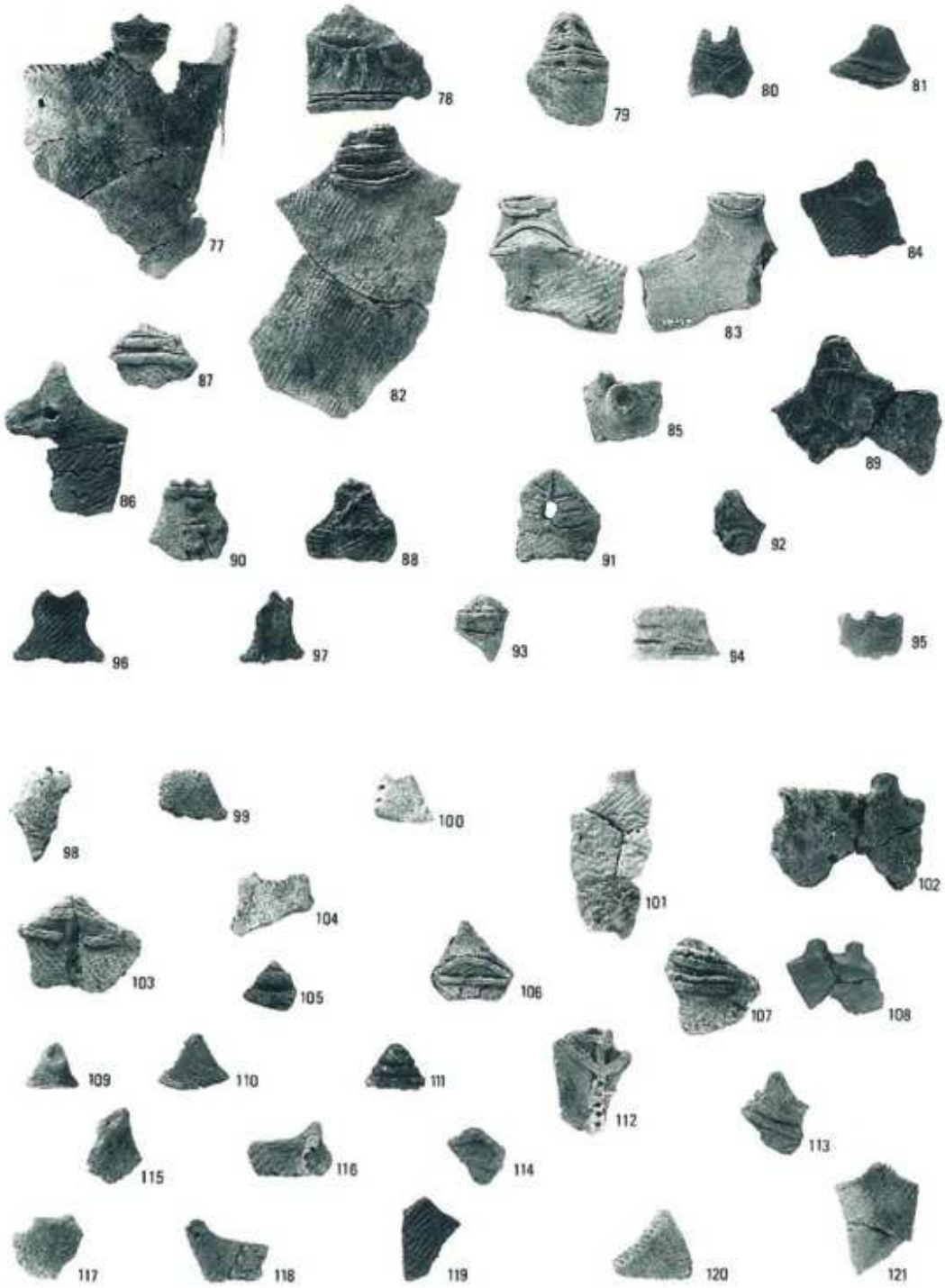
PL. XV

遺構外出土土器(Fig. 39～41)

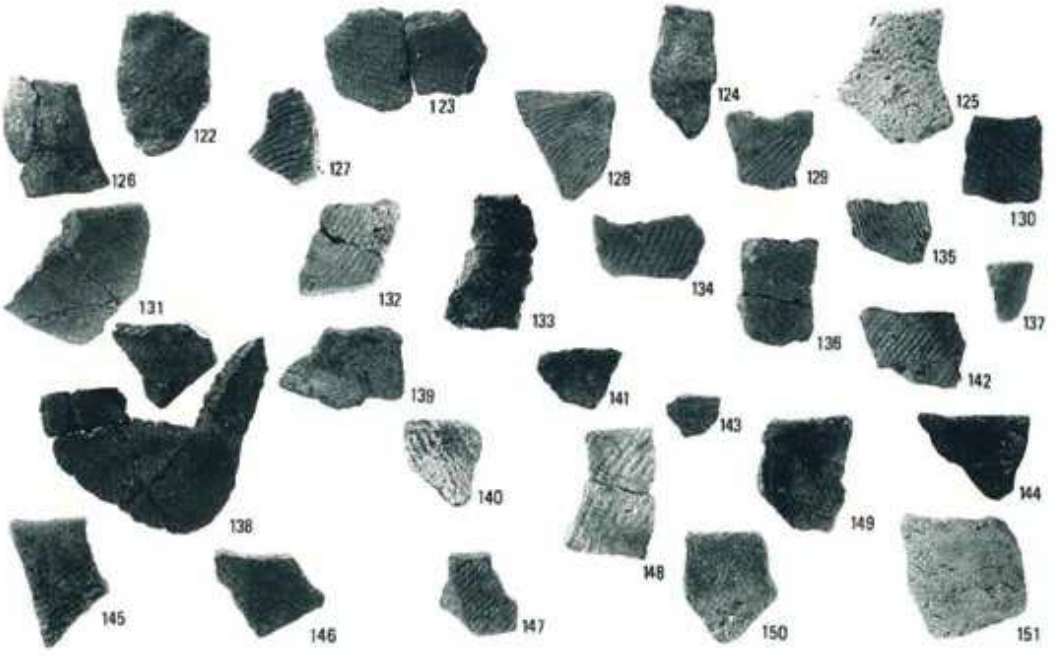


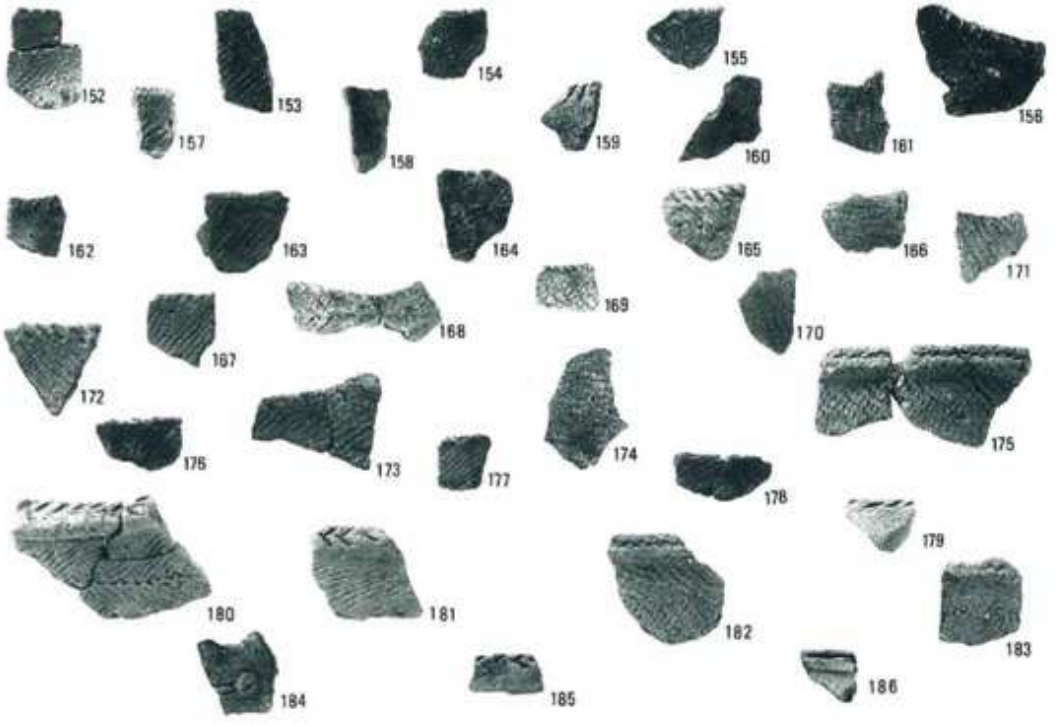


遺構外出土土器(Fig. 42・43)



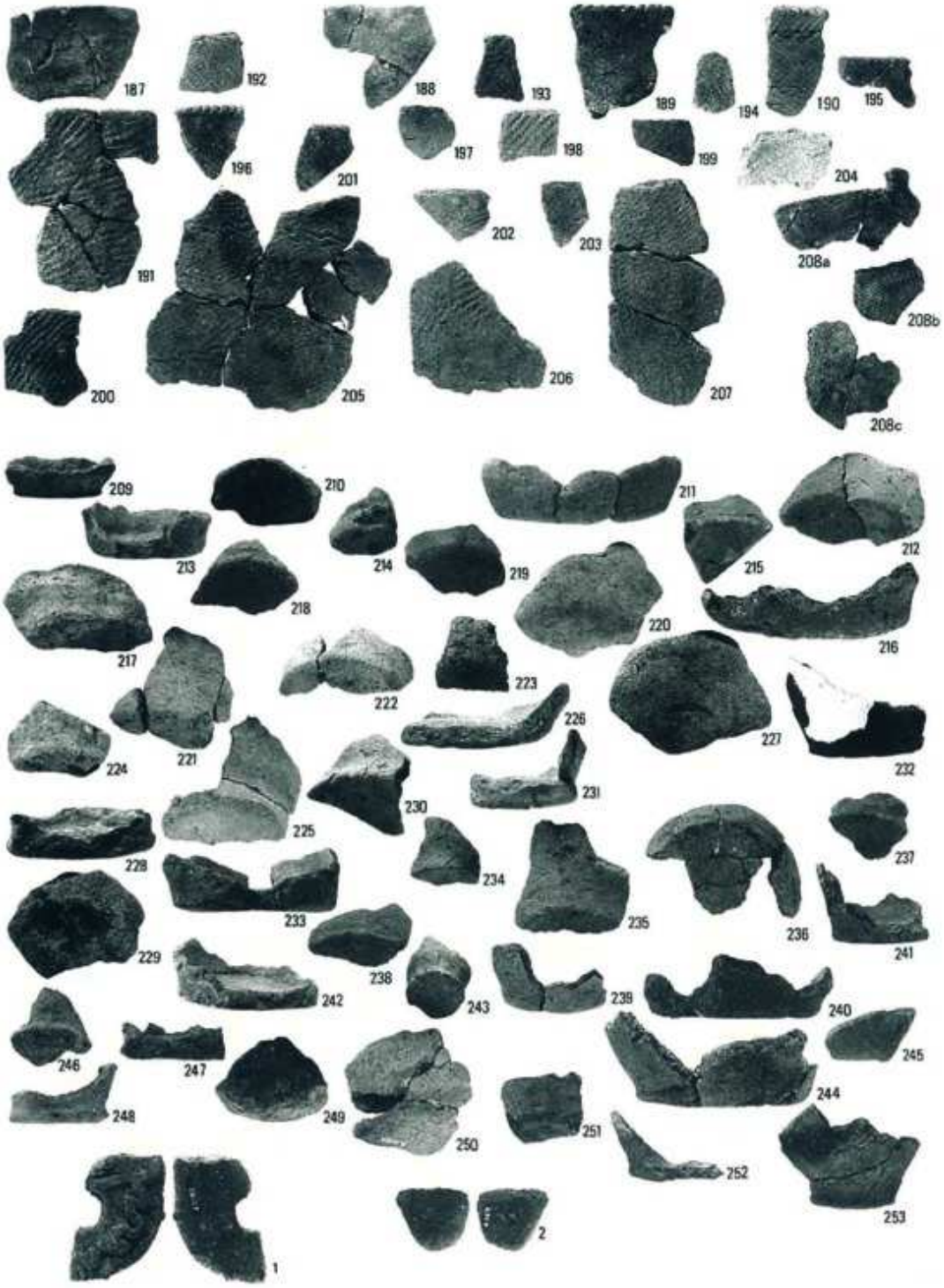
遺構外出土土器(Fig. 44・45)



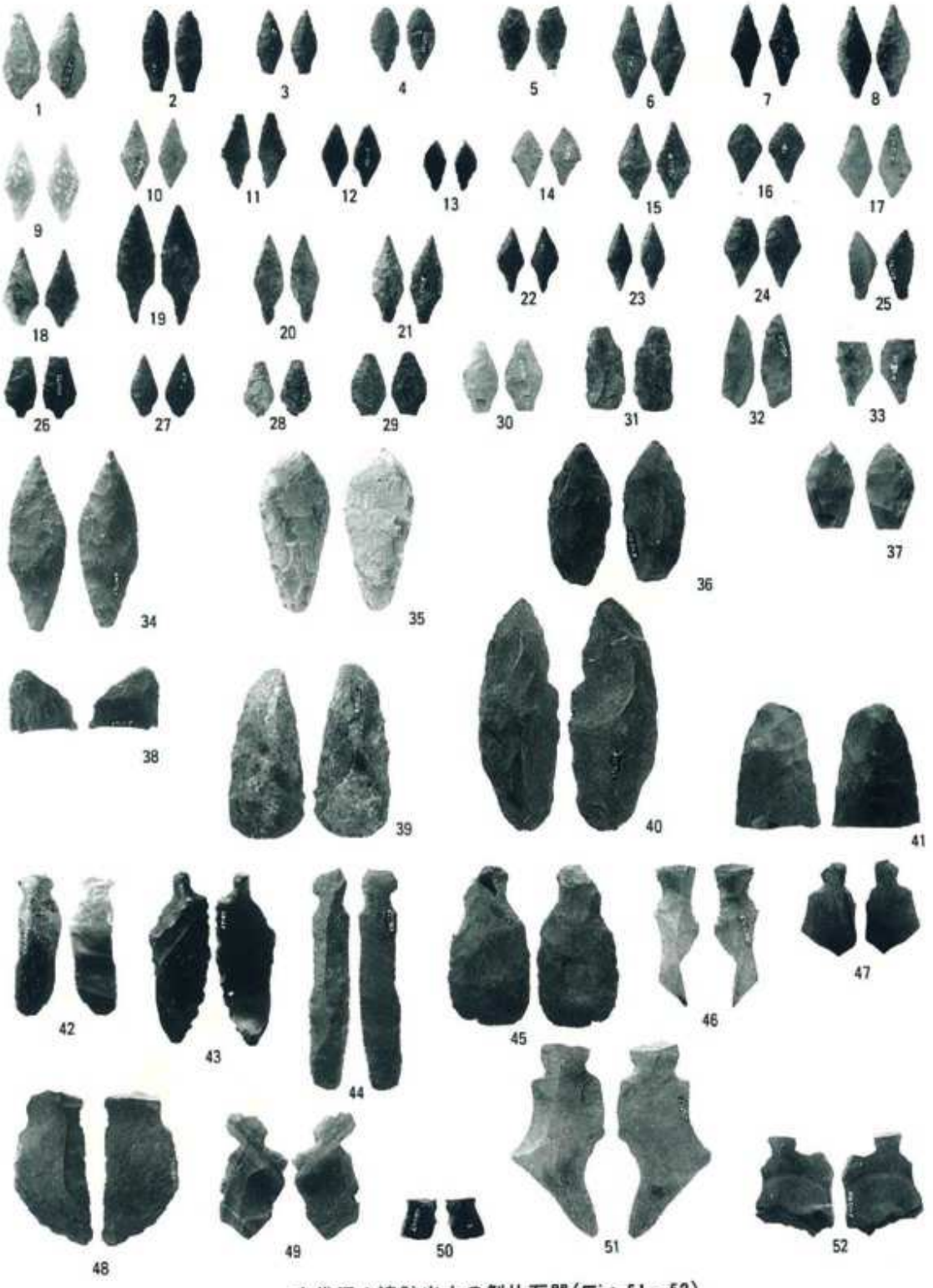


遺構外出土土器(Fig. 46・47)

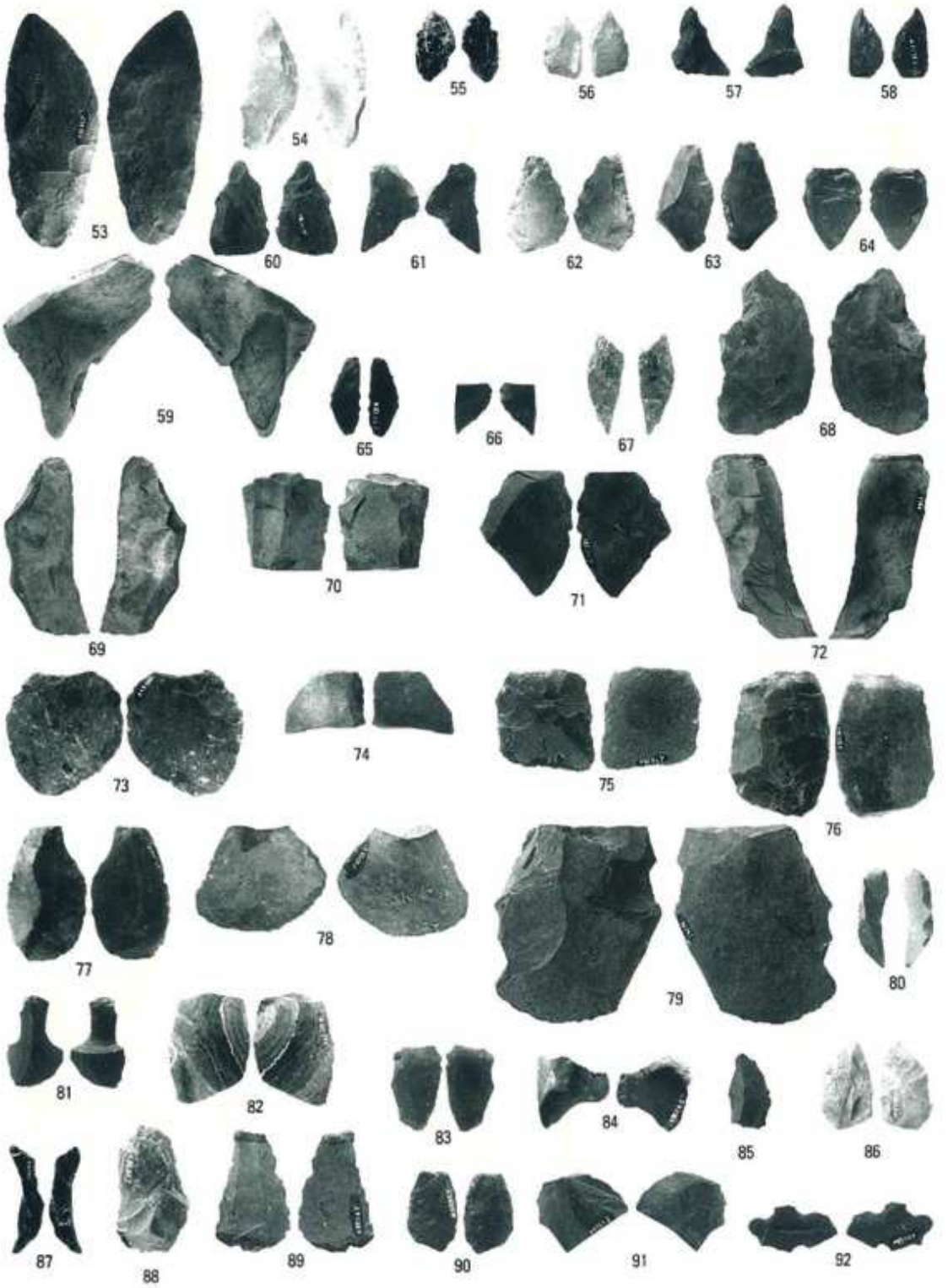
PL. XIX



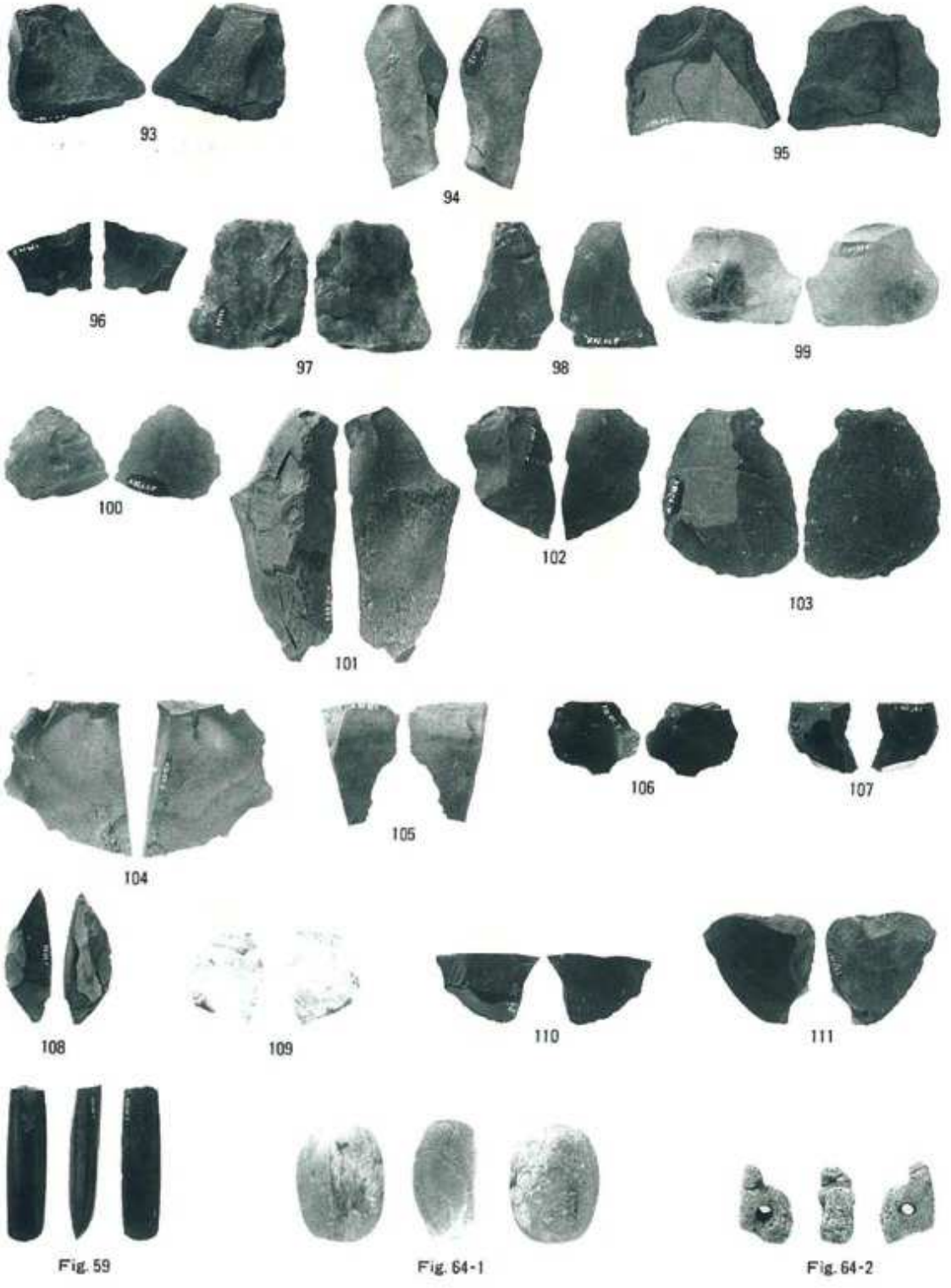
遺構外出土土器(Fig. 48・49)・土製品(Fig. 50)



大岱沢A遺跡出土の剥片石器(Fig. 51～53)

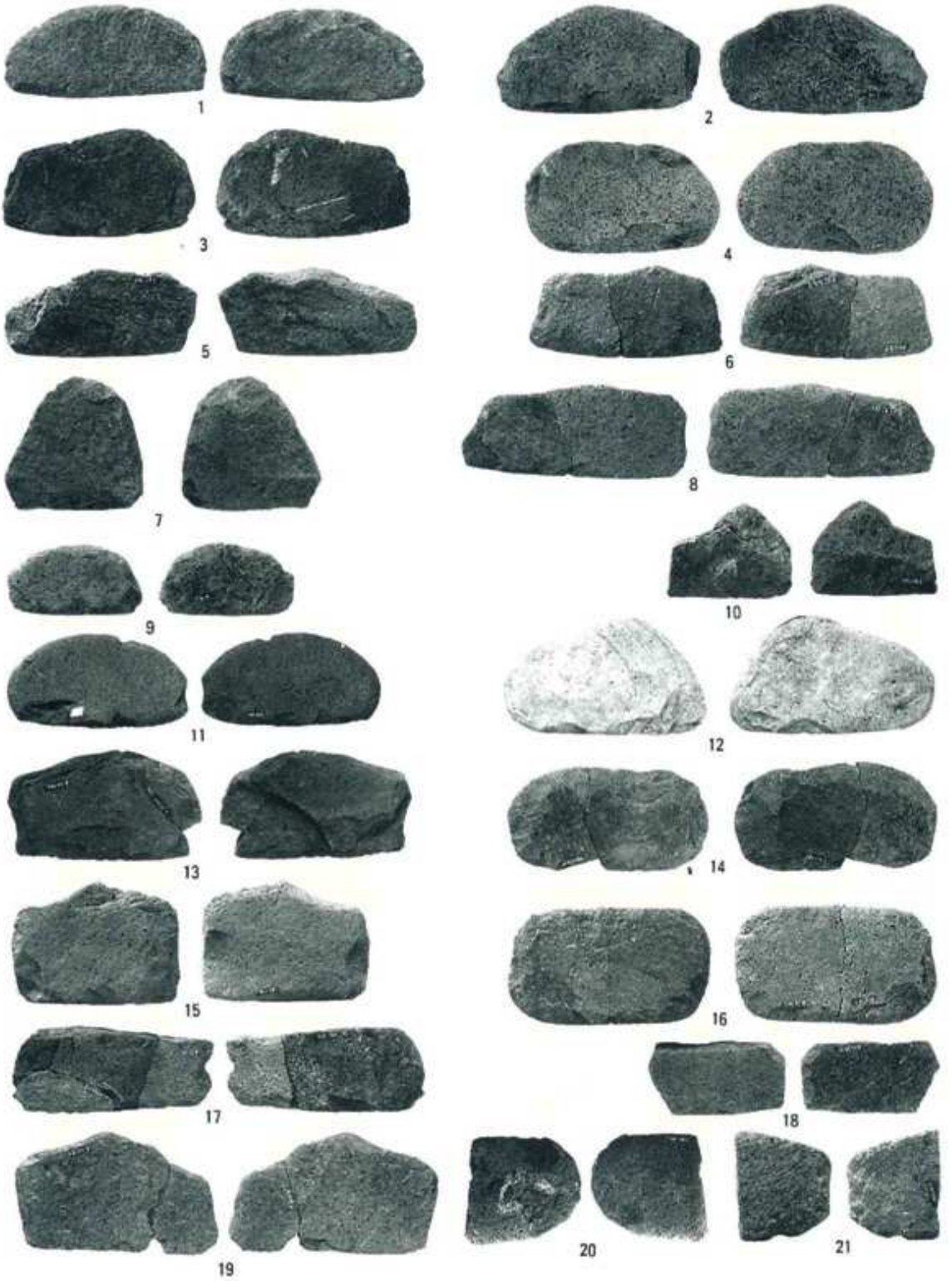


大岱沢A遺跡出土の剝片石器(Fig. 54～56)

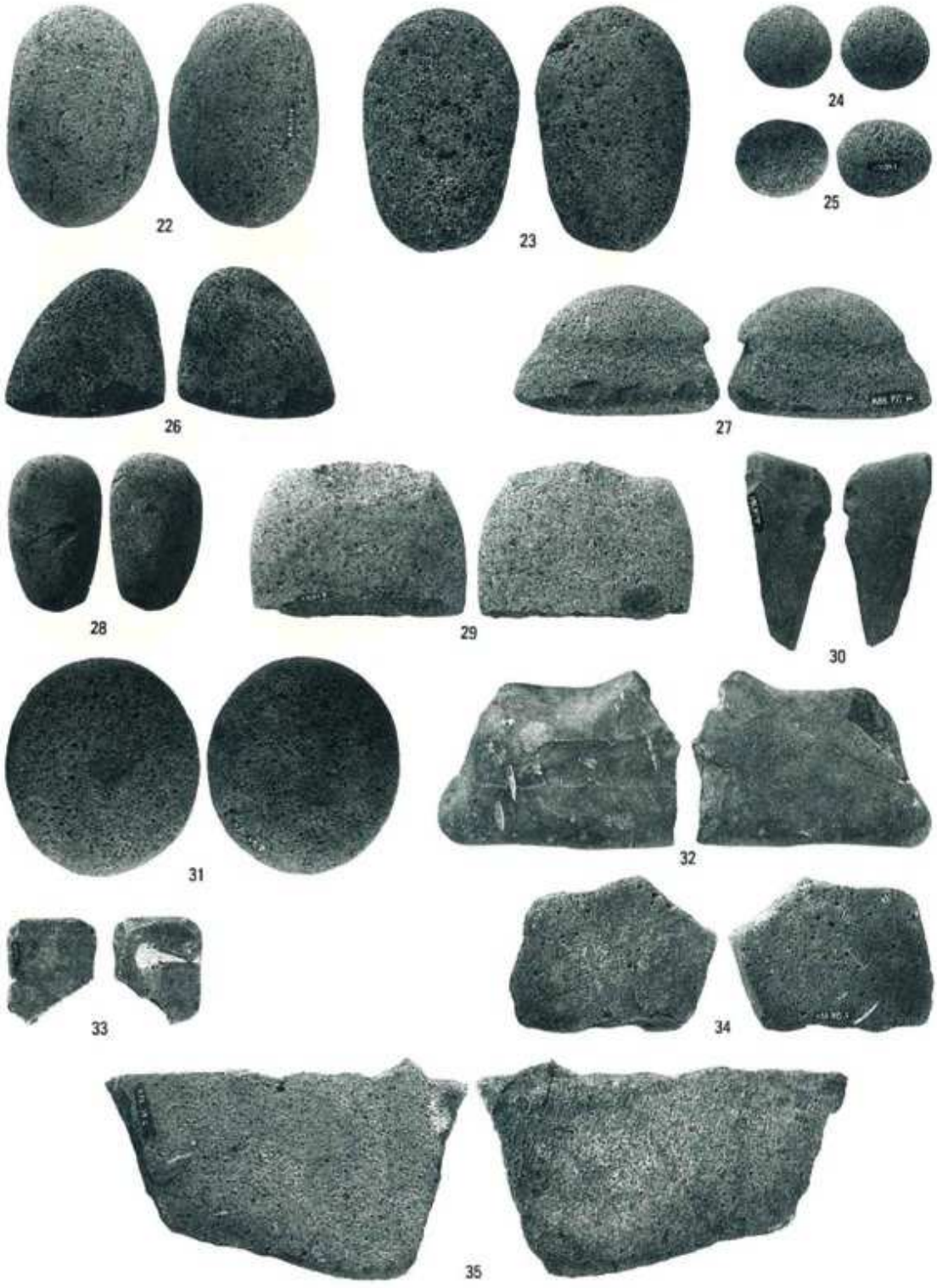


大岱沢A遺跡出土の石器・石製品(Fig. 57～59・64)

PL. XXIII



大岱沢A遺跡出土の礫石器(Fig. 60～62)



大岱沢A遺跡出土の礫石器(Fig. 62・63)

PL. XXV

大岱沢A遺跡出土のメノウの原石(上)と剝片(下)

大岱沢A遺跡

—上ノ国町八幡野第1地区道営農免農道
整備事業用地内遺跡発掘調査報告書—

印刷　昭和62年3月20日

発行　昭和62年3月25日

上ノ国町教育委員会

北海道檜山郡上ノ国町大留100

印刷所　㈱長門出版社　印刷部